月刊ナイトバグ　桜前線迎撃大宴会型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 4月号
初桜
折しも今日は
よき日なり
桜特集
11人合作★奇跡のリレー漫画
リグりれ！
東/緑/ポマギッシュ･ポマーダ/長閑/
こぶろう/紅/亜斗/草加あおい/ぶーわ/
しっぷ/斑
読切り作品
SS　:Salka/くろと/悠奈/夏樹　真
漫画:Step/preludenano/羅外/ぼこ
斑/豆板醤/千C(夜騎士)/
連載作品
SS　:如月翔/壁々
漫画:HOUSE/ひどぅん/草加あおい/怒羅悪/

# 月刊ナイトバグ　2010年4月号

Cover design　小崎

## 目次 (3p)

しょきっ！

# 第一回 カルテッ討論

by. preludenano

みんな今日は来てくれてありがとう

今日集まってもらったのは最近頻繁に観測される

「価値観の押し付け」について、

みんなで話し合いたいと思ったからなんだ

かち

キュッ

※みすちー調べ

他にも男性化

ex. もみじ 星

変態扱い

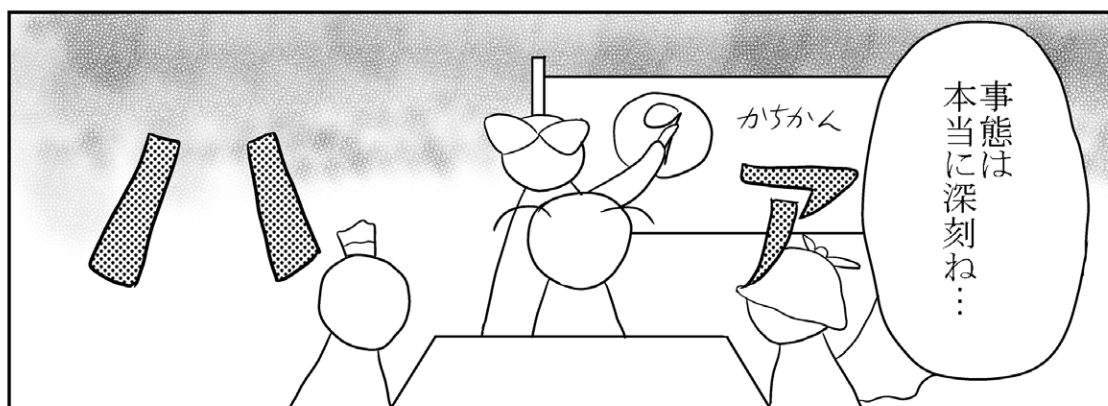
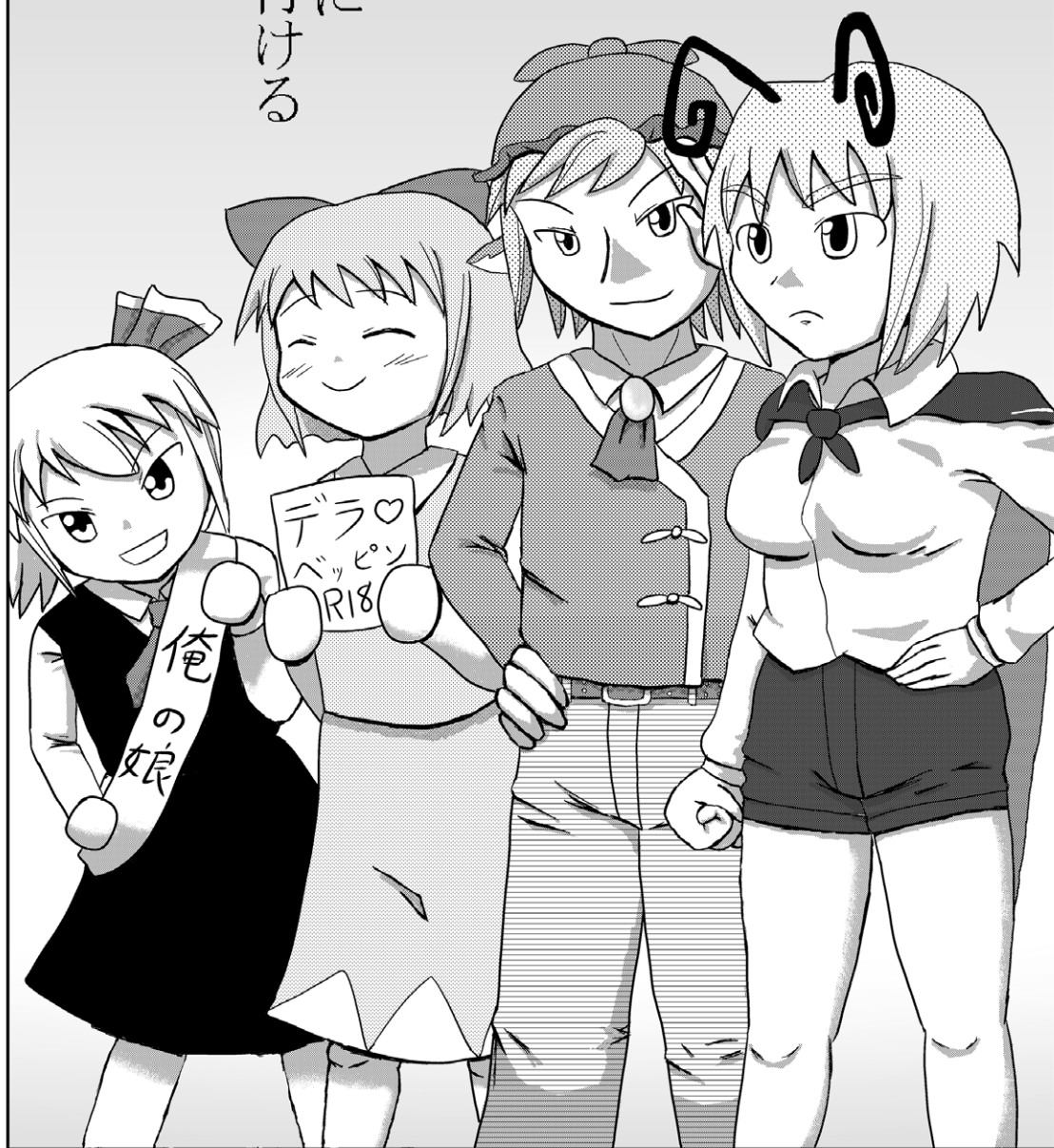
ex. 藍 アリス

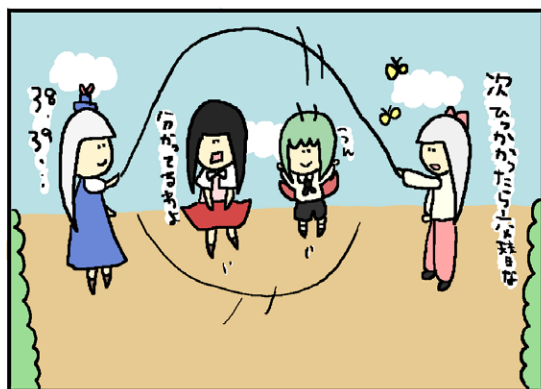
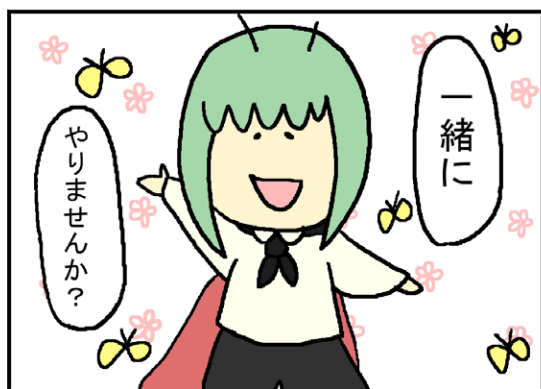
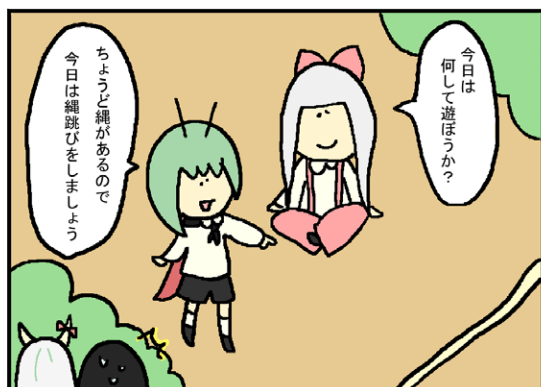
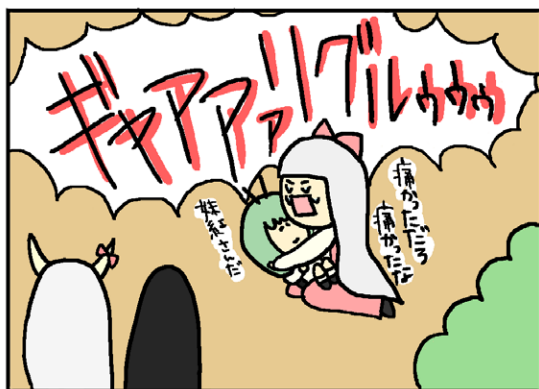
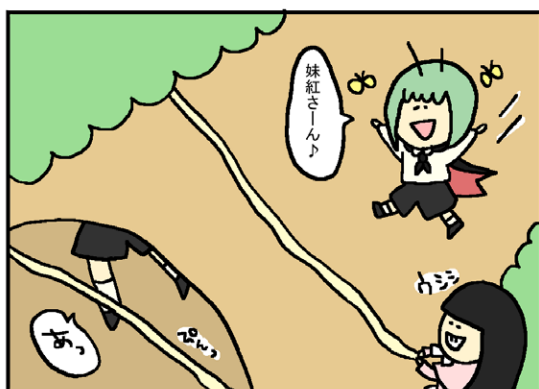
一番ひどい価値観の押し付けといえばやっぱり「俺の嫁」ね

私たちは未婚だっつーの

あたい何かけばいいので？

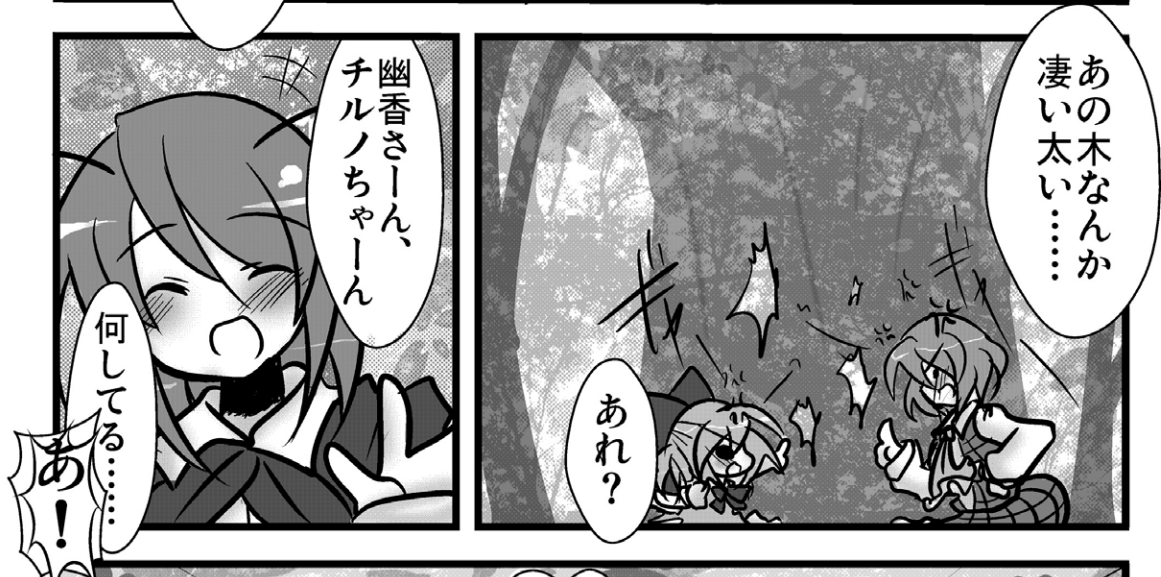
ハァ
かちかん
事態は本当に深刻ね…
落ち込んでても仕方ないわ
バンッ
私たちもただ呆然と見てるだけじゃだめよ
抵抗しなきゃ自分を守るために！
とことん戦うわよ悪と！
今、私たちは宣言します

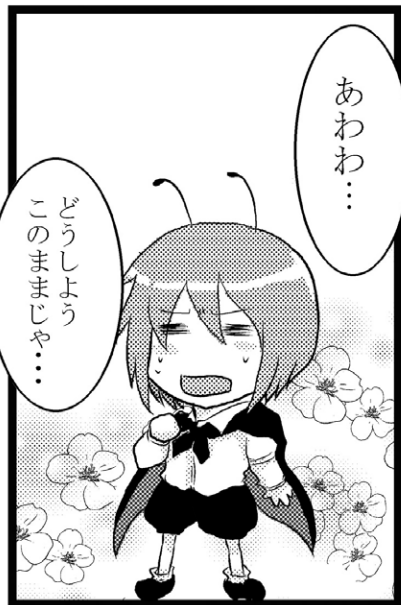
Fin.

## 空気になった二人

## リグルは本当にいい子です

このさきには
カオスで
予測不可能な
リグルたちが
あなたをまっています

それでも閲覧しますか？

［はい］　　ＹＥＳ

うわぁー
ここの桜並木
綺麗ー
あの木なんか
凄い太い……
あれ？
幽香さーん、
チルノちゃーん
何してる……
あ！
ちょっとリグル
聞いてよ！
の？

カキーン
このバカが桜の苗木を凍らせちゃったのよ！
あたいはバカじゃない！
何人の妖怪や人間が桜を楽しみにしてると思ってるのよ！
チルノちゃん、どうしてそんなバカなことを？
だからバカじゃないって言ってるでしょ？
これから他の桜も凍らせるんだから！
だって・・・、桜が咲いて春が来なければずっとレティと一緒にいれるもん！
ズビー

レティにも休息が必要じゃなくって？
さぁ 元に戻しなさい
いやだね！！アタイは絶対戻さない！！
あわわ…
どうしようこのままじゃ…
そんな時は！！
私たちにおまかせ！！
その声は？！
リリーブラックさん！！
リリーホワイトさん！！
ジャーン！！

桜を凍らせる悪行妖精め！
？
我らが成敗してやる！
ドー！
うわ！おまかせどころか一方的に加担しやがったぞこいつら！
じゃあリグル、貴方は春と冬どっちが好き？
私？そりゃ春のほ……
あ。
プルプル…

うらぎりもの～!!
ドドドドドド
リグルのッ!!
ジッ
ちょッ!!
ちがうよ!?
…ふ!!
もんどーむよー!!
パーフェクト
フリーズ!!

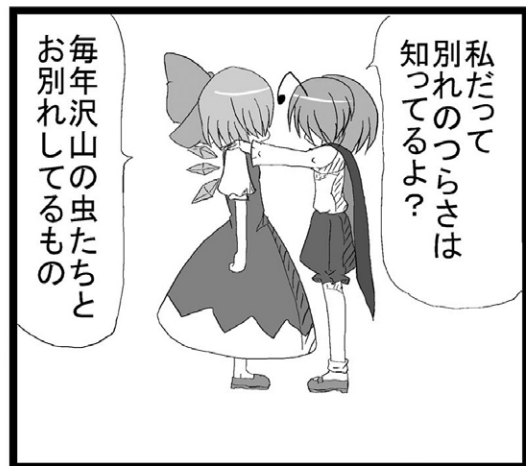
むっ…

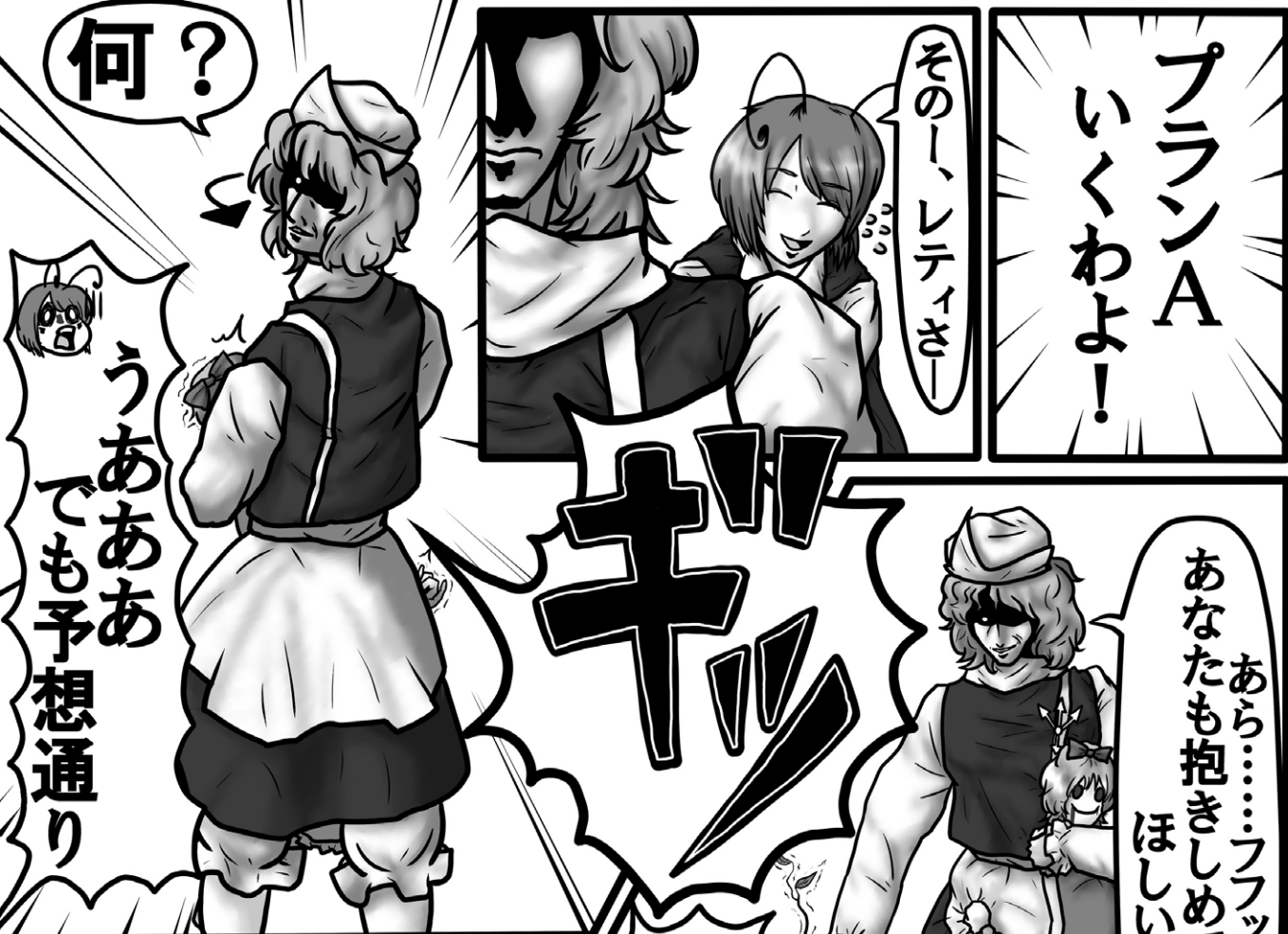
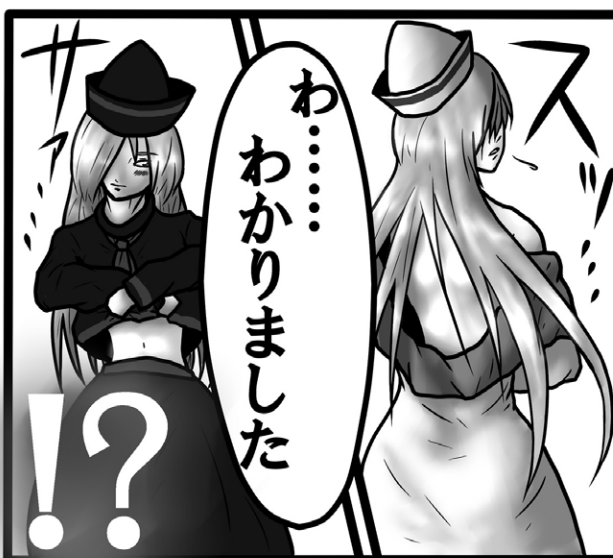
チルノちゃんのばかっ！
ガバッ

私だって別れのつらさは知ってるよ？
毎年沢山の虫たちとお別れしてるもの

でもね
別れがあるからまた出会いもあるの

それは桜の花も同じだよ…
ぐすっ

見てごらんっ！

生命の息吹が芽吹いてるでしょう？
遥か昔から私たちはさ、
確かな出会いと別れを繰り返して存在しているんだよ
おー。
つぼみですよー。
三シーズン過ぎればレティがまた雪を降らせてくれる
だから次の冬まで皆で待
良い話でまとめようとしてるところ悪いけど
……件の人物がお出ましみたいよ
ヌッ…
レティ!!!
ズダン
生は悲しい…
雪女どころかイエティが降臨しやがった!!
言い切った!!?
次の方ホントごめんなさい!!

レティ……
レティ!!
だきっ
ねぇ……
チルノ……
あなたも
解らない訳では
ないのでしょう
ふしゅる
…………
……厳冬を越えた
からこそ芽吹いた
あのつぼみの尊さ
咲き誇る桜の
美しさを……
レティ……
本当はね
季節の移ろいと
共に居られる
貴女が……
ぎゅ
フフっ
少しだけ…
羨ましいの……
……ふっ
雪女(?)に
春を語られ
るとはね
季節に上下
など無い…
肝心な事を
忘れてたわ
そうね…そして
私達には火急的
速やかにやらな
ければならない
事が出来た
緒々のツッコミはひとまず保留で
はいっ!
溢れんばかりの
♡でベアハッグが
いい具合にキマっ
ちゃってる!!
何とかしないと
チルノちゃんの
頚椎が千歳飴の
如くにへし折れ
てしまう!!
ゴギ
ベギ
みんなの心が
一つになった!

プランA
いくわよ！
そのー、レティさー
何？
うあああ
でも予想通り
ギッ
あら……フフッ
あなたも抱きしめて
ほしいのね……
イヤァァ
想定外！
殺さなければならない時
礼儀は必要無い。
— ウィンストン・チャーチル
あきれた
筋力ね……
プランB！
もう今ココで
春にしてやって！
えっ
ス
わ……
わかりました
!?
ツッコミ
優先して
いいですか

さあ！
ゴゴゴ
黒
白
私達の弾幕を
あたぁ！
ゴギィ
早っ！
やられるの早いよ！
結局私の出番というわけね…
いいわ！
ツッコミもしたかったし
ドッ
『元祖マスタースパーク』

ゴオオオッ
天下は彼方か・・・
え、私の扱い最後までこんなんなの？てゆーかこのオッサン
ダレヤネエエン！？
それはあなたです！
こうして、幻想郷に真の春が訪れた
しかしゆうかりんの戦いはまだ始まったばかりだ・・・！
第一部 完
デデーン！！
桜がキレイね・・・
春ですよー
あれ、この漫画に私いらなくね？
ひょこ

# 参加者あとがき

どうも月刊ナイトバグでは始めましてぶーわです！
自分の趣味をおしだしてチルノと幽香りんだしてしまいました！！
今後も機会があれば参加したいとおもいます！！
企画してくれたみどりさんに感謝感激です！
幽リグチルノのカラミもっと　流行ればいいとおもいます！

ぶーわ

無理を言って参加させていただきました、こぶろうです。
絵柄がこんななのでね、他の方に迷惑をかけないだろうか・・・、
とか微塵も思ってません、へっ！
とにかくリレー漫画、楽しんでいただければこれ幸いです。
ではでは、ありがとうございました～。

こぶろう

## 他の参加者の皆様ごめんなさい

草加　あおい

これが初レティさんだとかコマ多いとかも色々問題はありますが、
一番の問題はリグルが1コマしか出てないってことです。

斑

Feb 16, 2010
昨日、この人ざとから逃げ出そとした虫やが一人、刺さつされた、て はなした。たのしかっ です。
夜、やしき中 ほたるおい。胸のはれ物 ひとなで たら りぐるがびんたしやがた。いったいりぐる どうな
て

Feb. 19, 2010
やと むし きえた も とてもかわいい
今日 はら入ったの、き のミツ くう

Feb. 21, 2010
かわいい かわいい チル きた
なかよさなんで あそん
4
かわいい
りぐ

ポマギッシュ・ポマーダ

りぐりれ！企画お疲れ様です。
無事に入稿できることを祈りつつも
この話の結末をまだ見ていないので先が気になったり^p^
あれ…そういやリグル企画なのにリグル描いてないよ！うわぁぁん
乱文失礼^p^

亜斗

# 企画主あとがき

というわけで、
どうも！「リグリれ！」企画主の緑です。
折角同士が沢山いるんだからこれはみんなでやるっきゃねぇ！
……そういう思いつきの元、生み出されたのがこのリレー漫画企画です。
好き勝手やらかしてごめんなさい。

正直な話、企画が進行できるほどの人が集まってくれるかどうか心配だったのですが、
想像以上の人数が参加してくださり、無事終える事ができ本当に嬉しい限りです。
今まで月バグに投稿しようと思ってたけど……な人も参加してくださり、
これを機会に月バグ投稿者やリグル好きが増えればいいと思いますっ。

結果としては
わぁなにこのカオスっぷり、みんなすげぇ！でした（褒め言葉
私の管理不行き届きなどもフォローしてくださったりと、
参加者の皆様には本当に感謝しております。
発表場所を設けてくださった小崎さんにもこの場をお借りしてお礼をば。
本当にありがとうございました！

リグリれ！参加者（敬称略）
第一走者：ぶーわ
第二走者：こぶろう
第三走者：長閑
第四走者：緑
第五走者：紅
第六走者：草加あおい
第七走者：しっぷ
第八走者：斑
第九走者：ポマギッシュ・ポマーダ
第十走者：亜斗
アンカー：東

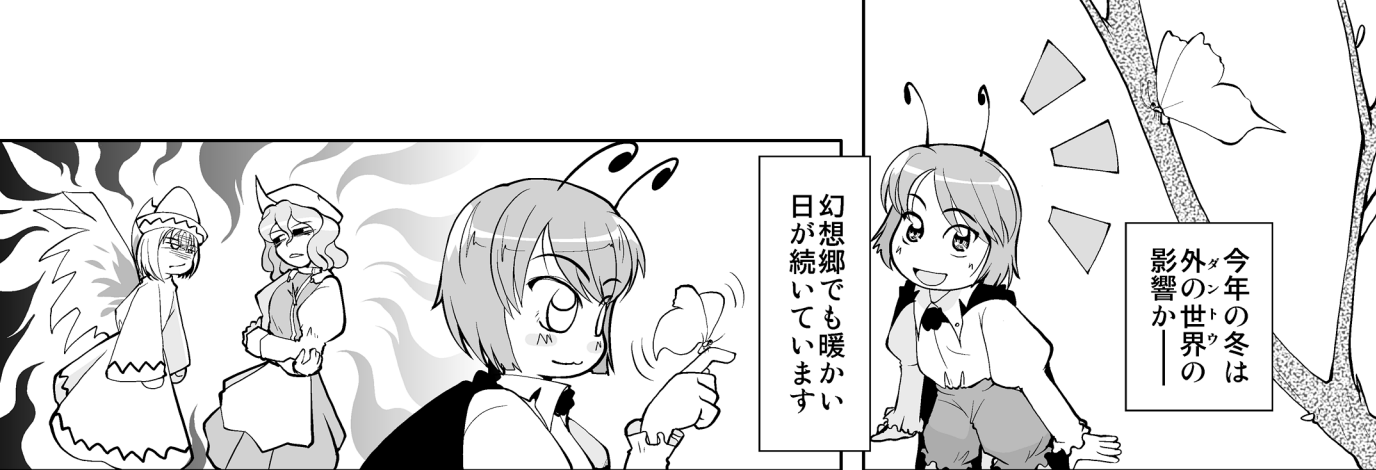
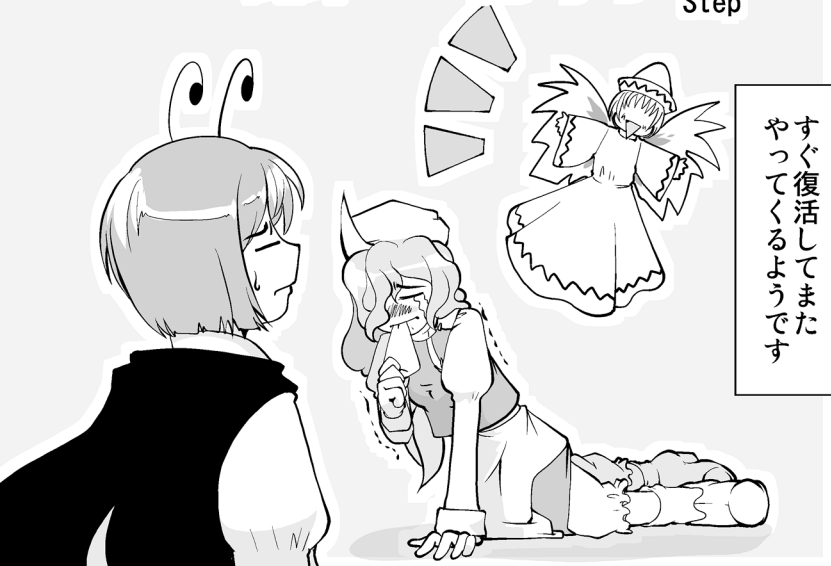
えらいひと：神楽丼/小崎　月刊NIGHTBUG
もっとえらいひと：上海アリス幻樂団/ZUN　東方project

今年の冬は
外の世界の
影響か――
幻想郷でも暖かい
日が続いています

ゴゴゴ
ゴゴ
リグルは妖怪
だからもちろん
私の味方よね
春ですよー寒さに
弱いリグルさんは
私の味方ですよねー

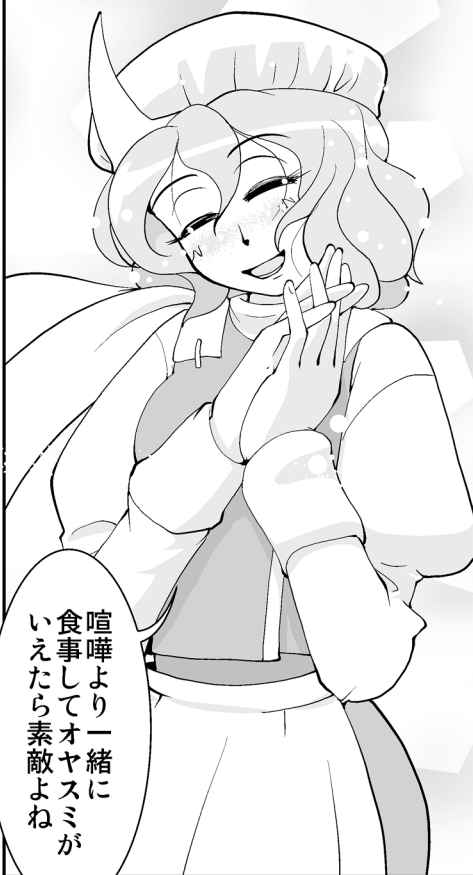
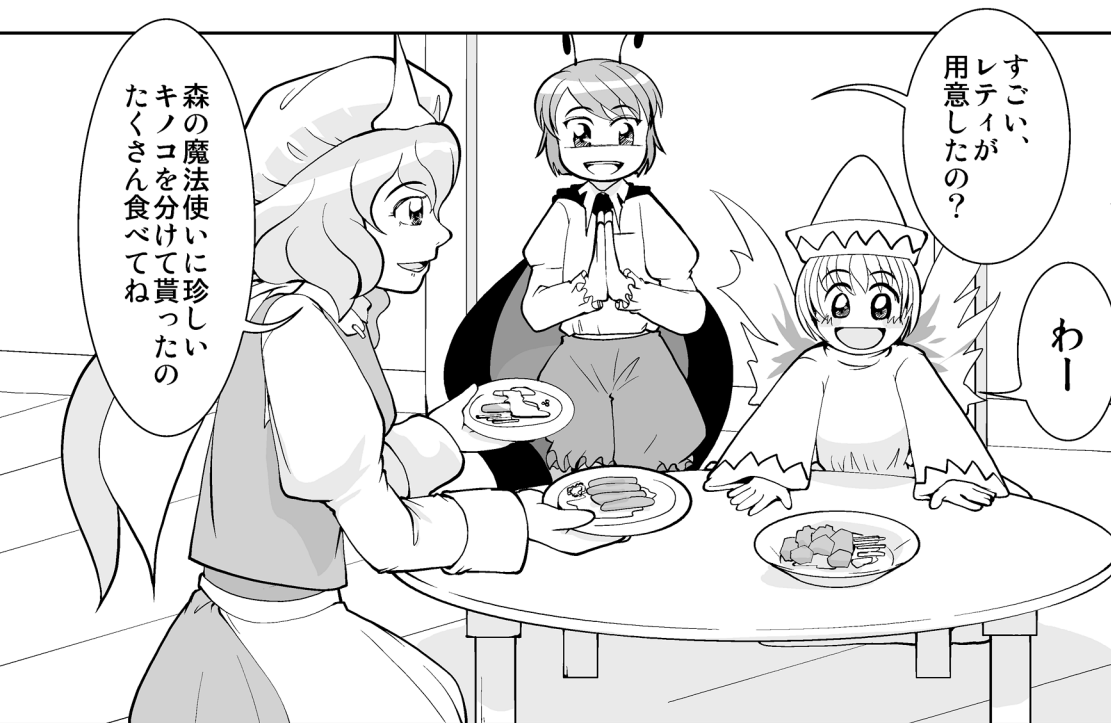
そのせいかまだ
三月だというのに

ピキュ
冬妖怪がいくら
春告精を追い
返そうとしても
リザレクション

蠢々春日
Step
すぐ復活してまた
やってくるようです

私も春がくるのは当たり前と
受け止めているのよ、リリーを
本気で排除しようとしている
わけでもないの、でもまだ桜が
咲いているわけじゃないし、
ただ憂鬱な時を遠ざけてささ
やかな幸せの時を守ろうとし
いるだけなのにあの妖精
……

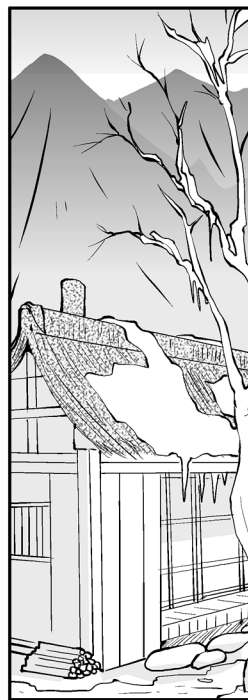
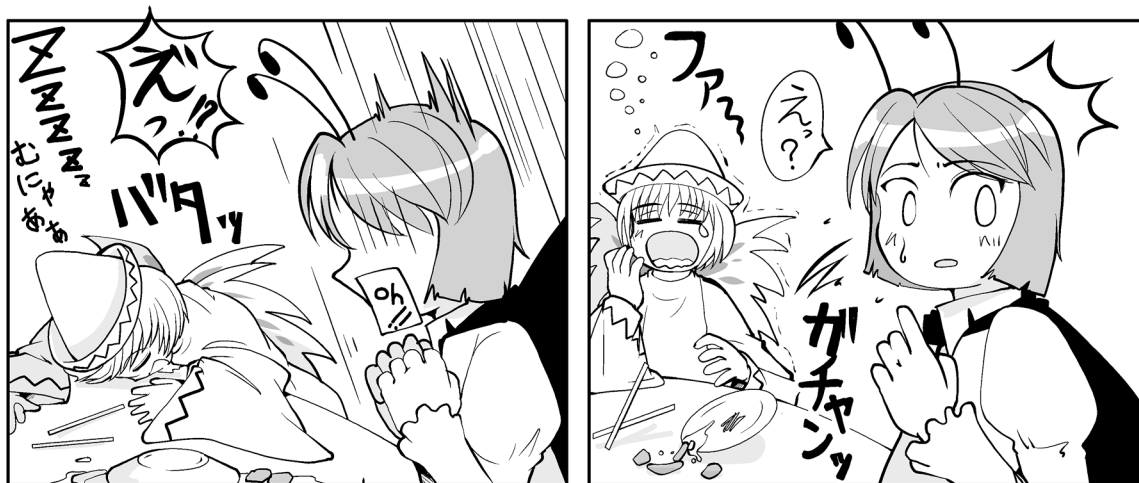
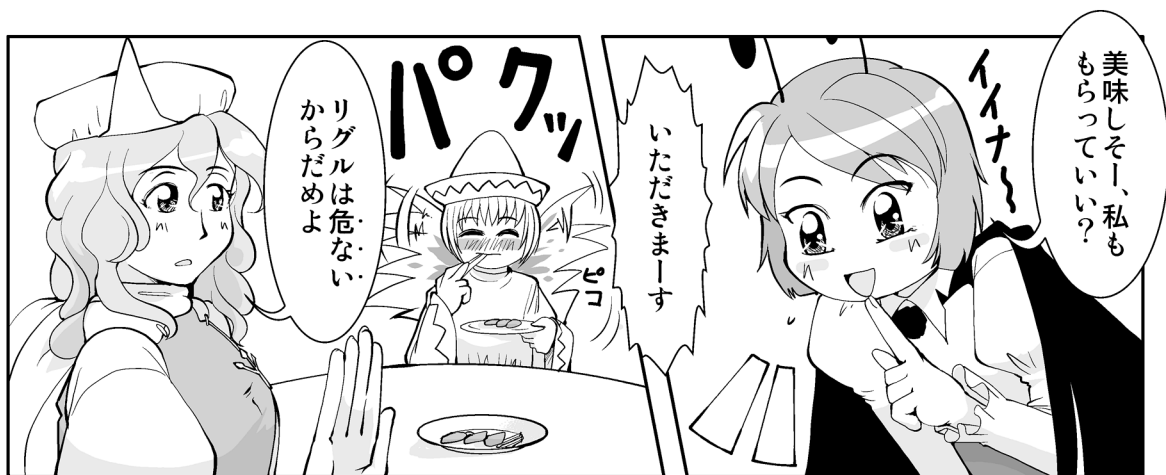
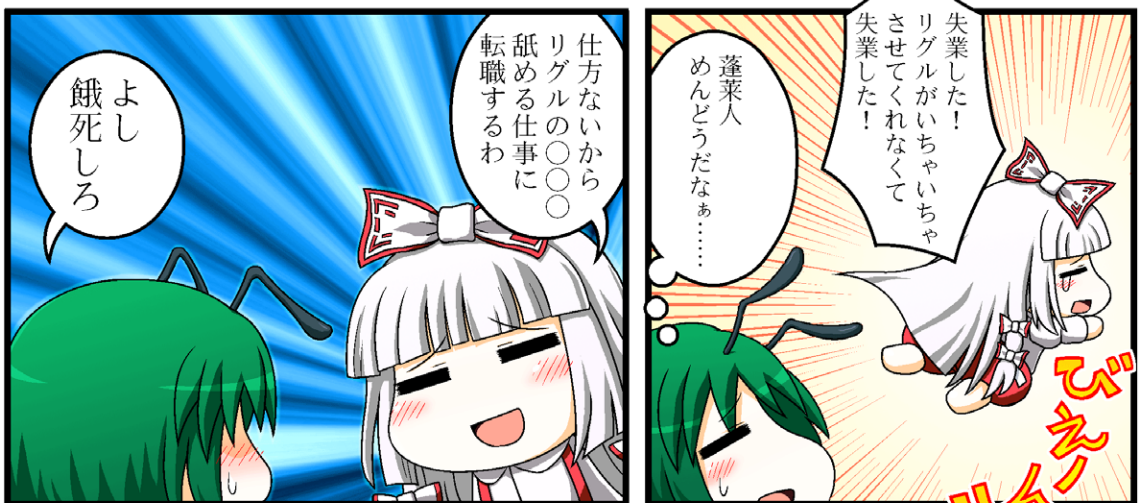
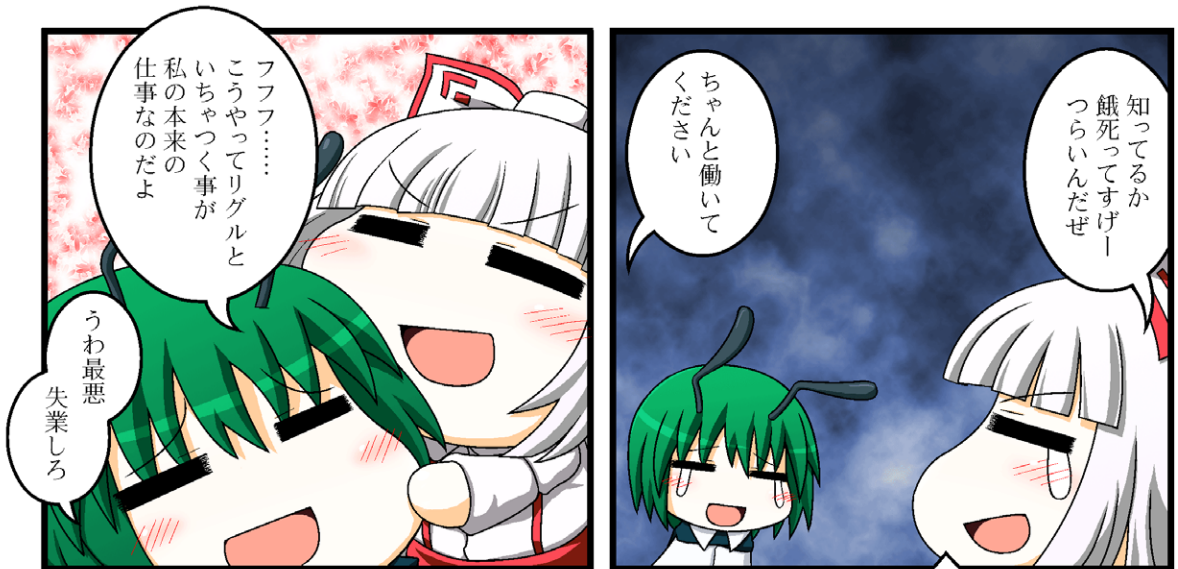
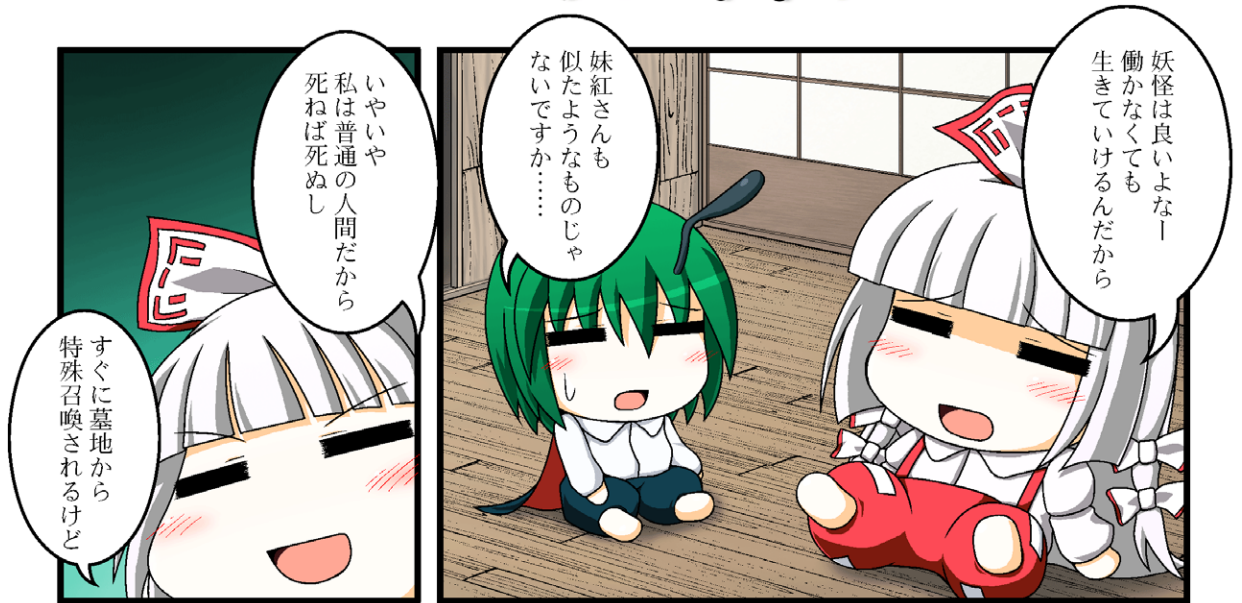
……私は寒気が緩んだらほとんど力を失って、死ぬの、もう寝るわ……
ゴソゴソ
あー、レティ

ちょっと見てみて
蟲は冬眠する間、ほとんど力を失うけど

眠るだけで、けして死ぬわけじゃないんだ
季節が巡れると、また力を取り戻す
妖怪(みんな)はレティが目を覚まして元気になるのを待ってるから、「死ぬ」だなんて言わないで、ね

リグルらしい
例え話ね
…なるほど眠るだけで
死ぬわけじゃない、か
よし、リグル！
蟲の知らせで
私の家に
リリーを呼んで
喧嘩より一緒に
食事してオヤスミが
いえたら素敵よね
すごい、
レティが
用意したの？
わー
森の魔法使いに珍しい
キノコを分けて貰ったの
たくさん食べてね

あらあら、お眠？
眠るだけで死ぬわけじゃないから
復活できないし、春はまだ先ね

オヤスミ、リリー

……くろまく〜

結局黒幕によって
春の訪れは例年
通りになりました。

# 二つの死の間で

描いた人：羅外

# 地位向上を目指して －紫と蟲－

著者：如月翔

今日も屋台に集まり、お酒と串焼きを食べながら雑談をしている。
　あの日から結構日にちが過ぎてしまったが、未だに良い案は思い浮かばない。
　何時までも皆を頼るのもどうかと思って一人でやると決めたのは失敗だったかもしれない。
「あー気持ち悪い・・・」
「そりゃそれだけ呑んだら気分悪くなるよ」
「適当に味噌汁でも作ろうか」
「うぅー・・・」
「そういえば、何か思いついたのかな?」
「まだ何も・・・じゃない?この呑みっぷりだと」
「藍様に聞いてみようかな」
「良いと思うよ、このままじゃ一人で悩み続けるだろうし」
「でも勝手に動いて怒らないかな?」
「まあ、そんな関係になるような仲じゃないでしょ」
「それもそうだね」
「さてとじゃあ、今日はそろそろお開きにしようか」
「そうだね、リグルー起きてー、もうお開きだよー」
「んー・・・?おひらき・・・?」
「冷めちゃったけど味噌汁あるから一応飲んでね」
「ありがとうー」

気持ち悪いし頭も痛い・・・これがいわゆる二日酔い?
　慣れないことはするものじゃないなあ・・・。
　冷めているけど味噌汁が美味しい、って後片付けを手伝わなくちゃ。
「よし・・・っと、これで終わり」
「お疲れ様二人ともありがとう、じゃあまたね」
「またねーって、リグル大丈夫?」
「少しマシになったしもう大丈夫だよ、じゃあねー」
　皆を頼り続けるのはどうかと思った、一人でも出来る・・・かもと思ってもいた。
　でも実際は出来なくて結局迷惑をかけているし心配もさせている。
　何とかしないと駄目だ・・・。そんな事を考えつつも意識が段々とぼんやりして、眠りへと沈んでいく。

「ん・・・」

　何時の間にか寝ていた、天井を見ながら欠伸を噛み殺して起き上がる。
　そして気付く、此処は何処?記憶に無い場

所で寝ていた。
「え、嘘」
いくら寝る前に酔っていたとはいえ、全く身に覚えのない場所に居るのは初めてだ。
急な出来事に眠気が一気に何処かへ消えてしまった。
不思議に思いつつ周りを見渡すと、見慣れたダンボールがあることに気付く。
初めは見間違いかと思ったけど、見間違える筈はない、これは私が集めた殺虫剤だ。
どうして、と思った時不意に声を掛けられる。

「おはよう、良く眠れた?」
「橙・・・、ってことはここマヨヒガ?」
「マヨヒガじゃないよ、でも黙って連れて来てごめんね?」
「急だったからびっくりしたけど別にいいよ、でもどうして?」
「実はリグルが寝ている間にミスティアとちょっと相談してみたんだ」
「・・・?」
「ずっと悩んでいたから、別れた後に藍様と紫様に聞いてみたんだ」
「そうだったの?心配させちゃってごめんね?」
「気にしなくていいよ、じゃあ紫様呼んでくるから待っていてね」

「その必要はないわ橙、貴方は下がっていなさい」
「はい、判りました。失礼します」
「さて、貴方がこの殺虫剤を集めたのよね?」
「へっ?」
「少し、お話いいかしら」

「貴方がご存知かどうか判りませんが、この殺虫剤は外から流れてきたものです」
「はぁ・・・」
「なぜこの殺虫剤は流れてきたのでしょう?」
「ちょっと判らないです」
「・・・そう」
そう言われると外と幻想郷には結界が在る筈、なのにどうして外の物が来るのだろうか。
「外の世界で忘れ去られた物がここに流れてきます、さてこの殺虫剤には効果がないのでしょうか?」
「そんなはずありません、・・・試した事はないですけど」
「効果が無い訳でもないのに、こちらに流れてきたのには理由があります」
「理由ですか?」
「えぇ、とても簡単な理由です。その殺虫剤は強すぎるのです」
「虫以外にもってこと?」
「その通り、自然は勿論作った人間にさえも強力な毒性を発揮しました」
「それで使われなくなって、忘れ去られた」
「そうです、そしてそのような物をここで使う訳にはいきません」
「私は使うつもりはないですけど」
「橙から仲間の為だと聞きました、勿論本来目指していたことも」
「どうすればいいですか?」
「それは自分自身で考えなければならないことです」
「・・・」
「ただそれではここに連れてきた意味がありません、答えを教えることはできませんが、ヒントを与える事は出来ます条件がありますが」
「ヒントと条件・・・ですか?」
「条件はこの殺虫剤を私に全て渡すことです、先程も言いましたがこの殺虫剤を使える状態で残す訳にはいきません」
「判りました」
何らかの方法で処分してくれるのだろうか?
使わない、そしてヒントを教えると言う以上任せた方がいいだろう。
「殺虫剤を人間に使わせないようにすればい

いのです、しかしただ使わせないように頼んだり脅したりしてはいけません」
「脅しはしないですけど、頼んでもいけない？」
「今回のようにお互いに対処する方法が存在する場合片方が下に見られたら意味がありません、ここで重要なのはお互いを対等の物として両者の得になるように交換条件として提案することです」
「私が皆に指示をするということですか？」
「少しお喋りが過ぎましたが、もう貴方は大丈夫ですね」
「・・・ありがとうございました」
「礼には及びません、上手くいくことを願っていますわ」
「えーっと、失礼します」
「最後に一つだけ、話しかける人間は良く考えて決めなければいけませんよ」

扇子を私に向けて目の前にリボンのついた不思議な空間を出現させる。
どういう原理なのか判らないけど、これを通れば人里に行くことが出来るのだろう。
感謝をしつつ、通らせてもらう。

「紫様、その殺虫剤は本当にそれほど危険な物なのですか？」
「私が知る訳ないでしょう？」
「ではなぜあのような事を？」
「作成・指示・監視この内私が行っているものは一つもない、そして説明が確実だという根拠もない、ということは可能性がないとは言い切れないでしょう」
「確かにそうですね」
「さて、あの子が上手く進められるか気になるけど後は任せたわよ」
「かしこまりました、おやすみなさいませ」

（続く）

〈作者コメント〉
一般参加の筈の例大祭の準備が忙しくて、今回最終回の予定でしたが途中で切る選択・・・というか既に締め切りまで5分ない状態・・・申し訳ありません。

夕暮れの湖の上で、リグルは眼を閉じて色々なことを思い出していた。出会い、そして過ごした日々。自身が犯した過ちと、それから始まった償いの日々。色々なことがあった。それでも結果は変わらなかった。あの子と私は今日でお別れ。けど――

「ただいま、リグル。」
「おかえりミスティア。慧音さんは？」
「それが、どうも博麗神社にいるっぽいよ。このケースは予想してなかったね…」
「…ん、でも一番都合がいいっちゃいいよ、ミスティアは楽にいけるんじゃん？」
「うん、森に誘えれば…あとはこっちのペースでいけると思う。」
「扉を…そのあともどって…けーねと巫女が…」
「……チルノ？さっきからずっとぶつぶついってるけど…任せるよ？」
「だ、だいじょーぶよ！あたいを誰だと思ってんの！」
「最強、なんでしょ？」
「…リグル、最後だよ。」
「…うん。」
　ルーミアの手に抱かれた蝶の子は、静かに横たわっていた。まるで死んでいるかのようなその見た目でも、まだかろうじて生命のエネルギーは放たれている。
　リグルはそっと手を重ねて、最後の会話をする。声に出なくても、眼と心でかわす最後の言葉を、リグルはしっかりと伝えた。伝わったと思った。
「じゃあ、ルーミア…そしてみんな！お願い！」
『りょーかい！！！』

# ずっと一緒に　～一0～

**著者：壁々**

「霊夢、夕方だ。」
「…んー…ああ、はいはい。」
　大分ぐっすりと寝ていたようだ。慧音にある程度の事情を話した後にこたつに入り、そのあとの記憶はない。障子はすでに濃いオレンジ色に染まっており、夕暮れも終わりに近づいていることを感じさせた。
　手早くこたつから出て、首を軽く振る。眼を閉じて伸びをしながら、ふと今回の事件のことを考えた。なぜ、リグルはこんなことをしたのだろう。好戦的とは決して言えない、むしろ人に歩み寄ろうという面すらある彼女が、なぜこんなことをしているのだろう。そんなに新しくできた妖怪のことが大切なのだろうか。いままで自分が築きあげてきたものを捨てることになろうとも、たとえ自身に膨大な災厄が降り注ごうとも。そこまでして守ろうというものなのだろうか――。
　…いや、いいのよ。そんなこと。どんな妖怪であれ、行動を起こす時にはなんらかの理由がある。自身の欲望を満たすため、自身の存在をかけて、自身の力を試すため――。相手の理由なんて関係ない。私のやることは一つだけ、妖怪退治――。
　伸びを終えるのと、考え終えるのと、眼を開けるのと、それは同時だった。

神社の周りに膨大な妖力が発生したのは。

瞬間、慧音が身構えると同時に霊夢は障子に向かって突進した。障子を破壊せんばかりの勢いで開けると同時に外へ飛び出す―

バキョ！

はずだった霊夢の頭は微動だにしなかった障子に盛大に激突、障子の骨に盛大なヒビをいれた。
　そのまま前のめりに倒れていく霊夢を見て慧音はとっさに判断し、裏口へかけていく。引き戸を開けようとしても、こちらも同じように微動だにしない。
「…くそ！なんだこれは！」
　声を荒げて慧音は戸を蹴り飛ばす。いかに人間状態とはいえ、慧音は半獣の身である。その体には見た目以上の力がある。その力をもってしてもそれはびくともしなかった。
「なんだと…何をされた！？」
「…何された、とかじゃないわ、とりあえず―」
　頭を抑える左手、懐に右手。スペルカードを取り出して霊力を注ぎ込む。
「開かないならぶっ壊す！宝符『陰陽宝玉』！」
　言葉遣い以上に荒い使い方をした霊力で練りだした陰陽球を、力任せに障子に叩きつける。鈍い感触とともに障子は吹き飛び、代わりに姿を現したのは―
「…なるほどね、やってくれる…」
　信じられない厚みに成長した氷の壁だった。おそらく神社を覆いつくし、裏口まで閉じられているのであろう。
　まず頭に思い浮かぶ犯人は氷の妖精、チルノ。しかい、いかにチルノが氷を扱うとはいえ、所詮は妖精。これほど大規模かつ瞬間的な氷の展開を可能にしたのはところどころに埋まっている色とりどりの弾。弾幕を一気に凍らせるチルノの最大奥義、パーフェクトフリーズにより、弾をつなぎあわせ、そこに冷気を流し込んで氷でつなげた―というところなのだろう。
が。
　今の霊夢にとってそれがわかればなんとかなるものでもない。もちろん、力づくで破壊して脱出も可能だが―
「どいてくれ霊夢！こんなところで霊力は使えまい！」
　それよりももっと確実で早い方法が今はある。
「今神社の周りに存在する氷を『なかったことに』！！」
　ハクタクと人間とが混ざった半獣、上白沢慧音の特殊能力、歴史喰い。あらゆる事象の「存在した歴史」を「喰う」ことにより、その事象を一時的に「なかったことに」する能力。

　氷の壁は出来た時の唐突さと同じように、跡形もなく消え去った。
「ありがとねっ！」氷の消失と同時に霊夢は境内へ飛び出す。鳥居の向こう、湖の方へ一直線にチルノが飛んで行くのが見える。霊夢は追撃の体勢、空を駆けようとしたその時

　頭上から高速の「何か」の飛来を感じ取り、急きょ飛翔のベクトルを後ろへ転ずる。
　直後、そのまま前に進んでいれば確実に直撃したであろうとび蹴りが境内に突き刺さった。
　その「何か」に対し霊夢は迷わず攻撃。地を滑るように結界を放つ。跳んでかわした相手にさらに追撃。
「『魔浄閃結』！」
　地を這う結界から光の柱が立ち昇る。丁度直上にいた「それ」はさらに飛んでかわし、上空へ退避。霊夢はそれをちらと見、それから慧音へ目配せした。同時に、慧音は境内から飛び立ち、湖へと向かい、霊夢は上空へ「それ」を追った。

＊＊＊

　相対して改めて感じる。長い月夜の時とは明らかに別。強固な意志と明確な目的を持ち合わせた眼。気迫がこちらへはっきりと伝わる。
「リグル…」あんた、どうしてこんなこと―
そう、いいかけると

「何も言わない。今やっていることをやめるつもりもない。私は、自分でやると決めた。だから、やる。」
　リグルは先にいいたいことをいい切った。全身に妖力を巡らせ、臨戦態勢を整える。
「…ならいいわ、どうせあんたの言うことなんて、何聞いても変わらないわよ。」
　言いつつ霊夢もお祓い棒を構え、もう片方の手に札を握りこむ。
「私の仕事は妖怪退治なんだから。まずはぶっ飛ばす。話はそれからよ。」
「私は…負けない！」
　二人の意志の最後のぶつかり合い。それを合図に、同時にスペルをセット、発動。
「霊符『無想封印　集』」
「蛍符『地上の恒星』！」
　神社上空でこの『異変』最初の火ぶたが切って落とされた。

＊＊＊＊

　時を同じくして、慧音はチルノを追撃して、神社と人里を直線で結んだ線のちょうど真ん中のあたりにいた。着実にチルノとの距離は縮まっており、そろそろ三種の神器のうち、「玉」の射程にとらえれる。
「…なんなのだ、一体…」
　普段からリグルの周りには…正確には、リグルは他の妖怪とつるんでいることが多い。しかし、今回のケースにおいて、他の妖怪にとってリグルという妖怪は、そこまで協力するほどの義理の持ち主なのだろうか？自身のことを何よりも優先して考える妖怪が、そこまで他の妖怪のために動くことがあるのか？
　里を襲われる、という異常事態、それを慧音は頭で理解していても、整理しきれていない。わずかな混乱から作られる、思考の回廊。考えても答えが出ない問いを考え続け、気持ちが眼の前のことに集中していない。

　そして、それが致命的な隙を産んだ。

　わずかな違和感を感じる。明らかに「神社を出た時の気温」よりも周囲の気温が下がっているということに気づくのに慧音は数瞬おくれて気づく。だが、それが何故起きているのか、それに慧音は到達できなかった。思考はあいまいなままただひたすら、チルノの姿を見て、飛び続けていた。
　そのチルノが急ブレーキ。いぶかしむ間もなく、チルノは足もとに氷の塊を精製し、それを蹴るようにして反転、上へ飛び上がる。
　何の意味もないだろう、と突っ込みつつチルノを見上げた慧音の思考は凍りついた。
　確かに何も持たずに飛びあがったはずのチルノの両手―否、頭の上には巨大な氷塊が構えられていた。弾幕でも何でもない、ただの巨大な質量をもつ物体が、振り下ろされる。
「氷塊『グレートクラッシャー』！」
「ニーーーっ！！」
　それを認識すると同時に慧音はあらゆる可能性を考慮。しかし
（迎撃、回避、……どちらも…間に合わない！）
　その氷塊を壊すにも、起動できるスペカでは出力が足らず、可能なスペカは起動できない。回避するにも慧音の体はすでに慣性によって支配され、氷塊の落下軌道から身を隠しきれない。
（これ…しか！）「産霊『ファーストピラミッド』っ！」
　とっさに発動したスペルは慧音の周りに10個ほどの使い魔を呼び出し、その10個が正四面体の形を作り出す。各使い魔をつなぎ簡易の魔法壁を展開。と、同時に氷塊が到達。面で氷塊を受けとめる形となった。
　しかし当然、その質量に耐えきれず、生み出したシールドごと、慧音の体は下へ叩きつけられた。
「つぐ！」
　地面にあたった衝撃でシールドは崩壊。殺し切れなかった衝撃が慧音の体を襲う。眼を閉じ、歯を食いしばって耐える。
「……くそっ！」
　なんとか耐えきり、慧音はすぐさま起き上がる。日も沈みかけた薄闇の中、チルノを探す

はずだった。

「!?」

突如視界が暗転、それと同時に肌を刺すような妖力の発生を全身で感知。何が起きたかわからない。

「く…そ!」

とりあえず崩れたファーストピラミッドの防御壁を再展開。少し遅れて防御壁にいくつもの弾が当たる。四方八方から飛んでくる弾の強さはまちまち、タイミングもずれがある。慧音は動くに動けない状態。

しかしだからこそ、慧音には頭を落ちつける時間が与えられた。

「…そうか。ミスティアか!」

黒く染まる視界、襲いかかる弾に神経を削られるが、防御壁を展開し落ち付いてみればタネはあっさりと気づく。本命の攻撃は耳に響く、独特の声。夜雀たるミスティアの人間を鳥目にする程度の能力で展開される弾幕、『』に閉じ込められただけだ。しかし。

「…足止め、か。」

視界無く、弾の群れの中を突っ切るのは無謀。刻一刻と消耗する防壁を頼みに突っ切ることもままならない。本体の位置を特定しようにも、大音量で響く歌声と全方位に低速展開された弾幕で見当すら付かない。

（ミスティアの役目は慧音さんの引き離し。里にいられると邪魔だから、チルノと一緒に何としてでも里の外に連れ出して、出来るだけ長く足止めして。）

「油断はできないけど…とりあえずこれでしばらくは持つはず。出来れば仕留めておきたいなぁ…」

チルノは非常にいい仕事をした。あとは私が引き継いで慧音を止める!

気合を入れ直し、ミスティアはさらに声量をあげた。

＊＊＊＊

慧音を叩き落としてから、チルノはすぐに踵を返し、再び人里へと向かう。しばらく進んだ先の人里近くの上空ではすでにルーミアが蝶の子とともに妖力の展開を終えていた。

二人の担当分が今回の異変の核をなす。二人はただ、作戦開始の時刻を待った。遠くに見える、リグルと霊夢の弾幕戦闘の光を見ながら。背後の太陽が沈むまでずっと。

だから、二人は気づかなかった。人里のはるか上空に二つの影があったことに—

（続く）

〈作者コメント〉

いよいよクライマックスへ。リグルが起こす小さな異変のはじまりです。

やたらと色々引っ張ってる作品です。それが読者様の納得のいくようまとまっていきます。たぶん。

あと少しのお付き合いを、ぜひ。

# リグル・ナイトバグの日常

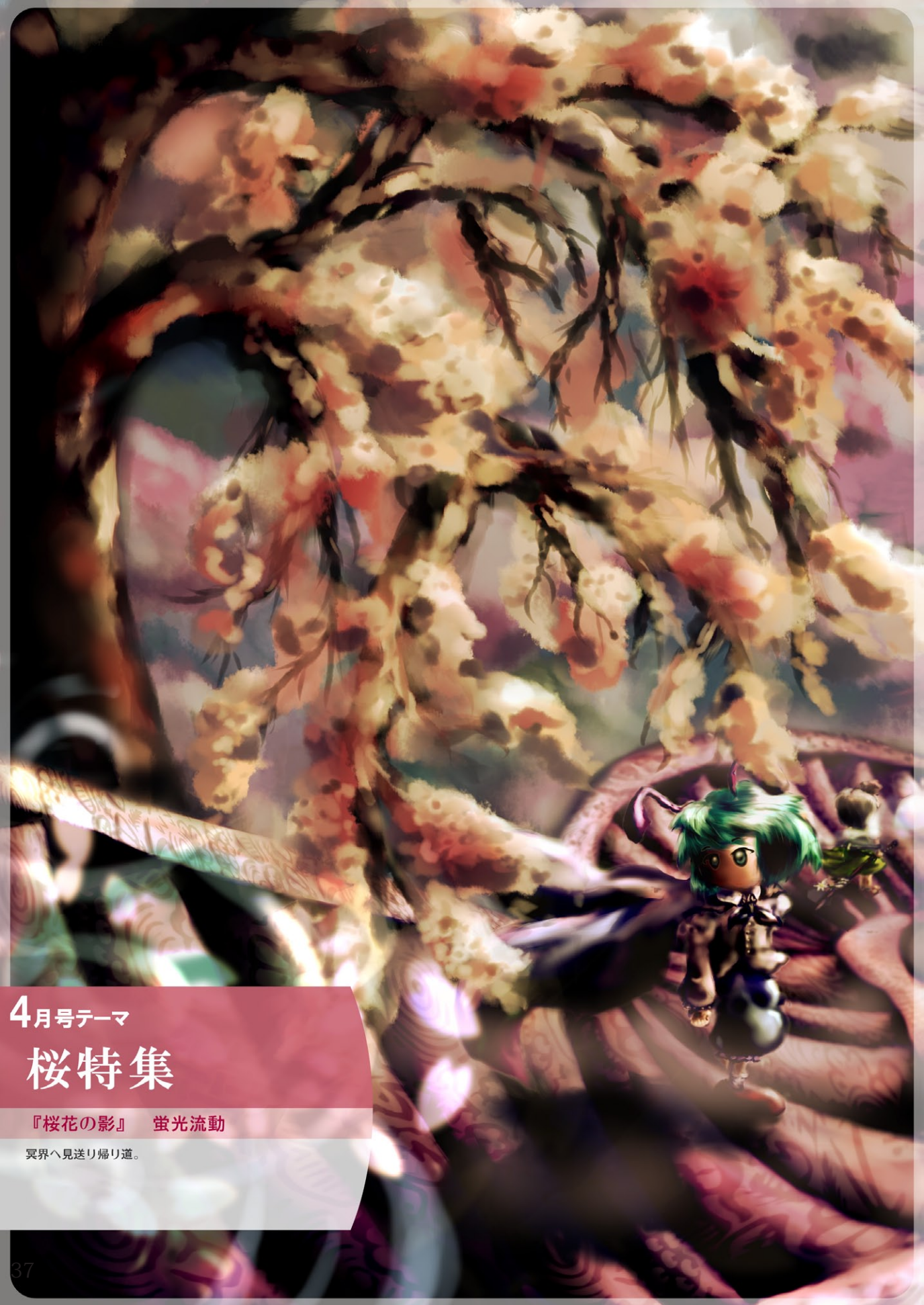
## ～森にて、ルーミアと～

著者：夏樹　真

　幻想郷の何処かにある森の中。
　冬の終わりを告げるような暖かな日差しが燦々と降り注ぐ中、小鳥達のさえずりが聞こえてくる。風さえ吹かなければ、春はもうすぐそこだと感じられるだろう。もしかすると春妖精の姿を見る日も近いかもしれない。
　そんな中にある小道を、蟲の妖怪であるリグル・ナイトバグと宵闇の妖怪であるルーミアは二人で並んで歩いていた。ルーミアの方は、どこか具合が悪そうにも見えた。それを心配するように、リグルが時々顔を覗き込んでいる。
　ルーミアが苦しそうにしている理由、それは実に単純なものであった。
「お、おなかすいたぁ……」
　そう、ずばり空腹だった。空腹のあまり、辛そうにしているルーミアを見てリグルは頭を抱えたい衝動に駆られる。はぁ、と溜め息をつきながらもリグルはルーミアへと手をさしのばす。
　毎度毎度ながら、この子は空腹に愛されているんじゃないかと思う。会った時に、二回に一回はお腹が空いたと言っている気がする。
「ほら、ミスティアのお店までもうちょっとだからさ。頑張ろうよ」
「うぅー、もう無理ぃー、歩くのやぁーだぁー!」
「まったくもー、誰の我侭で私もこうやって苦労していると思ってるのよ……」
「……なんでだっけ?」
「ルーミアが飛ぶの疲れて嫌だからって歩いてるんでしょー!?」
　首をかしげて、頭にハテナマークを浮かべているルーミア。そんな様子を見て、リグルはルーミアから目を反らして明後日の方向を向くとあはは、と渇いた笑いをあげる。いや、あげるしかなかった。
　前にもルーミアがうまく食べ物にありつけずに、空腹で倒れるという出来事があった。その時は二人の親友であるミスティアが自身が運営している八目鰻のお店でご飯を頂いて事なきを得た。ただ、ルーミアの食欲を侮っていたミスティアはそれから数日間、営業できないという事態に陥ったと聞いた。
　優しい性格のミスティアはその事をルーミアに言ったりはしなかったのだが、まさかそれが二度も起きるとは夢にも思ってはいないだろう。むしろ、そこへルーミアを連れて行こうとしていることに罪悪感を感じずにはいられない。
　だが、リグルとしては他に食べ物を提供してくれそうな知り合いがいないというのが現実だった。
　チルノや大妖精が何か食べ物を持っているとは考えにくいし、慧音のいる人里に妖怪二人で乗り込むわけにもいかない。魔理沙なんかも候補に挙がったが、怪しげなキノコを押し付けられそうだしそもそも何処にいるのかわからないほどの神出鬼没なので捕まりそう

になかった。よって、ミスティアに落ち着いてしまったのである。
　心の中で、親友に謝る。いつか、お店手伝うから許してね、ミスティア。
「ほら、早く行くよ。私としても早く解放されたいしね」
「うん、わかった」
「手を繋ぐよ、私が連れて行ってあげるから」
　ルーミアはリグルから差し出された手を取り、二人は手をつなぎながら歩いていく。
　横並びから、リグルが前に立って後ろからルーミアがついてくる形となる。これじゃまるで保護者みたいね、と考えてリグルの口元からクスリと笑みがこぼれた。
　そのまましばらく歩いた時、ルーミアがぼそりと呟いた。
「えへへー、なんだかリグルってあれだよね」
「んー、何ー」
「温かいよね、リグルって」
「……はい？」
　突然の発言にキョトンとするリグル。振り返ってみると、ルーミアは笑顔でえへへと笑っていた。
　立ち止まり、その言葉の意味を吟味する。温かいとはつまり、文字通りということなのだろうか。確かに手を繋いでいるから体温が伝わっているだろうし、他の人からは体温が高めだとは言われたこともある。
　だが果たして、そこに込められた意味が何なのか。ぱっと理解できなかった。
「それはつまりどういうこと……？」
「どういうことっていわれても、リグルは温かいから、温かいんだよー」
「余計わからなくなったわ……」
「えへー、でも温かいリグル好きだよ！」
　そして突然抱きついてくるルーミア。
　いきなりの行動にリグルは対応できず、そのままぎゅっと抱きつかれてしまう。ルーミアは顔をリグルの控えめな胸に埋めるようにしてスリスリと押し付けてくる。
　そんないつもながらのルーミアを前に、また一つため息。つまりルーミアが言っている温かいというのは、そういう意味なんだろうなぁと理解する。少しだけ、顔が熱くなった。
　そんな照れを隠すようにルーミアの頭をわしわしと撫でると、抱きついているのを剥がす。そしてまた手を繋ぎ直した。
「ほら、そんなことしてないで早くミスティアのところに行くよ。お腹空いてるんでしょ」
「そういえば、忘れていたのだー」
「本当、ルーミアは見てて飽きないね」
「リグルもだよ！」
　そして二人はまた前後になる形で歩き出した。
　顔には楽しそうな笑顔を、繋いだ手にはお互いの温かさを感じながら。

（終）

〈作者コメント〉
　リグルの日常ってどんな感じだろうなぁって考えていたら、こんな感じのお話が生まれていました。なんだかリグルーミアなお話になってしまいましたが、この二人ならこれくらいでもいいかなあって思いまして。終盤の温かさの意味、皆さんはどういう風に受け取ってもらえるのかが少し楽しみだったりします。それでは、ありがとうございました！

4月号テーマ

# 桜特集

『桜花の影』　蛍光流動

冥界へ見送り帰り道。

『 夜桜とふたり 』　黒ストスキー

この二人で花見をするならやっぱり夜桜かなあ、ということで

『 無題 』 ADDA

りぐるんとの楽しい花見。あぁ、夢で見ました。ちょっと成長したようだが。（笑）

『 桜ひらひら 』　紅

※コメントなし

『 さくら！ 』　キッカ

桜！　描くの難しいです

『 無題 』　IDEA(GAGrim)

※コメントなし

『 桜吹雪 』　貴キ

例大祭お疲れ様でした＆有難う御座いました…！
桜は好きな花なので無理矢理テーマ投稿に。

リグると！
妖怪桜

西行妖…
今は三分咲きといった所か…

まったく…庭師にとって
害虫は天敵なんですよ…

幽々子様…

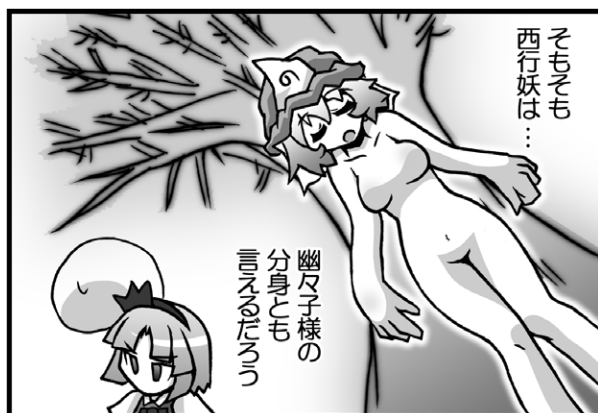
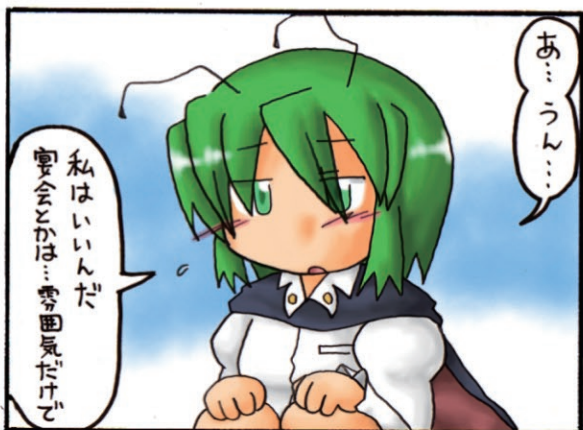
そもそも西行妖は…
幽々子様の分身とも言えるだろう

!!

んん？
その西行妖に虫がたかるという…
こと…　わああアアァアァーーーーッツ

ちょっ
な、何？

えっ、
顔、怖いから！

ひどぅん

蟲の手帖は
4/1をもって月の手帖に
生まれかわりました
ウサ

マンガを描いた人 HOUSE / 扉絵を描いた人 麻子

悪かったって
ぜぇ
はぁ
ぜぇ

しかし世の中には姫だ男の娘だチビッ子だポンデだその他諸々の亜種がいるんだぜ
ちょっと太めくらいなんだ そう気にするな
メタ発言禁止!!
…そうソレだ メタボタルったか
違うってば!!
ヤマメは何を流行せようとしてるのよ!?

私が宴会を避けてるのは空気が読めないからよ
縁起に新しい記述を増やすべきですね KYと。
うっかり蟲話して周りをフリーズさせちゃうの
メモ
参加者の視線がパーフェクトフリーズ

なんだソレくらい 神をフリーズさせるのに比べりゃ可愛いぜ
ワー
ワー
チルノーーッ!!

すごいね! いろんな人形がいる!
ふふ
それはマトリョーシカ 入れ子になった人形よ

アブラムシ… メスのみで幼虫を産む単為生殖で次々と増える。
へぇ アブラムシみたいなお人形さんね!!
産まれる幼虫の中にはすでに幼虫(孫)が入っていたりする昆虫界のマトリョーシカ。

かわいい かわいい
複雑。↓

すきま妖怪こと八雲紫とゴキブリは非常に似ている。無論、姿形の話ではなくその性質がだ。片や賢者と呼ばれる古妖怪、片や生き残りのスペシャリスト。そのどちらも思慮深く、経験に裏付けされた知恵に基づいて行動をとる。そして何より両者とも境界領域の住人であることが挙げられる。八雲紫が境界を操りそこに住んでいるようにゴキブリも人間の生活スペースと自然との境界に棲む蟲だ。自分のスペースと外とを明確に区切りたがる人間にとって壁のすきまに棲む蟲は境界を曖昧にしてしまう恐ろしい存在なのだろう

しかしよくそいつの頭の中を平然と覗いていられるなぁ
は？
？？

いや絶対に脳内は蟲まみれだろ？
ヘタに覗いたりしたらトラウマになりそうだぜ
大きな石を持ち上げたら蟲がびっしり居た

あぁそういうことですか
心配には及びません 蟲とか全然大丈夫なので
！
もしかしてまともな協力者の登場かしら

ペットのエサには欠かせませんから
あー…
地獄フォレストローチとか
ぴちゅーん

ところでリグルさん これ桜特集なんで 何かひとつでも桜ネタを
祝！新作出演
…
また…
そのうちメタボマンガと呼ばれそうな勢いだな

んー…そうねえ…
桜の樹液は不味い
とか？

かといって人気のクヌギだって糖分は4％程度らしいわ
日本酒で8％程？
ならお酒を飲んでる方がまだ蛍らしいわよね

ははぁ オチは花より団子ですか また捻りのない
ミスティアー
うなぎ追加ねー
新ジャンル メタボ萌えー…ないぜ
捻る腰もない

# お花見

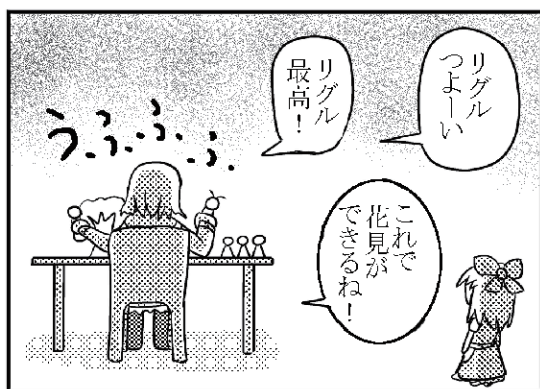
描いた人:preludemako

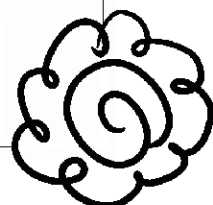
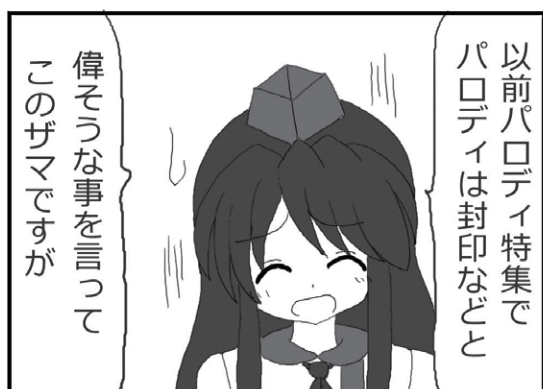
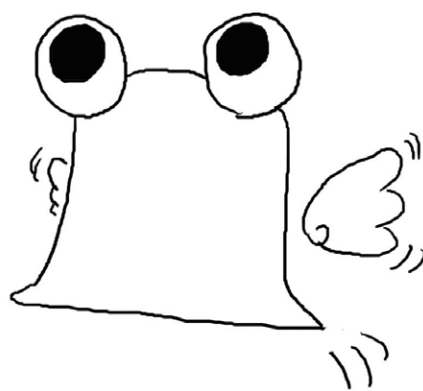
最初ってことですごく緊張しました!とても楽しかったです。またこういう企画してくださいね!企画したpreludenanoさんに感謝します!(笑

描いた人:preludesato

みなさんお疲れ様でした。私としてはカリスマゆゆさまが描けて満足、っていうかそれが描きたかっただけっていうね^^;

描いた人:preludegaro

自称オチ担当。(←

描いた人:preludenano

参加してくださった皆さん本当にありがとうございました!ところで何で俺だけスペースが狭

楽屋ウラ的何か。

描いたアホ
草加 あおい

ゆうかりんのばあい。

ゆかりんのばあい。

勘違い編？ボケ通し編？

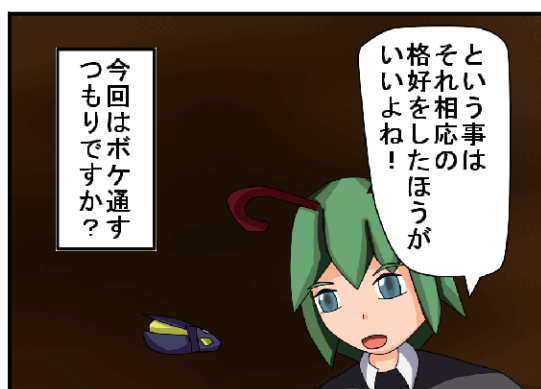
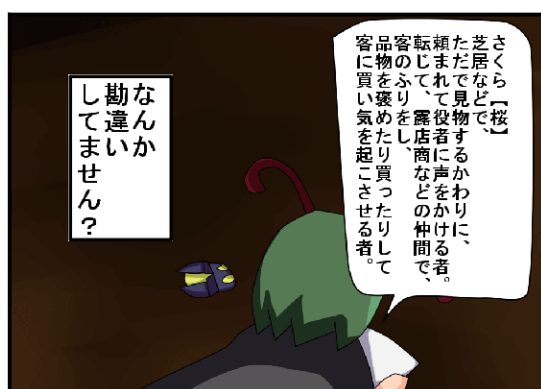
桜の季節だよ！
お花見の誘いを受けてるのですよね？

さくら【桜】芝居などで、ただで見物するかわりに、頼まれて役者に声をかける者。転じて、露店商などの仲間で、客のふりをし、品物を褒めたり買ったりして客に買い気を起こさせる者。
なんか勘違いしてません？

という事はそれ相応の格好をしたほうがいいよね！
今回はボケ通すつもりですか？

ちょっと待ってて！着替えてくる！
ガサゴソ

ほりたぐる
～桜編～
描いたひと：悠羅悪

この初もかんがえてました

違うさくらコスチュームに期待

ここまで全てフォントにボールドかかってました

じゃあどんな格好をしていけば…

いや普通でいいですよ

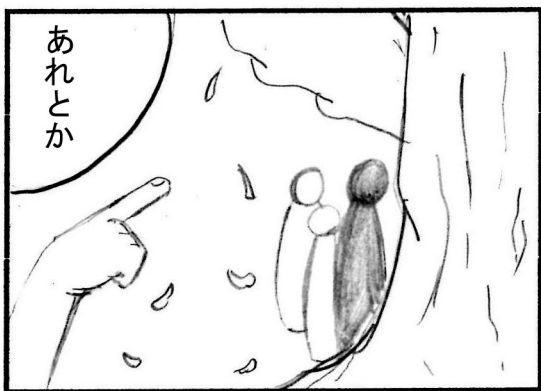
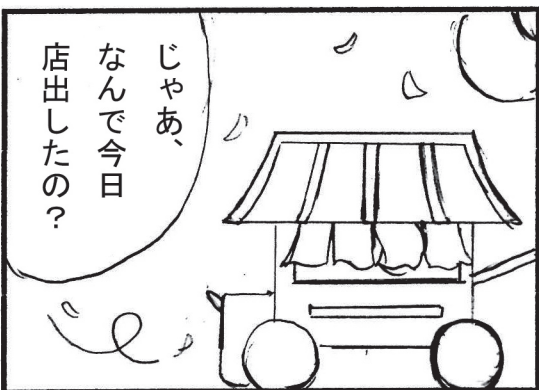
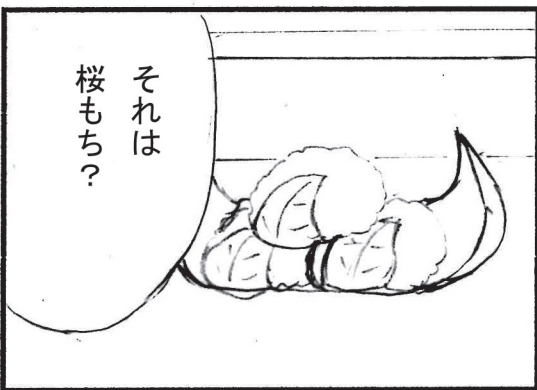
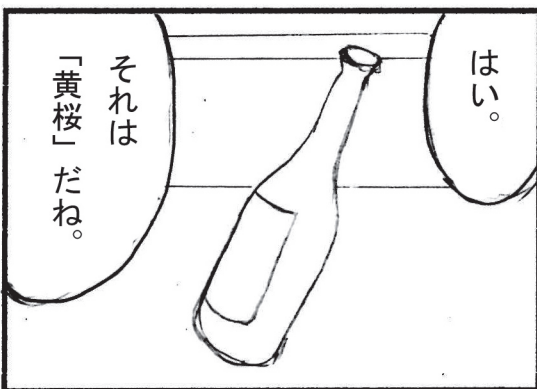
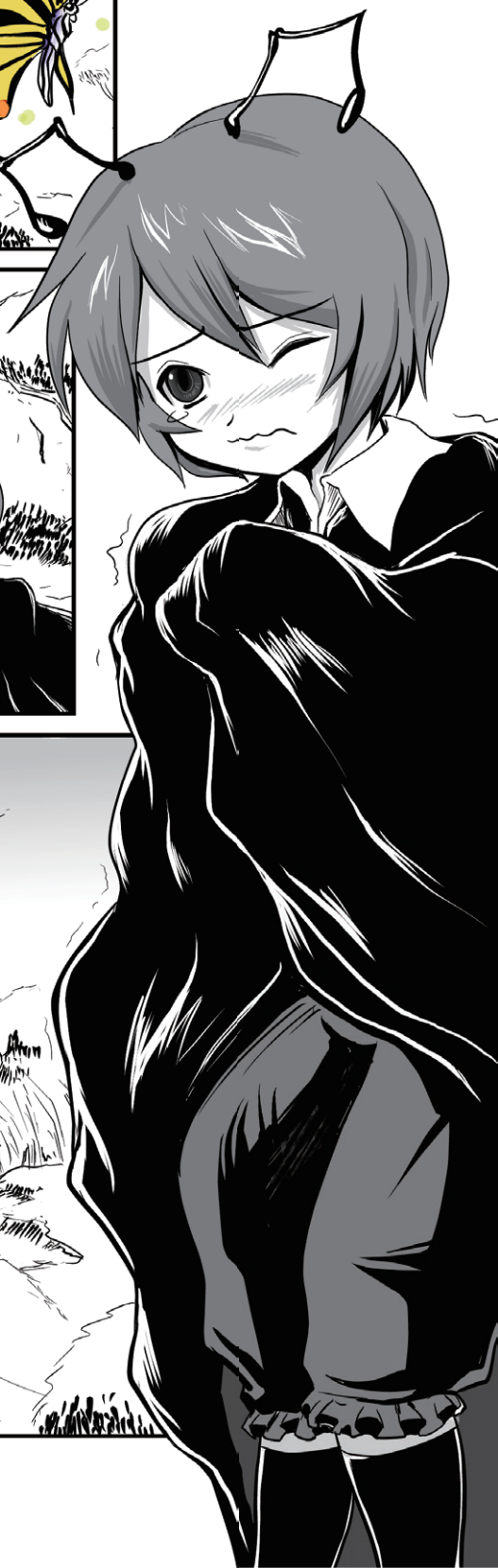
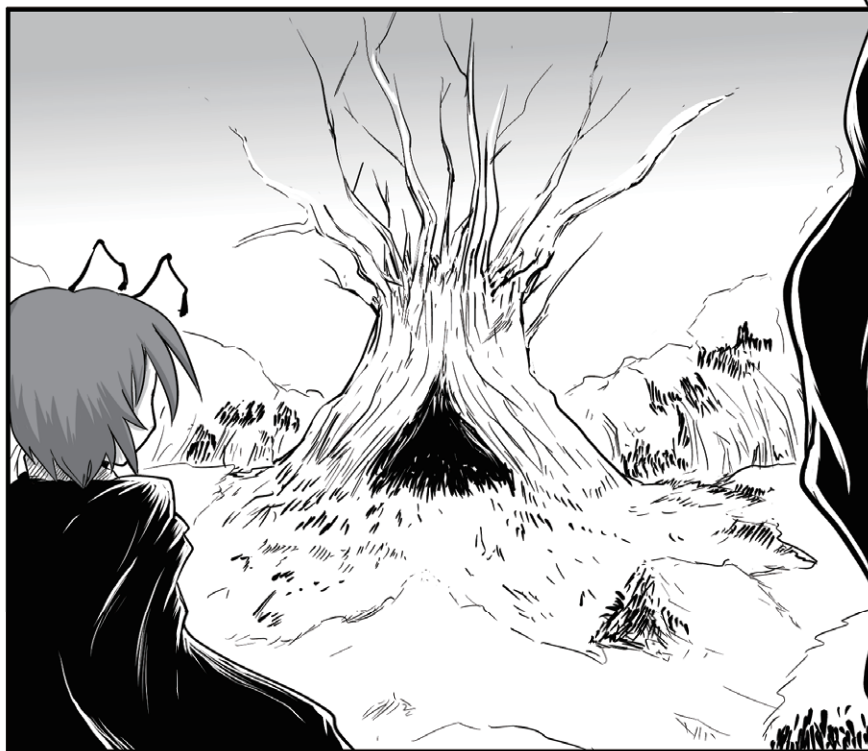
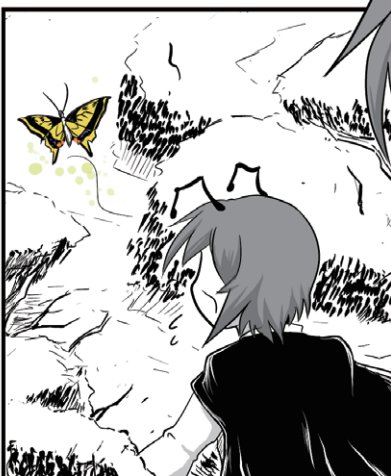
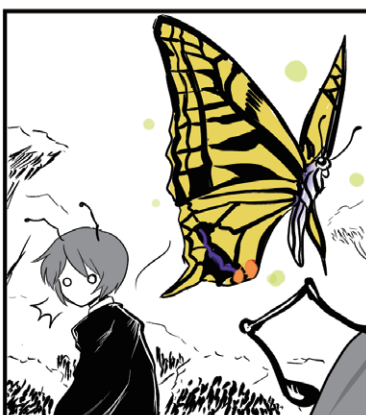
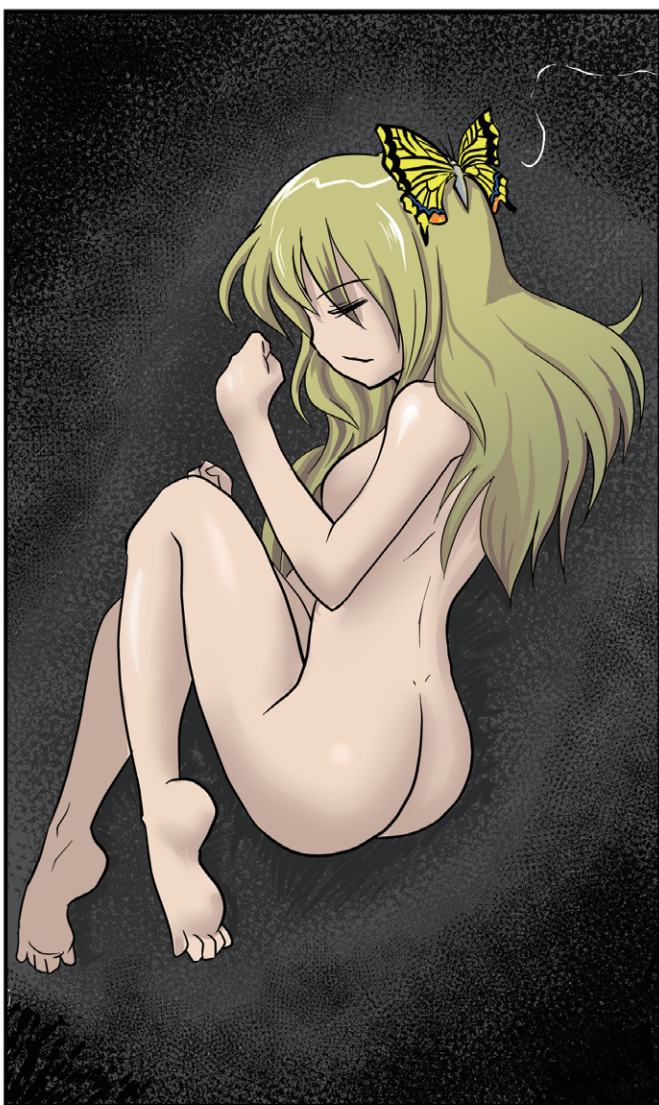
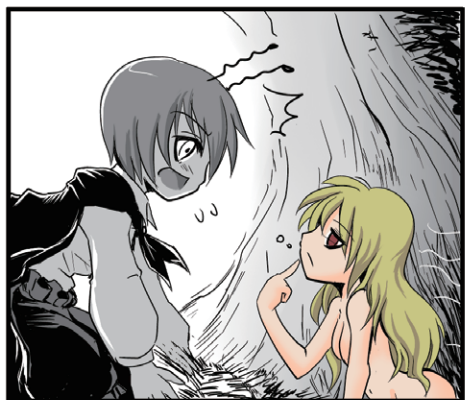
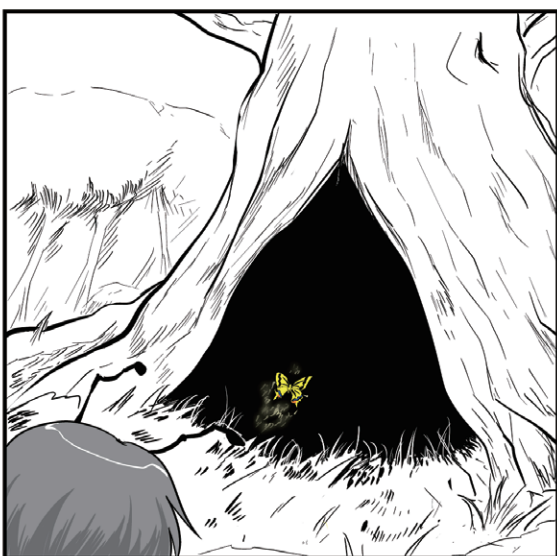
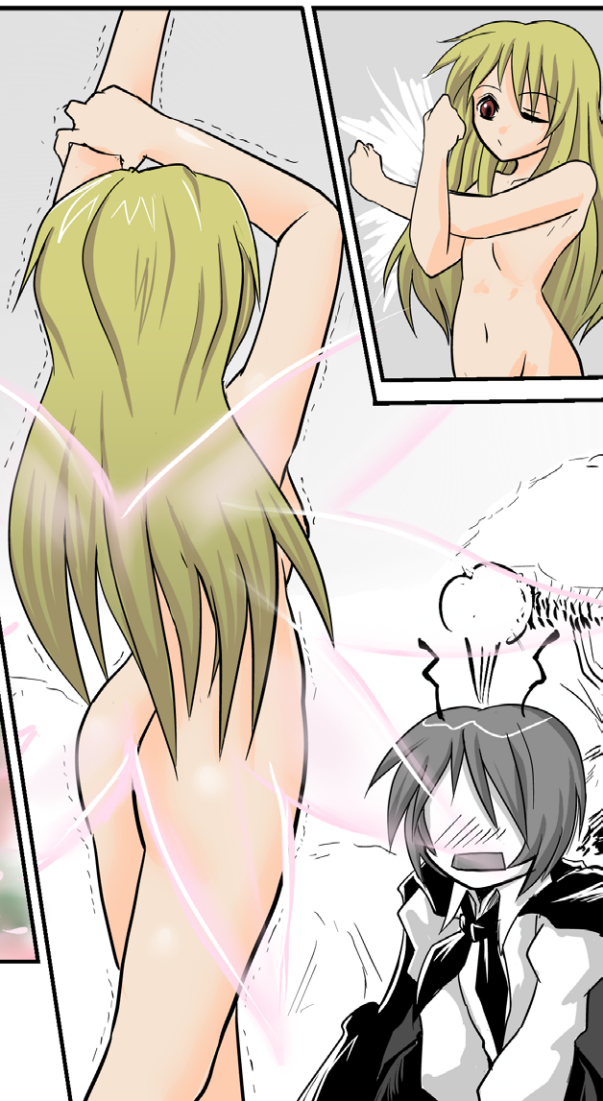
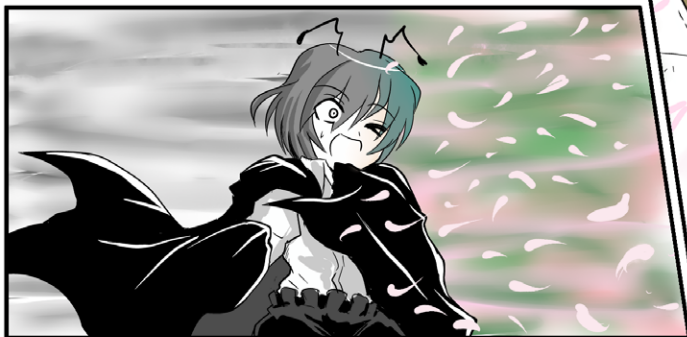
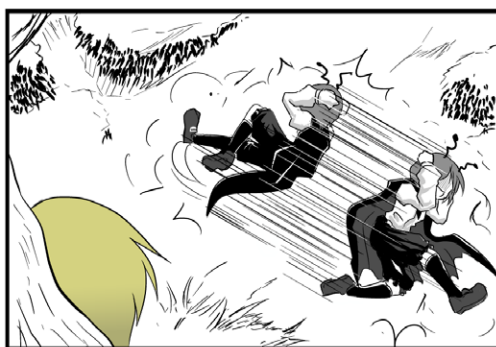
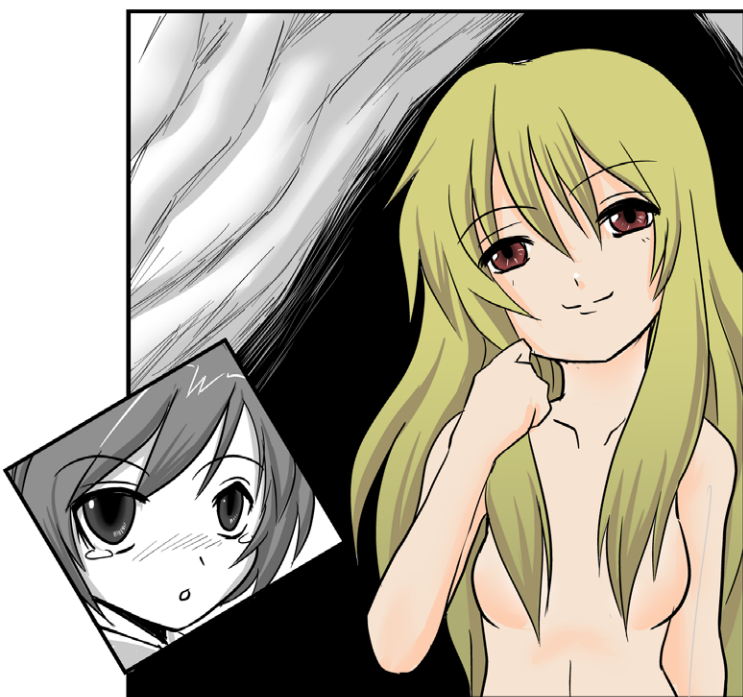
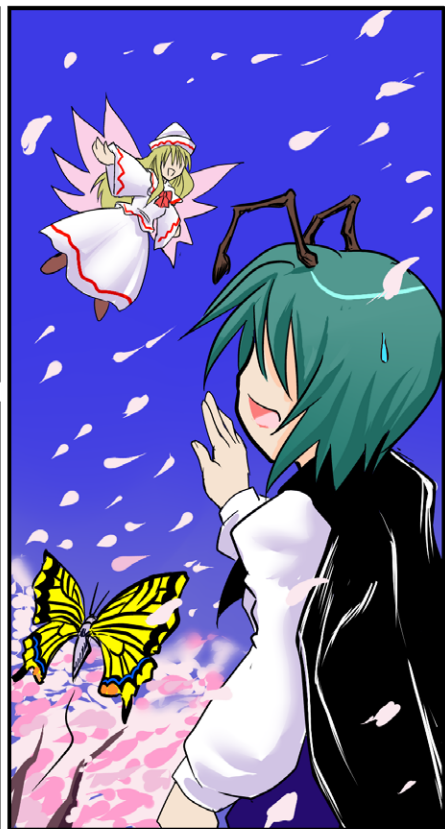
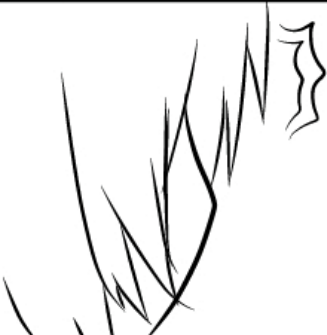
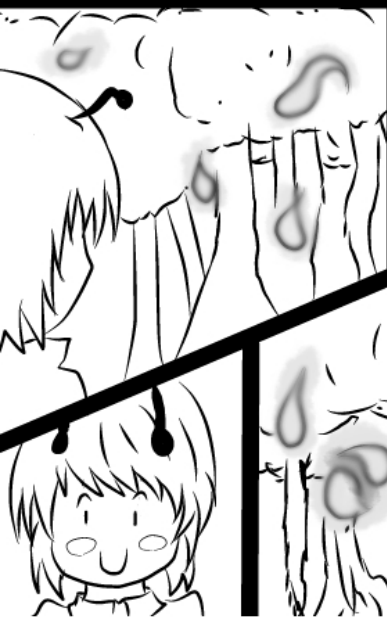
お花見
一面に広がるサクラ！
たくさんの人の波！
そこら中で湧き上がるコール！
そして仕事の私たち。
なんで私まで！！
順　番
たまにはいいじゃなーい。
よくない！
最初はチルノに頼もうとしたけどお勘定が・・・。
次にルーミアに頼もうとしたけどお客さん食べそうだし。
仕方ないからリグルに・・・
私は最後か！

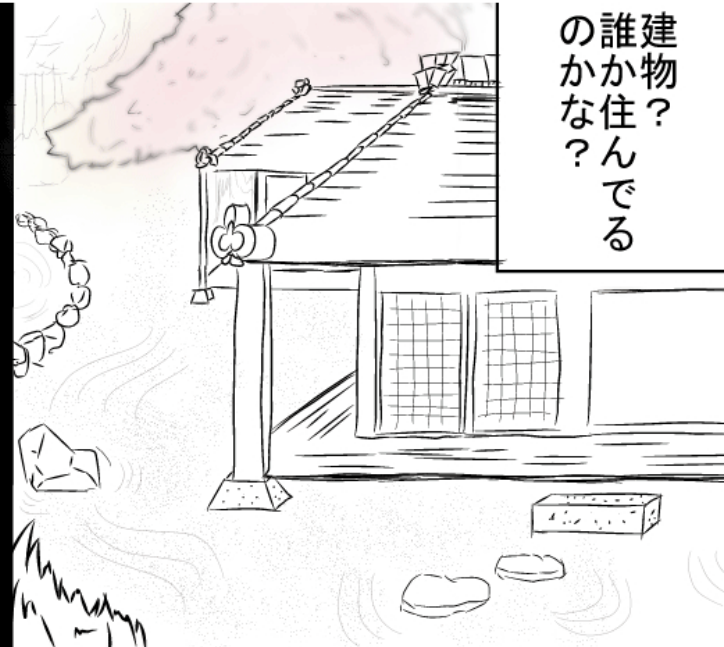
分別しましょう

仕事の特典

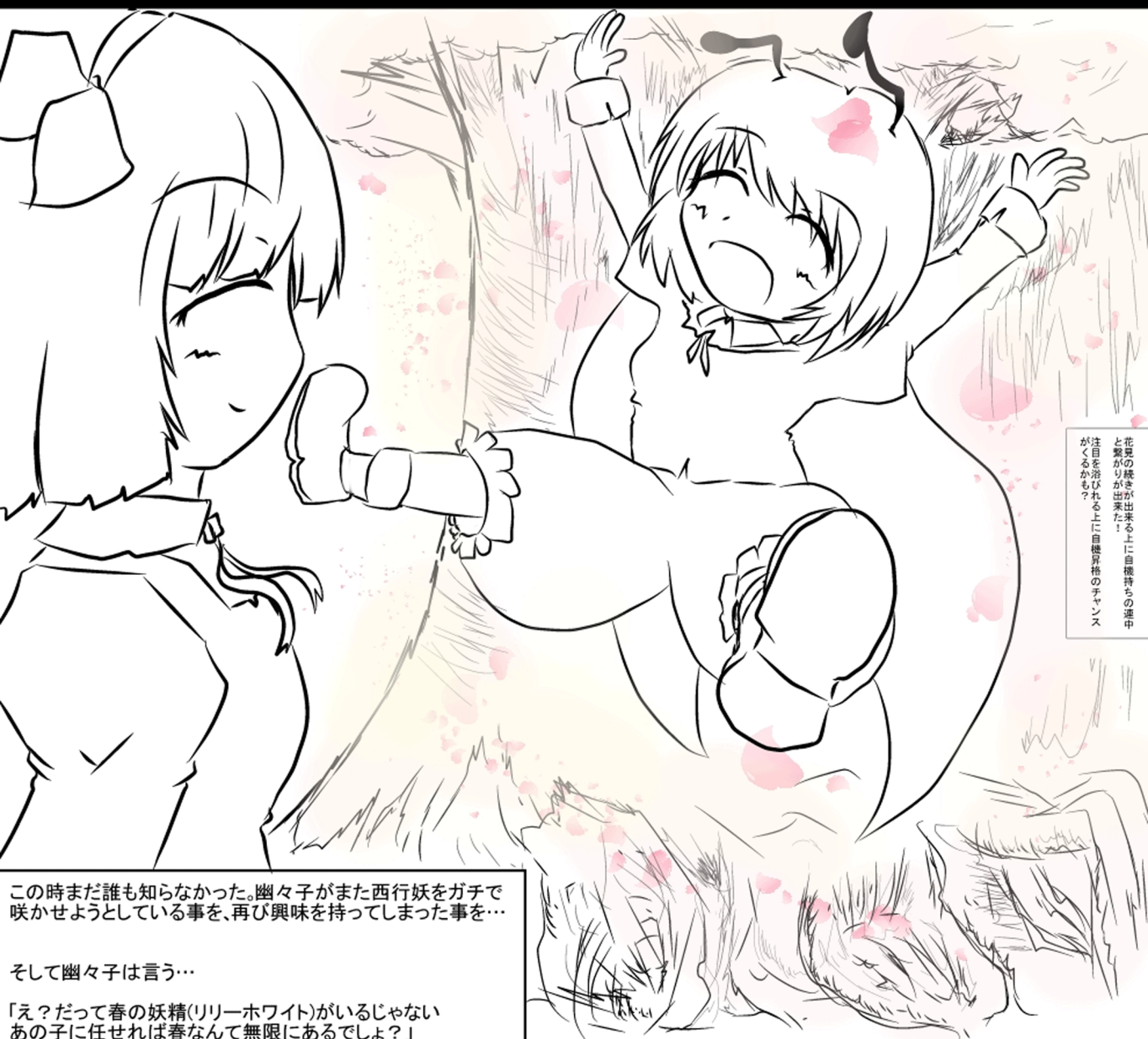
テーマ「サクラ」

売り上げは

春彩
斑
?

「リグル、冥界に行く」
作「豆板醤」
ハァ…ハァ…
まったくチルノちゃんは…
ボクは寒いの苦手って
分って 何で…
はぁ〜
何で「これで一生花見できるよ！」って言って桜の木冷凍保存するの？
冷凍した瞬間花見じゃないから、ただの氷見てるだけだから…
そしてチルノちゃん、花見してたボク達も巻き込もうとしたのはわざとだよね…
って言うか…
SAIkyo!
Help!!
桜
ココドコ？？

あぁ、花見の続きしたいな…
!
コレって…
人魂!?初めて見た!
はわ〜
って事は…ココは…
冥界!!?
豆板醤
ボクまだ色々したい事あるのに…ってボク死んだ!?
まぁ、また来た道を戻れば帰れるんだろうけど…

ちょ…マジで！
って、ん？何だこの階段？
ふわっ
…そういやこの階段って誰が利用するんだろ？
冥界の人魂なら飛べるし妖怪も飛べるし亡霊も飛べるし…
まぁ、いいや。
長いな…
!
!!

建物？
誰か住んでるのかな？
！
大きい…
何コレ…
サクラの木…？

ビクッ
何者だ！
なんだ…
勝手にお邪魔してます
あなたですか。珍しいですね。何か用ですか？
実は…かくかくしかじか…
何言ってんの？
かくかくしかじか？
少女説明中
何スかあれ？
ああ、あれは…
妖

それは「西行妖」と言って、妖怪桜なんだ
前に幽々子様が面白半分で咲かせようとした事件があってね…
何と言うか…嫌な事件だったね…
止められたけどね
妖怪桜？
今は咲かせようなんて事はないと思うがって…
何か成長してね？
えっ？桜って成長するものじゃないですか。それに咲かせちゃダメなんですか？
西行妖を咲かせるには「春度」を与えればいいのだが、莫大な春度がいるから幻想郷で集めると幻想郷に春が来なくなるよ？
ダメだろ！春が来ないと虫達が起きられない(引きこもりニートになる)だろ！
だから一度頭の春度がＭＡＸな巫女(その他)に止められたんだけど…
そういえば…
妖夢、今度の花見はここでしましょう。とっておきのイベントも用意してあるから
はい、決まり
えっ？唐突ですね
神社でしないんですか？
いつも神社だと飽きちゃうわ
でもそうなると料理の量がハンパないんですが…
霊夢はいつも独りで用意してるわ
素でめんどいんですが…
さて、また集めに行かないと♪
留守番頼むわ
…
咲かせる気満々じゃん！今すぐ止めさせないと！
でも幻想郷に春が来ないと…
でも今回はそれが目的じゃないと思えるんだ
もしかしたら本当にみんなでココで花見がしたいから
ないが…幽々子様の楽しそうな顔…
？
その顔に邪なモノが見えなかったから
でもさすがに幽々子様も全部持っていくようなことはしないと思う。また変なのが来るだろうしまた頭の中が春満開な巫女が来そうだし…今回は団体で来そう…
(もう１２．５弾も出るし)
KANON
全部持っていかないって言う根拠は？
まぁ、万が一そんな事があったあら私が止めるさ
もし違ったら…
花見に来てくれないか？

ボクが？
花見は大勢の方が楽しいからね、イベントってのも多くの人に見てもらった方がいいと思うし…
コレくらいかな、私が出来る幽々子様へのお手伝いは…
ボク、みんなと花見をするのは初めてだ！
それにさっきやってたんだけどちょっと桜が亡き者になったから中止になって…
？
えっと、友達とか連れてきてもいいのかな？
あぁ、そうしてくれ
花見の続きが出来る上に自機持ちの連中と繋がりが出来た！
注目を浴びれる上に自機昇格のチャンスがくるかも？
この時まだ誰も知らなかった。幽々子がまた西行妖をガチで咲かせようとしている事を、再び興味を持ってしまった事を…
そして幽々子は言う…
「え？だって春の妖精(リリーホワイト)がいるじゃない
あの子に任せれば春なんて無限にあるでしょ？」
その後幽々子は再び懲らしめられました。
花見もいつものメンバーで行われ
リグル等ははしょられました
END

# 冠桜

著者：くろと

私と星は阿求を残して、開けっ放しの蔵へと入った。

星が手に取った蜀台の蝋燭には火が灯っており、中を明るく照らし出していた。蔵の広さは一六畳ほどで吹き抜け構造の二階建て、一階と二階を繋ぐ梯子が掛かっており、上階には小さな窓が一つあったが掛かっていた閂が圧力を加えたように壊されていた。肝心の内蔵については年代物の壷や風呂敷に包まれた額縁らしきもの、それに缶詰や乾パンといった非常食や非常時の雑貨品などが見受けることが出来た。それらに埋もれるように一つの大箱がある、中には巻物が収められていたが、並びが微妙にずれていた。よくよく見ると隙間がいくつも空いてある。詰めればもう一本巻物が入るはずで、つまりは一本だけ抜き取られていたのだ。

私は外に出て、淀んだ空気を吐き出し呼吸した。続いて星も外に出る。

待っていた阿求に星は告げた。

「確かに盗られたようだ。ところで盗られた巻物とやら大事なものですか？」

「そうですね、まぁ、必要か不必要かと言われれば不必要ですけど……あまり褒められた行為でもありませんから」

阿求はチラリと私を見た。

「では正確に教えていただきたい」

星に対し、阿求は事情を詳細に説明しだした。

「本日夕刻、蔵から物音がしたので行ってみました。ですが蔵の錠前がしっかりと掛かっていましたし、夕立も降っていたから、それで私が勘違いしたのだと考え、安堵して引き返しました。それから二時間後、またも蔵から物音がしました。今度も確かめると錠前は掛かっていました。ですが不気味を感じて錠前を解除し、中を調べてみると巻物が一本、失われていたのです」

「そして偶然にも通りがかったリグルを疑ったと」

「はい。そうです」

正直者な阿求、はっきりと告げた。私はうんざりとし、怪訝な表情で睨んでやった。だが、阿求は涼しい顔である。星は苦笑した。

この柄の派手そうな妖怪は寅丸星というそうで、私が阿求に尋問されている所に通りがかり、私の主張を信じてくれた。

「疑いを晴らすには、その巻物とやらの所在を掴むのが一番ですね」

「出来るのですか？」

阿求が疑り深く聞いた。星は胸を張り、それに答える。

「ええ、私には優秀な部下がいます。彼女ならば容易く発見してくれるでしょう」

私は若干、星を軽蔑した。というのも今の台詞にそこはかとない他力本願を感じたからだ。されど解決するならそれでいいかとも感じて、何も言わなかった。

では早速と星はその有能な部下を大声で呼んだ。名前はナズーリンらしい。

「………」

三分ほど経ったが来ない。この近くには居ないのだろうか、と、一匹の子鼠が星の頭上に降ってきた。

「なんでしょうね。おや、手紙が括り付けられていますよ。きっとナズーリンからの連絡だ」

子鼠の胴体には細長く折られた紙類が巻かれていた。星は子鼠からそれを外し、子鼠を撫でながら手紙を音読した。

『親しきご主人。貴女は最近、私に頼りすぎではないだろうか？　それとも私が貴女に協力しすぎただろうか？　どちらにしても聖白蓮がご主人の精神衛生上良くないと判断し、呼び掛けを断りなさい。と申しました。止む無く、断腸の思いで協力は致しません。なお、どうしても困った時は子鼠に手紙を括り

付け、飛ばしてください。すぐに参上します』
　何を思ったか星は手紙を裏返した。しかし、裏返したところで何も書かれていない筈である。星は五秒ほど悩み、気付いたように嬌声を発した。
「これは大変だ！　どうやら私は上司と部下からの信頼を一度に失ったらしい」
　何故か、私に対して締め括った。私に言われても困るし、反応できない。
　と、星は阿求に振り返った。
「仕方がない。では私とリグルで探し出しましょうか。なに、たいした事はありません。精精と頑張れば結果は当たり前となるもの。それが努力です。……リグル、見たところ貴女は蟲の妖怪でしょう、その能力を教えてください」
　私は自分が蟲を操る程度の能力だと星に伝えた。星は、そうですか、と頷き、続いて私にお願いするように命じてきた。
「里を円で囲うように見張らせ、外に行く者が居るなら尾行してください。まだ間に合うでしょう。この時間帯なら出歩くものも少ないはずです。相手は巻物を持った、おそらくは妖怪です、しかし人間の可能性もあります」
　私は言われたとおりに近場の昆虫に指示を出した。後は命令を受けた虫たちが自動的に他の虫たちにも命令を伝播させる。
　上調子な星は子鼠を頭上にある帽子らしき物に乗せて、阿求に質問した。
「さて、盗られた巻物、それがどのようなものか、お解かりになりますか？」
　この問いに阿求は眉をピクリと動かした。それは少し怒っているにも見えた。
「無論です。私が覚えられないものなどない。あれは桜に関する資料、基礎知識、幻想郷にある桜の種類、幻想郷にある本数、後から植えられた場所、それに開花時期などを書き記したものです」
「おや？」
　嬉しそうに星の瞳が煌いた。
「植えられた場所ですか、なるほど。つまり幻想郷に最初から生えていた場所ではないのですね？」
「え、はい。そうですけど？」
　意味深な問いに阿求はちょっと戸惑うも、頷いた。星は手を顎に当てた。また頭の子鼠も器用に二本足で立っている。
「ではその場所を覚えていますか？　出来るだけ正確に」
　その質問に阿求は眉根を詰め、頬を紅くした。間違いなく怒っていた。彼女は私に対し、私室から筆と墨、それに白紙の巻物を持ってきてください。と不機嫌に頼んできた。私は頷き、彼女の部屋へと向かい、筆と墨、巻物を見つけて戻ってきた。彼女はその二つを掻っ攫うように私の両手から取ると、星に向かって挑発的な態度で喋る。
「全て正確でよろしいですね？」
「勿論です」
　阿求はその場で立ったまま書き始めた。綺麗に巻かれていた巻物はどんどんと捲られ、まるで印刷されているかのように黒い水彩の文字群が書き出されていく。
　約五分ほどで阿求は一本の巻物を書き上げた。今度はクルクルと巻物を丸め、それを笑顔で星に渡してきた。
「どうぞ。盗まれた巻物と一字一句、全く以ってこれ以上ないと言うくらい正確な写本です。これがあれば盗まれたものなぞ必要すら無くなりますね。ええ、探し出す必要すらないぐらい」
　星は礼をして、それを受け取った。すぐに読み始めた。星の手つきと眼球運動は次第にその速度を速めて、やがて私では呼んでいるのか疑うほど手早く、巻物を読み終えたのだ。
　星は感想を手短に告げた。
「本当に完璧だ。一点を除いて」
「一点？」
「ほらここを見てください」
　巻物の中頃にぽっかりと白い空間がある。それは何も書かれておらず、前後の文字と比較し、大体三行ほどの白地がむき出しだった。私は阿求を見ると、しかし、彼女は言い訳するように言い募った。
「そこには最初から何も書かれていませんでした」
　その言葉に星はうんうん。と二、三度、首を縦に振った。頭を振るたび、子鼠が落ちそ

うになって踏ん張っていた。
「そうだね。そうでないと可笑しい筈だ。だってこれに書かれた情報は不文律甚だしく、読み物としては実に読みづらく分かりにくい」
　星は私に巻物を手渡した。私は巻物を開いて適当に読んでみる。
『桜の蕾は三月から五月に掛けて開花します。桜の自然種は十種ほど。桜は傷つき、腐りやすい。ソメイヨシノの花びらは五枚』
　なるほど、確かに変だ。まるで知識を適当に詰め込んだようであり、前後の文脈に関係性が薄い。星は人差し指で巻物を指し示して告げる。
「色々とあるだろうが、普通、蔵で保管するようなものは大事なものだと相場が決まっている。しかし、その巻物が重要とは思えない。だってそうでしょう？　桜についてならもっと役に立つ、読みやすい巻物が書かれた当時といえど簡単に手に入る筈だ。ではその巻物はなにか？　決まっている。何かしらの秘密があるのですよ。その空白部分にね」
　星は自信たっぷりにそう告げた。
　私は空白を覗いてみた。けれど穴が空くほど眺めても空白は空白だった。私は胡乱な眼差しで星を見た。
「ヒントなら、そう、カンムリザクラなる説明箇所です」
　私はそれを探した。ふと、阿求が指で指し示した。
「あ」
見つけた。それは最後らへんに書かれており、私は黙読する。
『カンムリザクラ。四月の中旬、快晴の下で温暖な気候を受け続けると開花。時間の経過もしくは寒波にて散ってしまう』
　これが一体なんだというのか。私には訳がわからなかった。
「分かりませんか？　カンムリザクラなる木は、私の記憶する限りで存在しません。つまりそれは架空の桜に他なりません」
　星が付け加えた。しかし、それで、と私は彼女に食いついてみる。
「一体それがどうしたの？　書いた人が勘違いしたとかじゃないの？」
　星は微笑し、私と阿求に応答した。
「そうですね。その可能性もありますが、……ところでその巻物、実は開花時期にあわせて品種が書かれていることに気付きましたか？」
　私は星の言葉を受けて、もう一度、巻物と流し読みする。
　最初にはヤマザクラ、続いてソメイヨシノ、ヤエザクラ、最後にカスミザクラという順番だった。それぞれの開花時期はヤマザクラが三月下旬、ソメイヨシノが四月上旬、ヤエザクラが四月中旬、カスミザクラが五月上旬である。確かに大体の桜は開花時期にあわせて書かれていた。しかし、一種類だけそれと違うものがある。
　カンムリザクラである。カンムリザクラは四月中旬に開花されるとありながら、カスミザクラよりも後ろに記載されていた。
「規則正しい中に不規則が潜んでいる。それは何故か、私はこれを可能性と解釈します」
「可能性？」
「そうです。カンムリザクラ、そこに何かしらのヒントがあります。……問題はこれが贋物なので本物とは同じ効果が得られないという事ですね」
　星は残念そうにした。それを聞いた阿求は顔を顰め、ついには咎めるように叫んだ。
「これは間違いなく、一字一句、完璧に写しました！」
「それは分かっています。ですが紙の材質や隠された秘密までも同じではないでしょう？」
「え？」
　阿求の返答も聞かず、星は歩き出した。向かった先は蔵であり、彼女はもう一度中に踏み入ると今度はすぐに出てこなかった。
　一〇分後。星は出てきた。その顔は綻んでおり、私たちが何かを言う前に快活に喋りだした。
「犯人が二階の窓から侵入したのは間違い無さそうですね。また犯人は一人で女の子です」
　私は驚いた。まるで回想するかのようなその口ぶりに、思わず疑念を口走る。
「どうしてそんなことが分かるの？」
「簡単ですよ、犯人は雨に濡れた状態で蔵に

入ってきました。すでに乾いてはいましたが、濡れた足跡が蔵中に残っていましたよ。薄暗いですから目を凝らさないと気付きません。足跡は一人分、歩幅から女性なのはすぐに分かります、男女では歩き方に差に出ますから。そして小さな窓からでは大人は通れません、侵入できるのは子供、だから女の子と考えました。おそらく蝋燭を持って内部を探検したところ、偶然に巻物の秘密に気付いたみたいですね」

　今度は阿求が遮った。それは不満そうな表情を浮かべており、星の言葉を疑うようだった。

「濡れた足跡は信じるとして、どうして内部の探検とか巻物の秘密だとかに繋がるんです？　証拠でもあるのですか？」

　阿求の物言いに星はくすくすと笑った。それから阿求の視線に気付いて、コホンと咳払いを一つ、続いて右手の人差し指を立てながら問われた事への説明を始める。

「証拠というのは結構簡単に発生しますよ。さっきの足跡もそうです。もし雨で濡れていなかったとしても、まあ、時間と根気は要るでしょうが、床の埃を精査すれば十二分に判断できます。特に倉庫というのは頻繁に掃除しませんから判断しやすいでしょうね。さて移動経路は足跡を辿ると分かります。それによると犯人は二階の明かりから侵入し、梯子を降りて、蝋燭と備え付けたマッチ箱を発見しました。蜀台に溜まっている蝋を検査してみると、大体、数日以内に二度以上付けられているのが分かります。いま一度は貴女が付けた跡です。だって数日間に何度も蔵に入ったりしませんでしょう？　そして足跡は灯りを得た事で蔵中を隈なく歩きまわっています。そのとき偶然が彼女に手を貸しました。大箱の、それも巻物の上に蝋燭を落としたようです。これも足跡の乱れ具合から察しが付きました。そうやって犯人は巻物が燃えていないか、手にとって調べたはずです。こうした証跡を積み重ね、私が出した推測が先ほどのアレです。勿論、絶対とは言えませんから疑っても結構ですよ？」

　私は疑えなかった。あまりに理路整然と話すから、それに引き込まれてしまったのである。阿求のほうはというと微妙な表情をしていた。それでも何も言わないのは、とりあえず納得したという事であろう。

　星はうんうんと頷いた。またしても頭上の子鼠が落ちかけた。

「ここからが本題です。それは、どこに犯人は行ったのか？　という事です。リグル。犯人らしき者は居ましたか？」

　星は私に聞いてきた。

　おそらくは張らせていた昆虫達の結果が知りたいのだろう。だとするなら、私は首を横に振った。

「里から出たものは一人も居ないってさ」

「一人も？　では決まりですね。相手は里のどこぞに忍んでいます。きっと近くにね」

　溌剌な調子で星は断定した。

　私は話の流れについていけず、程よく混乱していた。阿求も訝しげに悩んでいる。

　それから私は考えてみる。考え方はありがちだが、もし自分が犯人だったなら、という仮定法にした。それによると私は先ず、蔵の窓を力尽くでこじ開けた。妖怪なのでそこまで難しくはなかった。中は真っ暗なので灯りを探し出した。それから蔵を見て回り、巻物に蝋燭を落としてしまった。私は慌てて蝋燭を吹き消し、巻物が大丈夫だったか調べだした。そこで何かの秘密に気付いたはず。それから秘密の為に行動を始めた。と、そこで私は自分の思考が不確定な事に気付いた。それは大事な要素が欠けているからだ。

　思わず独り言を漏らした。

「犯人はどこで物音を立てたの？」

　阿求は二度、蔵から物音を聞いていた。犯人が蔵で物音を立てたからだろう。考えるとはっきり分かる。それは窓の閂を壊した時と蝋燭を落とした時だろう。

　順序は窓が先で蝋燭が後。だが、二度目の物音で阿求は蔵に入ってきた。

「てことは阿求が調べた時……犯人はまだ蔵に居た？」

　出した結論に阿求の眉がピクリとした。それは少しを驚いているようである。

「そうです。きっと犯人はまだ蔵に居ました。本来ならそこで見つかるはずですが、薄暗い

空間とリグルが偶然通りがかるという状況に手助けされました。これによって阿求は見逃します。その後、阿求は尋問を始めますから、蔵から抜け出すにはもってこいですね。もっとも抜け出す事には成功しましたが、さすがに空を飛んで逃げると目立ちます。だから飛べません。そして飛べないと逃げれませんからどこかに隠れる必要があります。その後、私も合流して蔵を調べに来ます。このときは阿求が外で待っていますから、やっぱり飛んでは逃げれません。さて、しばらくすると私はリグルに昆虫での監視を言い渡しました。こうなると犯人は一刻も早く、隠れるかをする必要が出てきます。すぐ近くの建物、つまり……」

　星は言葉を切って、振り返った。一際大きなその建物に、だ。私と阿求はハッとして、それを見上げた。

「隠れるには十分でしょうね、きっと居ますよ」

　それは蔵のとても近くにある、櫛田の屋敷である。

　昆虫による家捜しから一〇分、軒下に潜んでいた不届き者は簡単に見つかった。

　傘の妖怪、小傘である。

「それでどうして当家の蔵に？」

　詰め寄っていたのは阿求で、彼女は刺々しい視線を以って小傘を凝視している。小傘はたじたじになって状況を説明していた。おおよその経緯は星が推測した通りで、唯一、阿求を脅かそうとして侵入したという一点を除いて一致した。

　とにかく私は疑われた事に対する文句の一つも言ってから星に振り返った。星は手に入れた巻物を熱心に眺めており、思考しているようで時折、指先を噛んでいた。私は気になるので呼びかけた。

「何か分かったの？」

　星は、はい？　と振り返り、あ、と頷いた。それから詰問をしている阿求を止めて小傘へと質問した。

「空白にあった内容は覚えていますか？」

　いきなりの質問に小傘は戸惑いながらも、阿求に責め立てられたくないのだろう、素直に話してきた。

「んと、薄い地図があったけど、でも覚えてない。すぐにその子が着たから、私、隠れたの。ほら、脅かそうと思って。そしたら巻物を手に持ったまま隠れてて、脅かしたら返そうと思ったけどすぐにその子が外に出てって、盗んだとか犯人とかの単語が飛び出るから、私、慌てて蔵から出たの。それで隠れてたんだけど、中々返す機会を掴めなくて、ほら、脅かしてなかったから妖怪として出にくいし、そうしているうちに昆虫を飛ばされたから、今度は屋敷に隠れたの。隠れてから巻物の事を思い出して、もう一度見てみたけど、地図は消えていたの」

　その説明を聞いた阿求は呆れていた。だが、同じ妖怪である私にはなんだか奇妙な共感が湧いていた。確かに妖怪としておずおずと登場するのは、とても恥ずかしく、情けない。どうせなら怒鳴られてもいいから一度、慄かせてから堂々と登場したい思うものである。

　そして星の手にある巻物を見ると、やはり空白部分は空白のままである。

「ねぇ、どういうこと？」

　私は怪訝にした。星が言うには本物と贋物では得られるものが違うと言っていたが、私の見る限りでは先ほど阿求が写した物と全く変わらないのだ。唯一、紙質がざらざらとしているぐらいだろう。

「分からない。どうしても私には空白に地図があったなんて思えない、もしかして何かしらの能力が働いたの？」

　私が解答を求めると、星は私に巻物を押し付けた。

「能力といえば能力でしょうか。知りたいのなら、リグル、これで万事が滞りなく理解できます」

　星が衣服の袖から取り出したのは蔵にあったマッチ箱だ。彼女はマッチを擦った。赤い、小さな焔が燦々と燃え上がる。

「落とさないようしっかりと持っていてください」

　私は言われたとおりにした。それに満足した星が手を伸ばし、あろうことか星が空白部分にマッチの焔を近づけたのである。それは

燃え移るギリギリの所で止まった。
　しばらくの後。
「あっ！」
　空白に薄い地図が浮かび上がってきた。これは、と私が考えた時、隣から声音がする。
「あぶり出しですか」
　いつの間にかギャラリーに加わっていた阿求と小傘、その阿求が言った。
「でも何故分かったのです？」
「勘じゃないの？」
　小傘の物言いに星は苦笑を零した。確かに、と前置きして。
「勘といえば勘ですね。こんなあからさまに空白があれば誰だって疑います。でもそこそこは考えましたよ。ほら、カンムリザクラの説明です」
　カンムリザクラという存在し得ない架空の植物について思い出す。
「あれは植物の説明ではなく、この巻物の事です。四月中旬とは中間にある空白、快晴のもと温暖な気候で開花とは巻物の上から熱を加える事、時間の経過または寒波で散ってしまうとは冷えると文字が消える。という風に解釈しました。……ほんの遊び心ですね」
　星が饒舌に語る間も文字は順調に浮かび上がり、やがて隠されていた地図が全て浮かんで把握できるようになった。どうやら幻想郷の縮図らしく、神社、人里、霧の湖、魔法の森、妖怪の山、竹林などが浮かび上がっていた。その中で唯一、丸をつけている箇所がある。マヨヒガだ。またマヨヒガの下には小さな文字で桜の根元と浮かび上がっていた。
　浮かび上がったのはこれだけだ。
　私は若干の興奮を抑えながら抑揚のあるリズムで喋った。
「マヨヒガだって、ねぇ、これってお宝の地図じゃないの？」
「…………」
　だが、星は首を捻った。角度が変わったことで頭上の子鼠は落ちまいと金の髪にしがみついている。それから何かに気付いたのか、両手をポンッと叩いた。しかし、話題には出さず、彼女は阿求に向かって話し出す。視線は小傘に注がれていた。
「……とりあえず巻物は戻ったのでこれでいいでしょう。そちらの妖怪も悪気は……あったでしょうが、それは私に免じて赦してあげてください」
　私は星の表情を見て少し当惑した。もはや地図に興味が湧いているようには見えず、飽きたかのような表情をしていたからだ。
「あの、これは？」
　聞いた。
「はい？　ああ、それなら……マヨヒガにある桜の木どれか一つです。その根元を掘り起こせばたぶん出てきますよ」
　あまりに冷めた対応に今の言葉が信頼に足るか値踏みした。
「なんでしたら、この子に案内させましょうか？」
　頭上に乗っていた子鼠を手に下ろし、何かを吹き込んだ後で私に渡してきた。私は子鼠を手のひらで受け取り、どうしようか悩んでいた。そもそも巻物の持ち主は阿求で、もしここに財宝が眠っていたとして、その権利を主張できるのは彼女だけだ。
　私の感情を察したのか阿求は首を横に振った。彼女も興味が薄いらしく、はっきりと告げる。
「財宝など私は要りません。どうぞ勝手に掘り返してきてください。その巻物も差し上げます」
「よし、マヨヒガに行こう！」
　小傘だけが非常に乗り気だった。
「いいえ。貴女にはお話しがあります」
　阿求がにっこりとそれを赦さず、小傘の耳を引っ張った。
　星は微笑ましい表情でそれらの光景を見ていた。しかし、私を見る時だけ若干、ばつが悪そうな顔をした。
「では私はこれで……子鼠は後で迎えが行きますから」
　星はその場を後にした。阿求も小傘を引っ張って自室に引きこもったので、私は一人、マヨヒガに向かう事にした。
　興奮も手伝ってかマヨヒガに到着するには時間をそれほど必要としなかった。
　マヨヒガは隠れ里であり、合掌造りの屋敷がちらほらとある。そして中にはご飯を炊いている水蒸気や囲炉裏の音など、生活感で溢

れていた。しかし、人間が住んでいる気配だけがせず、無人の里である。
　私たちは先ず、言われたとおりに桜の木を探そうとした。
「これ、どれ……？」
　桜の木はマヨヒガに何本もあったのである。これは本命を見つけ出すのに苦労する。と、頭に乗っていた子鼠が活発に動き出した。それは地面に降りると鼻先で匂いを嗅いで、マヨヒガを駆け抜ける。
「………」
　マヨヒガで、何か、気配がした。それは人ではなく、素早い動物の気配である。
　刹那、屋敷から飛び出したのは猫の群れであった。危うく食べられそうになった子鼠を救出し、それから上空から探索した。猫は常に私の下で鳴き声をあげている。
　子鼠が甲高い音を出した。音の行く先は眼下、桜の木である。私は確信し、細心の注意を払って着地した。念のために子鼠をポケットにしまい、木の根元を確かめつつ、傍にある、鋤で掘り始めた。
　五分ほど土を掻き出し、しかし、傍と目を惹かれた。
「……あれ？」
　作業を中断し、私は掘り返したばかりの土を手に取った。
　赤茶けた固い土である。
　この土は間違いなく、かなり深い所の地盤である。ほんの数分で赤茶けた固い土が掘り出せたのである。
　それがどういうことか私は素早く思考した。
「誰かがすでに掘り返して埋めた後……？」
　私はまさか、と否定した。だって巻物は手にあり、それが発覚したのはついさっきだ。仮に星や阿求、小傘があの後ここに来て掘り返すにしても、こんなに早くは物理的に難しい。
「もっと前から」
　それが結論だった。では誰か、と考えて私は混乱した。と、傍にいた猫達が激しくがなりだした。
「ああ、居た」
　それは上から振ってきた声だ。私が頭上を仰ぐと灰色の少女が浮いている。その少女は首に青いひし形のペンダント、両手には曲がった鉄棒、そして尾には子鼠が入ったバスケットをかけていた。彼女は私に対し、聞き取りやすいはきはきとした口調で告げてくる。
「私はナズーリン。すまないがここまで上ってくれ。そこに降りるのは流石に気が引ける」
　私は子鼠を落とさないように一足でナズーリンの視線まで飛んだ。そこまで来ると子鼠はポケットを飛び出し、私を伝って彼女のバスケットに入っていった。
　ナズーリンは私に対して真正面から言い放つ。
「ご主人からの言伝があってね。『申し訳ない。あまりに期待していたようなので直接は言い出しにくかったのを分かってください。そのマヨヒガにある、桜の根元に埋まっていた宝とやらは前に私が見つけてしまっています。というのも私は財宝が集まる程度の能力を有しており、一時期、私が失くしてしまった、とある秘宝を見つけるために幻想郷を探し回った事があります。その際に立ち寄ったマヨヒガで発見したのがそれです。埋まっていた財宝は後日、色々な団体や活動に寄贈した為、手元にはありません。どのような財宝が埋まっていたか、気になるかもしれないので仔細を伝えておきましょう。地中五メートルから掘り起こしたのは一メートルほどの壺であり、中には欠けていない金貨が三二枚、欠けている金貨が六五枚、銀貨一〇三枚、大粒の宝石が二一個、小指の先ほどの小粒な宝石が袋詰めで五七個、大小様々な銀器が一四品、それと空いた隙間を埋めるように砂金が大量に入っていた。他質問があればこのナズーリンが受け付けます』……その様子ではなさそうだね」
　ナズーリンが言伝を言い切った時、私は肩を落とし、すっかり落胆していた。

（終）

〈作者コメント〉
　出来上がった短編がつまらなかったのでこちらを投稿した次第です。書けば書くほど恋愛事情から離れていく気がします。

# 眠る桜

著者：悠奈

春の暖かい日差しでついうとうとしてしまう一人の少女。縁側に座っている少女の眼はこっくりこっくりと舟をこいでいる。
「おーい、幽々ー？」
　自分の名前を呼ばれてはっと眼を覚ます少女。その目線の先には日本では珍しい金色の髪をした女性が日傘をして立っていた。
「あ、ふぁ・・・起きましたよ。八雲さん」
　八雲と呼ばれた女性はにっこりと微笑み幽々の横に座る。
「何もせず家でお昼寝とは、ずんぶんのんびりしているのね」
　八雲は日傘をたたみながら言う。
「あまりに心地の良い天気でしたので・・・ところで本日は何用で？魂魄なら今はおられませんよ」
　幽々はのんびりとした口調で話しかける。
「いいえ、今日は魂魄に用事はないのよ。貴女が何をしているのか気になって様子を見に来たのですわ。」
「あらあら、ごめんなさいね寝ていて。そういえばお茶も出してなかったわね。」
　いそいそとお茶を取りに行こうとする幽々
「ああ、様子を見ただけだからそんな気を使わせたくありませんわ。」
「そういわないで下さい。折角のお客様ですから・・・」
　そう言って幽々は家の奥へと消えた。
「いいって言ってるのに・・・寝ている処を起こしてごめんなさいね、幽々。お茶貫いたかったけれど私行かないとね。」
　八雲は幽々が消えた方向にそう呟くと一瞬で姿を消してしまった。
　それから暫くしてお盆にお茶とお茶菓子を乗せて縁側に戻ってきたが、八雲の姿が無いことに気付いた幽々はまたか、と呟いた。
「いっつもいきなり来ては直ぐ居なくなるんですから。もう、本当に神出鬼没だわ」
　愚痴を言いながら幽々はさっきまで八雲が居た所にお盆を置き、その横に座ってお茶を啜る。
「折角美味しいお茶いれたのに・・・」
　ふぅとため息をついて庭先にある桜を眺める。この桜は西行家が誇る大きな桜。西行家代々大切にしている。周りの人からはそのあまりに立派である風貌から不思議な力が宿っていると噂され、西行妖と呼ばれている。
「毎年綺麗に花を咲かすわよねぇ・・・」
　そう思いながら桜を眺めていると突然その桜の幹に大きな穴が開き、そこから一人の女性が現れた。
「あら？あらあら」
　幽々は少し驚きながらもその女性を見る。綺麗な緑色の髪。異国の物と思われる服、そして頭から伸びる虫の触覚のようなモノ。その女性はきょろきょろと周りを見渡し、幽々を見つける。そして幽々の前まで歩き
「こんにちは」
　微笑ながらそう言った。
「ええ、こんにちは」

幽々は何の警戒もせず、微笑みながら返す。
「隣、いいかしら？」
「ええ、構いませんよ。あ、お茶でもどうです？先程来ていた客の残した物ですが。」
「いただくわ。ありがとう」
女性は横に座り、お茶を一口飲む。
「美味しいわ。ありがとう」
「いえいえ。ところで貴女はどなたかしら？見たところ異国の方のようですが」
幽々は女性を眺めながら言う。
「私はリグル。リグル・ナイトバグ。貴女面白いわね。いきなり木から出てきたのに警戒もせずにお茶を差し出すなんて」
女性、リグルはそう言って笑う。
「あの桜は何年も生きていて、不思議な力を宿しているって魂魄が言っていましたし、何より貴女は悪そうな人に見えませんから。」
幽々は相変わらずのんびりとした口調で言う。
「私幽々と言います。西行幽々。この家の一人娘です。あ、お茶菓子もどうぞ」
にっこり笑いながら頭を下げる幽々。それにつられてリグルも微笑む。
「これはご丁寧に・・・では頂きます。」
リグルはお盆の上に乗せてある団子を手に取り食べる。
「美味しいわね。」
「美味しいでしょ～。私の大好物なんですよ～。ところで、どうしてあのような場所から出てきたんですか？」
幽々が視線を西行妖へと向ける。幹に空いた穴はもう無くなっていた。
「私は妖怪なの」
「妖怪？」
幽々はリグルの顔を見る。リグルは相変わらず微笑んでいる。
「私は蟲達を統べる妖怪なの。それで昔ちょっと力が強くて丁度いいからってことで、どこぞの妖怪に封印されちゃってたのよ。」
幽々は黙ってリグルの顔を見て話を聞いている。
「どうかしら？妖怪と聞いて私が怖くなった？」
それを聞いて幽々は笑いながら答える。
「別にそんなことないわ。むしろ妖怪に対する考えが変わったかも」
「妖怪に対する考え？」
リグルはきょとんとした顔で幽々に問う。
「ええ、妖怪って皆が言うように気持ち悪くて怖い物だと思っていましたが、こんなに綺麗で面白い方だって思いました。」
リグルは一瞬呆気に取られるが、すぐ破顔して笑う。
「あはは、貴女面白いね。私を見て怯えずにそんなこと言ったヒトは始めてだよ。」
二人で笑っていた時、玄関の方から物音がした。
「おっと、誰か帰ってきたみたいだね。私はそろそろお暇するとしようか。」
リグルは湯呑みをお盆の上に置き、立ち上がる。
「まだゆっくりしていけばいいのに。皆に貴女の事紹介しますよ。」
幽々は相変わらずのんびりとした口調でリグルを呼び止める。
「ふふ、そういう訳にはいかなくて、ね。また会いましょう。お嬢様」
そう言ってリグルが宙に浮いたかと思うとそのまま何処かへ飛んでいってしまった。
「飛んだ・・・本当に妖怪なのね。」
幽々がお茶を飲みながらそう呟く。
「幽々、誰か来ていたのか？」
「魂魄ですか。ええ、八雲さまがいらっしゃってましたわ」
幽々は頬を膨らませながら言う。魂魄と呼ばれた初老の男は幽々のその態度に疑問を感じた。
「む・・？何かあったのか？」
「別にありません。」
「むぅ・・」
相変わらず機嫌を悪そうにしている幽々の態度に悩む魂魄。
「八雲が来ていた、という事は何か言付けとかはなかったのか？」
「特に何も言ってません。言わずにさっさと帰りました。」
（やれやれ、幽々の相手もせず帰ったから機嫌が悪いのだな）

魂魄は頭を掻きながら考える。
（幽々の様子を見に来たというわけでは無さそうだ。ということは、あの桜か）
　魂魄は西行妖を見る。一見何の変化も無い。桜の幹に穴が開いた形跡は全く残っていない。
（今年も何の変化も見当たらない。この調子なら何も問題は無いはずだが・・）
　魂魄は視線を桜から幽々に移す。相変わらず不機嫌そうである。
「幽々よ」
　魂魄は腰に差していた刀を床に置きながら幽々の隣に座る。
「町でお前の好きな団子を買ってきたのだが・・」
　そう言って紙に包まれた団子の山を幽々に見せ付ける。
「いただきます！」
　幽々の興味は直ぐに団子へと移った。すぐにそれにかぶりつく幽々。
（ふ、相変わらず団子に対しては底なしの腹だな。）
　魂魄は呆れながらも幽々と共に日向ぼっこを楽しんだ。

◇

　後日、幽々がまた一人で縁側で座っている時
「お久しぶりね。」
　凛とした声が上から響く。幽々が声のする方を見るとその方向から空をふよふよと飛びながらリグルが現れた。
「お久しぶりです。リグルさん」
「お、私の名前覚えててくれたんだ。」
　リグルは嬉しそうな顔をして着地し、幽々の隣に座った。
「あ、前に出した団子がまた入ったので持って来ますね。」
「あ、悪いね～」
　幽々は立ち上がり屋敷の奥へ行く。リグルは幽々に軽く手を振る。
「・・八雲の気がある。私の事にももう気付いているかしら」
　幽々が居なくなった時、リグルは険しい表情をしてそう呟いた。
「おまたせしました～。」
　幽々がお盆にお茶と団子を乗せて持ってきた時にリグルは元の笑顔に戻っていた。
「おお、ありがとう。ん～、美味しいねぇ」
　幽々がお盆を床に置くとすぐに団子に手を出し口へと運ぶ。
「リグルさんは確かあの桜に封印されていた。と言っていましたよね？」
　幽々がお茶を啜りながらリグルに聞く。
「ん？そうだよ。かなり前の話だけどね。」
　リグルは食べ終わった団子の串を置き、お茶を飲みがら返す。
「力が強いってだけで封印されたんですか？そんな理不尽な・・・」
「んー・・・色々あったんだけどねぇ。そうだねぇ。八雲ってヤツのせいで封印されたんだよね」
「え・・・？」
　幽々が口ごもる。
「どうかした？幽々？」
「いえ、八雲というお方が私の親戚に居るもので、ちょっと気になりまして・・」
「へぇ。まぁ、八雲なんて苗字も珍しくは無いだろうしね」
　リグルは笑いながら幽々に言う。
（やはり八雲が近くに居たか・・・感づかれているだろうか）
「あの、どうかしましたか？」
　難しそうな顔をするリグルに幽々が問う。
「あ、いやいや、なんでも無いわよ。」
「？」
「あ、また誰か来たみたいだから私帰るわね。お茶ありがとう」
　リグルはそそくさと立ち上がると笑顔で手を振りながら飛び立っていった。
「幽々、八雲でも来ていたのか？」
　リグルが見えなくなった時に魂魄が入ってきた。
「いいえ、八雲さまは今日はお見えになりませんでしたわ。」
　幽々はお茶を飲みながら答える。
「む？では何故湯呑みが二つもあるのだ？」
「私の友人のお客様がいらしてました。」
「友人？どなたかな？」
「リグルさんという不思議な方です。」

「リグル・・・」
　魂魄が険しい顔をする。
（リグル・・・まさか、もう封印が）
「魂魄、どうかしましたか？」
「いや、何でもない。それより急用が出来た、八雲の所へと行ってくる。」
　魂魄は直ぐに出て行った。
「魂魄？・・どうしたのかしら」
　幽々は疑問に思ったが、すぐに忘れて暖かい日差しの中眠りについた。
「魂魄、気付いたか。私もそう長くはこの生活を満喫出来ないな」
　屋根の上に居たリグルがそう呟く。
「いつものようになるか・・・でも今回は・・・」
　リグルはそう呟いて何処かへ飛んでいってしまった。

　その日の夜、草木が寝静まる頃に八雲が西行妖の前に現れた。
「リグル・・出てきていたなんて」
　八雲は木の幹に穴を開けて中を覗いていた。
「この様子だと、一週間程前か、どうして気付けなかったのかしら・・」
　八雲はそう呟くと一瞬で消えてしまった。

◇

　それから数日経った。その間リグルは西行家に幽々以外誰も居ない時にはほぼ必ず現われ幽々とお茶を楽しんだ。
　そんなある日、幽々を除く西行家の住民が用事で夜中留守にしていた時、リグルが現われた。
「幽々、こんばんわ。」
「あ、リグルさん。夜中に来るのは珍しいですね。今お茶淹れますよ」
　幽々がそう言って立とうとするのを手で制するリグル。
「リグルさん？」
「幽々、今日はお茶はいいよ。だから座ってて。」
　リグルの言う通りに縁側に座る幽々。その横にリグルは座る。
「どうしましたリグルさん？」
　何時もと少し様子の違うリグルに心配する幽々。リグルは何も答えずに幽々の頭の後ろに手を回し、幽々の唇に自分の唇を重ねた。
「っ！？」
　いきなりの出来事にリグルを突き帰す幽々。リグルは悲しげな表情をしていた。
「い、いきなり何をするんですか！？」
「幽々、お別れだ」
「・・・え？」
　リグルの突然の行動と言葉に幽々は混乱する。そんな幽々に構わず話すリグル。
「西行妖が何時まで経っても散らない。力が溢れている。それは力を抑える媒体が無くなったから。」
「媒体・・」
「そう、つまり私よ。西行妖は力が強すぎる。だから私の体を媒体として封印されていたの。」
　リグルは続ける。
「力が解放された西行妖は危険なの。災いを招くわ。だから封印していた。だけど封印は何年かに一度解けてしまうの、だから私は出てきた。この世にね。私が出てきても数日は平気。西行妖の行動は活発にならないわ。その間私は八雲にさえ見つからなければ自由の身よ。だけど、もうダメみたいね、八雲云々の前に力が漏れているのがわかるわ。このままでは大変なことになってしまう。」
　リグルは一息ついてから続ける。
「私は人間が好きよ。そして何より私を慕ってくれる蟲達が好きなの。だから私は封印されてきた。嫌でも受け入れてね。」
　そう言った瞬間庭が無数の蟲達で埋め尽くされた。
「私はこの子達の事を考えると嫌でも封印されないといけないの・・・でも」
　リグルは幽々を抱きしめる。
「今回は違う。私は蟲達を守りたい、人を、幽々達を守りたい。でも、幽々と一緒に居たい」
　リグルの声がだんだんと涙混じりの声になってきた。
「今まで外に出たときは皆私を気味悪がった。緑色の髪とこの触覚のせいでね。でも貴女は違った。私を受け入れてくれた。私は人のぬくもりを知った。幸せを知った。何よ

り貴女が好きになった。だから、離したくない・・・」
　リグルが泣き崩れる。幽々は優しくリグルを抱きしめた。
「泣かせる話ね、まるで私が悪者じゃない」
　リグルの泣き声だけが響いていた西行家の庭に、冷めた声が響く。それを聞いてリグルは泣き止みハッっとする。
「八雲・・・!」
　リグルが呟いた瞬間庭先に八雲が現われる。
「ご機嫌麗しゅう、大妖怪リグル。いい夢は見られたかしら?」
　いきなり現われた八雲に幽々は戸惑う。何時も見る八雲とは雰囲気が全然違うからだ。
「八雲、さま・・」
「幽々、わかって。リグルと西行妖をこのままにしていたら危険なの。リグルが生きていれば蟲達も勢力を増す。それによって自然における生態系が大いに狂ってしまうわ。そうなると飢饉なんて騒ぎじゃない。生物が全滅してしまう恐れもあるの。だから、リグルは西行妖の封印媒体に適任なのですわ」
　八雲が無表情に言う。幽々は黙って聞いている。
「私もそれは重々理解している、が。今回だけはその話には乗れない。」
　リグルが怒気を込めた声で返す。
「さながら、恋する乙女、かしら?貴女の我侭で世界が滅びてもいいと言うのかしら?」
　八雲も声に力を込めて返す。
「私だって一妖怪よ、世界云々の前に私の意見を尊重してほしいわね」
「そう、なら・・・強行手段と行くわ」
　そう言うと手にもっていた日傘を開く。その先端からリグルに向かって閃光が飛ぶ。
「ふん!」
　リグルが手を振るとその合図に従って虫達が動き、壁となり光を防ぐ、虫達にぶつかると光は霧消した。
「やぁっ!」
　その瞬間にリグルが指示を出すと、虫達はその支持にしたがって動きだす。それと同時にリグルは手の先から蝶に似た光の弾を何個も八雲に向かって飛ばす。
「くっ」
　紫は懐から扇を取り出し一振りする。すると突風が起き虫達を跳ね返す。その後すぐに術式を組み、正面に結界を作りだして光の弾を防ぐ。
「喰らいなさいっ!」
　リグルは虫が吹き飛ばされている時も立て続けに光の弾を放ちながら虫に指示を出す。相手に隙を与えないように立て続けに攻撃をする。
「くぅ・・!」
　八雲は光の弾を防ぐのに手一杯だった。そしてついに結界が光の弾に耐え切れず破られてしまう。
「!?」
　その瞬間八雲は一歩下がり扇を一振りする。すると宙に亀裂が走ったかと思うと、黒い穴が空いた。光の弾はそこに吸い込まれて消えてしまった。
「スキマ・・・何時の間にそんなに自在に操れるように!?」
「貴女が封印されている間私だってただ過ごしていたわけじゃないのよ!」
(とはいってもまだ慣れないわね・・・かなりの体力を消耗する・・連続の使用は無理ね)
　八雲がそう考えていると、前後左右から虫の大群が押し寄せてきた。
「なっ!」
「油断したわね・・・八雲紫!」
　リグルは八雲が虫に気を取られている隙に光弾を放つ。先程よりも遥かに多い量を
「ぐぅ!」
　八雲は素早く術式を組むと四方向に結界をはる。
「四重結界!八雲、どれだけ力をつけたんだ・・・!」
　リグルは立て続けに攻撃を加える。その時八雲がリグルの後方に向けて指を立て、切るように動かした。その瞬間、リグルの後方に先程のような黒い穴が開き、そこから九尾の狐が姿を現し、リグルに一撃を与えた。
「だっ!な、何!?」
　狐は立て続けにリグルに攻撃を与える。リグルは突然の出来事に混乱してしまい、虫に指示を遅れなくなってしまった。指示が無く

なった虫達もどうすればよいのかわからず混乱。八雲への攻撃の手が止まってしまった。
「や、八雲！貴様何時の間に式神を！」
　リグルが状況を掴んだ時にはすでに満身創痍となっていた。
「正攻法で貴女に戦っても勝てないなら、奇襲ですわ」
　八雲はリグルに対して結界をはる。リグルは身動きが出来なくなる。
「ぐ、うう」
「大人しく封印されなさい。それが、この世界の為なのよ・・・」
　狐と八雲がリグルを西行妖の根元まで運ぶ。戦闘中隠れていた幽々がそれを見て立ち尽くす。
「幽々、これも運命なのよ。この子にとって貴女と出会える夢が見れたのよ。そう、これは夢よ。ゆゆ、貴女は西行家として桜を大事に管理すればいいわ。今までどおりね。魂魄が手入れをしながらちゃんと結界を見張っててくれるから。」
　そう言って八雲は封印の為の術式を作りはじめる。その時リグルの口が微かに動く
「ありがとう」
　声には出ないが幽々には確かにそう聞こえた。その瞬間幽々は走っていた。リグルに向かって。
「出来たわ、お休み、リグル・・・」
　八雲がそう呟いて、リグルと桜に結界をかけようとした時、リグルと結界の間に幽々が入り込んだ。
「なっ！幽々！？」
　八雲が急いで止めようとしたが間に合わない。
「リグル、貴女は独りじゃ、無いよ・・・」
　幽々がそう呟いた瞬間、結界はリグルと幽々、桜を包み込んでしまった。その瞬間桜の花は全て散り、辺りは静寂に包まれた。

「・・・藍」
「はい」
　藍と呼ばれた狐が答える。
「私は間違っていたのかしら・・・」
　八雲はうつむいて藍に聞く
「紫様、リグルは封印せねばならいのです。他に方法はありません。それが世界の為なのです。」
「・・・居るんでしょう魂魄」
　紫はうつむいたまま言う。
「・・・」
　西行家の屋敷の奥から魂魄が現われた。
「幽々も封印したことを怨むのであれば私を怨みなさい。」
　紫は顔をあげて魂魄を見る。
「幽々は素直で良い子だった。アノ子が選んだ道なら、黙って受け入れるさ。」
　魂魄は悲しい表情でそう返す。
「紫様、これは・・」
　紫は藍が指差す方向を見る。そこからは桜から二つの小さな光が出てきていた。
「これは・・・？」
　紫がそれを見る。
「・・・アノ子達だわ。」
「え？それはどういう・・・」
　紫が呟き、藍が問う。
「桜の封印には力ある媒体が必要だったのよ。今回は二つの媒体が入っているわ。だから魂は桜に納まらず漏れてしまったのね。」
　紫は木を撫でながら言う。
「そしてどうやら、二つの媒体のお陰で強力な結界が出来たみたいよ。これで二度と桜は満開にならない。誰かが意図的に花を咲かさない限りね。」
　紫は二つの魂を手に取り語る。
「今まではただリグルを封印していたけれど、それじゃダメね。この西行妖・・・この現世には重たすぎる物なのよ。私が・・・責任を持ってこの桜を異動させます。」
「しかし、何処に・・・」
　魂魄が紫に歩み寄りながら問う。
「幻想郷・・・忘れられた世界。あそこなら問題無いでしょう。あそこには色々な力を持った者もすんでいる。あそこに連れて行くわ。桜も、この魂も。」
　紫は二つの魂を結界に包む。
「魂も体を失ってリグルも幻想郷では一般の妖怪レベルまで力が落ちているわ。解放しても大丈夫でしょう。」
「我が家系は先祖代々西行家に仕えて来た。その役目は果たさないといけない。どうか、

この魂魄妖忌もその幻想郷へと連れて行ってはもらえないか」
　魂魄は紫に懇願する。
「・・・好きになさい」

翌日、西行家は屋敷ごと神隠しにあった。

◇

　暖かい日が差す森の中、少女は目を覚ました。
「うー・・・あー？」
　頭がはっきりしない。私は・・？
「私は・・リグル、だっけ？で、ここは・・？」
　見覚えの無い場所。わかるのは森の中だということ
「えーと・・・あれ？」
　何も思い出せない。何か大事なことを忘れている気がするのに何も思い出せない。
「んー・・・まぁいっか。なんとかなる！」

冥界
「あら・・・えーっとここは？」
「気がつきましたか」
　女性が眼を覚ますとそこには年老いた男が居た
「私は・・？貴方は・・・？」
「魂魄妖忌です。貴女は西行寺幽々子様、この冥界の白玉楼の主でございます。」
「冥界の・・・主？」
「はい、八雲紫様の計らいで死して魂になった貴女を幻想の世界での冥界の主になされました。」
「八雲・・・紫」
　何処かひっかかる、が思い出せない。それと同時に一人の女性が出てくるのだが思い出せない。
「まぁ、いいわ。で、妖忌、私は何をすればいいの？」

　二人の少女の眠る桜。二人の想いが今年も綺麗な花を咲かせている。

（終）

〈作者コメント〉
　大人なリグルとリグゆゆのイメージで製作。西行妖と関係させると幽々子様主体な話になってしまった・・リグル分が少ない気がする、色々とごめんなさい。後悔はしてるかも

# 東方郵便娘　～今宵、桜の樹の下で～

著者：Salka

—宵の月に酔いの酒、喰らいて眺むは花盃。

「なんて言うにはちょっと早いわね」

洒落た言葉遊びにひとり興じながら、女性はそんな自分の状況にふっと笑った。春も近く、吹く風の当たりは強い。ごう、と音が耳を鳴らし、逆らって歩く彼女の長い緑の髪を撫でて駆け足で通り過ぎていく。

彼女の視線の先では、月の灯りに照らされて、まだ花のない桜の木の姿がぼんやりとその姿を映していた。

今は宵も更ける子の刻。人と妖が入り混じって生きる幻想郷では、一部の例外を除いて昼は主に人、夜は主に妖の時間である。つまりは、この女性も人ならざる何かであることには間違いない。

しかしながら片手に酒瓶、もう片方の手には杖と、いまいち決まらないものだ。

里からも森からも離れた、高台にぽつりと植わった桜の樹。この場所は彼女が最近見つけたお気に入りの場所である。

その見慣れた樹に、彼女はふと、違う何かがあることに気付く。

「あら、先客がいたのかしらね？」

僅かに首を傾げてそう呟いた、彼女が見たものは—

＊

「まいどーっ、蟲の郵便サービスでございまーす！」

温かな春の陽気差す幻想郷の人里の一件の家に、威勢のいい声でノックをかます妖怪がひとり。

名はリグル・ナイトバグ。蛍の妖怪で蟲を操る、さながら蟲の女王といったところか。

それが何故に、というのは色々と事情があるのだが、とにかく今は『蟲の郵便サービス』なる事業を展開し、幻想郷のあちこちに手紙を運んで回っている。

といっても、幻想郷での移動手段は飛ぶか歩くが主流で、前者を使う者は自分で飛んで用件を済ますし、後者を使うのは殆ど人間で、人間は多くが人里に集まって暮らしているため利用者はさほどおらず、配達人が一人であるにも関わらず多忙に追い込まれることもなく仕事をこなしている。

「はい？」

扉を開けて中から中年の女性が出てくる。女性は一旦リグルの触角を見て驚いたが、その根元、頭に被っている赤い帽子を見て納得した。帽子には「〒」のマークが白糸で刺繍

されている。これが郵便サービスの目印であることは、幻想郷各地にばら撒かれた「文々。新聞」のサービス告知によって伝えられている事だ。
「この宛先のお名前は奥さんで良かったですか?」
手紙の宛先を見せて、リグルは女性に確認を取った。一応、その手前で表札の苗字と宛先の苗字が同じであることは確認済みだ。
「ええ、間違いないわ。……あら、十和子さんからね、懐かしい」
封書の裏の名前を見た女性は慈しむような優しい眼差しを手紙と、配達人に向けた。その視線がくすぐったく、リグルは照れ笑いを浮かべ、
「えっと、じゃあここにサインをお願いします」
と、サインペンを差し出しつつ、やや上ずった声で言うのだった。

＊

予定より配達がスムーズに終わったリグルは、暇を持て余して人里の近くをふらふらと飛んで徘徊していた。春風が楽しげに吹きつけ、何度も帽子を飛ばされそうになってはその度に頭の上に手を置く。今度は無防備な顔に桜の花びらが飛び込んだ。甘い香りが鼻をくすぐり、思わずくしゃみを一発。
「うう……」
ほんのり赤く染まった鼻の頭をさする、情けない顔のリグル。周囲に友人が居たら確実に笑われていたに違いない。
ちなみにその友人——チルノとルーミア、ミスティア、大妖精とはこの後集まって花見をする予定だが、集合時間までまだ時間がある。
「うーん、絶景花見スポットでも探しちゃおうかな?」
眼下に広がる桜風景を眺め、そんな名案が浮かぶ。いつもチルノの計画性のない突発的な行動に振り回されっぱなしだから、今回も花見スポットを当てもなく探し回り、ヘトヘトになってお祭り騒ぎどころじゃなくなるに決まっている。だったら今のうちに探してしまえばいいのだ。
目的が見つかるとそれなりに時が過ぎるのも楽しい。リグルは快活な気分で、鼻歌交じりに辺りを散策し始めた。
桜の樹があるのは人里近くが多い。昼間に妖怪が集まって花見などしていたら人里の守護者である慧音あたりが飛んできて追い出されそうだが、花見の決行はミスティアが焼き鰻を仕上げて持ってくる夜になる。
夜に花見をするなら、月が見える所がいいわよ、とは竹林の自警団（自称）の妹紅から以前教えてもらったことだ。つまり、なるべく家屋や木が混んでない所がベストだとも。
暫く辺りの桜の木々を見回していたリグルは、遂にその場所を発見した。辺りに家屋も何もなければ、少し小高いところに大きな桜の樹が一本だけ植わっているという、まさに妹紅から聞いた条件にぴったりとマッチしている。
「やった!今日は運がいい!」
完全に上機嫌なリグルは逸る気分を抑えられず、急ぎ足で桜の樹へと舞い降りた。
「こんにちは」
瞬間、声を掛けられる。ぎょっとして声の主をうかがった。人間の少女が一人、年のころは十六、七辺りか。
「こ、こんにちは……?」
普通、この時間だろうが妖怪と出くわせば驚くものだが、目の前の少女は全く物怖じする様子もなく、ニコニコと微笑みを浮かべてリグルを見ている。
「……私が怖くないの?妖怪だよ?」
何だか威厳を軽くスルーされた気がして、リグルは一応問い掛けてみる。少女はふっと笑い、
「郵便屋さんでしょう?見たことがあるわ」
と答えた。
そこで、リグルはようやく自分が仕事着——といっても帽子と腕章だけなのだが—のまま

であることを思い出す。人間も含めて幻想郷の皆様のためにお仕事をする格好で妖怪らしく威圧的に振舞おうというのも無理なわけで（そもそもリグルのような見た目が子供の妖怪はよほどでない限り凄んでもあまり威圧が無い）、リグルは「あう」と声をこぼすしかなかった。
「お花見かしら？」
「うん、そんなところね……本番は夜だから、今はその下見ってところ」
「ふふ、いい所を見つけたわね。本当は私と友達の、二人だけの秘密の場所だったけれど……」
ふいに、少女の表情が曇る。リグルはその顔を訝しげにうかがった。「だったけれど」と、過去形なのも引っ掛かる。
「あ、あの、別に言いたくないんだったら言わなくていいんだけど！私今日出会ったばかりだし！」
慌ててリグルは両手を前に突き出して手のひらを振った。対して少女は何故か、ひらめいた、という顔をする。
「そうだわ、ここで郵便屋さんに出会えたのもきっと何かの縁……お願いがあるの、聞いてもらえるかしら？」
急に話を持ち出す少女。リグルは尚も不思議がりつつ、少女の話に耳を傾ける。
「私の友達を探して、手紙を渡して欲しいの。もう数ヶ月姿を見せないし、親が居なくて奉公に出ているのだけれど、奉公先にもひと月ほど前から来なくなったみたい。私は身体が丈夫じゃなくてあまり探しに歩けなくて、ここに来るのが限界だから……私の代わりに探して。私ずっと心配で……手紙を書いたけれど、誰も届けてくれなかったわ。両親も奉公先の方も、行方の分からなくなった娘の面倒なんて知らないって。ねぇ、お願い」
一気にべらべらと用件を告げ、少女はリグルの返事を待つ。宛先の人物が分からない手紙を渡すとなると、かなり骨が折れる仕事になる。断ろうと思えば簡単だ。
「勿論お礼はするわ。お仕事を頼むんだもの。お願い、遠くへ行けない私の代わりに、伝えて。何があっても私はあなたの味方だって」
芯の通った、はっきりとした声で少女は言った。本人も言うように見た目も丈夫とは言えなさそうな白い肌と細い手足。しかし体が弱くても意志をしっかりと持っている。心の強弱は関係ないものだ。
少女のその意志の強さに圧され、リグルは承諾の意志を頷いて伝えた。もっとも、人の頼みを、ましてや独り身の親友を案じる優しい頼みである、それを無下に断るほどリグルも冷たい妖怪ではない。
「いいよ、私がその手紙、届けてあげる」
「有難う……！では明日のお昼、またここに来るわ。その時手紙をあなたに預けるから」
少女は先ほどの寂しそうな、不安げな表情から一転、安心した和らげなものにそれを変えた。
「本当に有難う……私は葉月というの。私の名前を出せばきっと彼女も分かってくれるわ」
「うん、でも……」
リグルの言葉が濁る。話を聞いた時からずっと、ある最悪な事態が想定されて離れないのだ。そしてそれは、少女にも分かっているようだった。
「もちろん、渡せないかも知れない。それは分かっているわ。だから……一ヶ月、私は毎日ここに来るから。返事でも報告でもいい、何か分かったらここに来て。一ヶ月で見つからなかったら、私も諦めるから」
最後の言葉はあまりにも残酷だった。少女の声が、唇が、震えている。「見つからなかったら」、その言葉を胸の中で噛み締め、リグルはどうか宛先となる少女―葉月の親友が無事であって欲しいと祈るばかりであった。

＊

「花見よ！」
日はとうに暮れ、妖怪が蔓延る夜が降りてくる。妖怪の中でも夜のほうが活発なリグル

達は、竹の葉包みやら重箱（博霊神社の宴会に鰻を持参するのにと、慧音がミスティアにあげたもの）を担いで夜の幻想郷を堂々と闊歩していた。元気いっぱいのチルノに、リグルとミスティアが呆れ、ルーミアが同調し、大妖精が苦笑いを浮かべる。
「あ、私いいお花見場所を見つけたの。良かったら案内させてよ」
「へぇ、リグルったら今回は張り切るわね。どうしたの？」
　自信ありげなリグルを気にし、ミスティアがそのニヤニヤ顔を覗きながら問い掛ける。
「偶然よ、偶然。お仕事の帰りに見つけちゃった」
「えー！せっかくあたいが探そうと思ったのに！」
　それに対して、大冒険する気満々だったチルノはブーイング。隣を歩いていた大妖精がじたばたさせるチルノの腕をおさえ、
「まぁまぁチルノちゃん、行ってみましょうよ。折角リグルちゃんが見つけてくれたんだから」
　と、なだめすかすのであった。
「つまらなかったら絶対許さないんだからね！」
「う、変なプレッシャーかけないで……」

*

—到着。
　そして先客。女性が一人。
「ちょっとリグル！人がいるじゃない！」
　もちろん、この怒り声はチルノだ。掴みかからん勢いでリグルに迫る。またもや大妖精が止めに入るが、今度はミスティアも一緒だった。
「人がいるかいないかなんてその時にならないと分からないじゃない……」
　リグルは気圧されつつもなんとかチルノを納得させようと必死だ。リグルや大妖精、ミスティアが全力で止めるのも、この場所に決まらなければ冒険が始まってしまうからというのがあるわけだが。
「相手は一人だし、頼んだら場所を譲ってくれるかも知れないでしょう？」
「そうよ！もし相手が頑固ならコレ、やっちゃえばいいんだから！」
　ミスティアが自信満々にスペルカードをちらつかせる。いや、花見くらい平和にやれよと思いたいが、博霊神社の宴会でも酔った勢いで弾幕ごっこなんて茶飯事である。花見の余興にひと暴れなど、幼い彼女たちなら考えそうなところだ。
「とりあえず、行ってみよ？」
　ルーミアに背中を後押しされ、他の四人も一本だけ立っている桜の樹の下まで歩いて行った。
　座っていた女性がこちらを向く。
「賑やかしいと思ったら、あんたたち。花見にでも来たのかしらね」
　得意げにそこに居座る女性。月明かりに照らされたその姿は、息をのむほどの美人だった。青い衣服に身を包み、落ち着いた緑のロングストレートヘアがさらりと背中まで流れている。三角帽子から察するに、魔法使いだろうか。この夜に堂々と花見を決め込んでいるということは人ではないのだろう。
「そうよ、悪いけどそこをどいてよね。ここはあたいたちの花見の場所なんだから」
　威風堂々と（したつもりで）腰に両手をあててチルノが言う。しかし相手はその座り姿からすでにカリスマを醸し出している女性。チルノの顔を見、ふっと笑い、
「威勢がいいわね。どっかの魔法使いの昔を思い出すわ」
　案の定意にも介さない。
「だからどけって言ってるの！」
「ふぅん？あんたの場所だかなんだか知らないけど、証拠はあるのかしら？名前でも書いてた？」
「ショーコなんてどうでもいいわよ！」
「だったら別に私がどく必要はないわね。私が先に座ってたんだから」
「きぃー！もうあたい怒った！やるわよ、リ

グル！」
　言うなりチルノは後方でハラハラしながら様子を見守っていたリグルを名指しした。突然呼ばれてリグルはたじろぐ。
「へっ……ちょっと待ってよチルノ……」
　まさか本当にバトルモードに突入するとは思っていなかったリグルは慌てふためいてポケットを漁り始めた。気が動転していてうまく取り出せず、ポケットの中でカードを引っかけたり、落っことしたりと滑稽な姿をさらしている。
　と、その時。
「待ったぁ！」
　いきなり、本当にいきなり、ミスティアの声が乱入した。しかもかなり興奮しているらしく声が百八十度くらいひっくり返っている。
「ちょ、どうしたのよミスティア？」
「それよ！」
　ミスティアが指さしたのは、女性の、腕。その手に握られている――酒瓶。
「ん？これがどうかしたの？」
「間違いないわ、この私が知らない銘柄……レアモノに違いない！」
　ミスティアは屋台を経営しているが、客からの要望で酒も仕入れるようになった。おかげで酒には詳しいが、ここで注釈しておくと銘柄は読めるわけではない。文字を形として識別しているだけなのでそこは予めご理解いただきたい。
　待ったをかけたミスティアは、戦闘態勢のチルノとリグルを無視してずかずかと歩み寄る。
「これ、どこで手に入れたのよ」
「ああ、これ？知り合いの神社の蔵からかっぱらったのよ。せっかくの銘酒なのに、巫女が勿体つけて呑まないからね、かわいそうな銘酒のために私が飲んであげてるのよ」
　神社、と聞いて一同は首をかしげる。この幻想郷において神社というものは二つしか存在せず、うち巫女と酒が直接つながるのは博霊神社のみである。博霊神社の巫女は、勧で異変をかぎつけ、その天賦の才で妖怪だろうと何だろうとばっさりと成敗することで有名な博霊霊夢。昨日の敵は今日の友とばかりに異変で世話になった者も宴会で一緒に騒いだりするので交友範囲は広いが、まさかこんな女性とも知り合いだったとは。しかも、
「お酒、勝手に持ってきてもいいの？」
　ごく当たり前の疑問をルーミアが口にする。銘酒と言うのだから、勝手に持ち出したらあの巫女が怒らないわけがないだろう。
「別に？私は蔵から出してもらえない可哀そうな銘酒を助けてあげただけよ。酒ってのは呑まれるのが役目でしょ。それにあの神社なら平気よ、ちょっとした馴染みの所だし」
　女性の話を聞きながら、大妖精がこっそりリグルのブラウスをちょいとつまみ、引っ張った。
『ねぇリグルちゃん、戦うのはやっぱりやめたほうがいいと思うわ……霊夢さんの所からお酒を持ち出せるくらいだから、きっとこの人……人？とにかく、只者じゃないと思うの。厄介事になっちゃうかもだし……』
『それは、まぁうん……嫌な予感がするけど。どうにかしてチルノを納得させられないかなぁ』
　ぼしょぼしょと小声で相談する二人の視線の向こうでは、未だに不機嫌極まりないチルノが仁王立ちしている。といっても女性は全くチルノを相手していないのだが。
　だが、そんな二人の心配はまさかのミスティアの提案であっさりと押し流された。
「そのお酒飲ませて！ね、チルノも、リグルも、おすそ分けしてもらいましょーよ！」
「いいけど、飲めるの？」
　見た目幼いミスティア達に懐疑の目が向く。ミスティアは鼻をふふんと鳴らし、
「酒が飲めなくて屋台の女将なんてやってられないわよ」
　とそれはまぁ自慢げに言うのであった。
「霊夢の秘蔵のお酒を勝手に飲めるの？」
「ははん、それは名案ねみすちー、ルーミア！普段の仕返しに勝手に瓶を空っぽにして賽銭箱に入れてやるんだから！」
　ルーミアの助太刀もあって、チルノはまんまと乗せられる。瓶空けるほどの酒豪でもないくせに、という言葉はリグルの喉元で何とか引き返した。
　こうして、何とか平和的に、女性を交えて

六人での花見に持ち込むことができたのであった。リグルと大妖精がこっそりと胸を撫で下ろしたのは言うまでも無い。

*

　女性は「魅魔」と名乗った。魅了する魔と書いてミマと読むそうだ。博霊神社及び霊夢とはちょっとした縁ある者らしいが、あまり詳しいことは語ってくれなかった。酒に強い彼女は瓶の半分以上を呑んだにも関わらず平然としている。と言うと少し語弊だろうが、ちょっと絡みが増えたくらいで、泥酔してダウンしているチルノや、爆睡モードのルーミア、顔を真っ赤にしてヤツメウナギについて語るミスティアに比べたら平然と言っても差し支えない。リグルはというと、元々強い酒が苦手なので少し口をつけたくらいで、後はヤツメウナギをほお張りながら魅魔に絡まれていた。大妖精は下戸なので呑まないで、やはり魅魔に絡まれていた。
「他人と呑むのは随分と久し振りね。神社が賑やかになってからはあちこちで独り酒だったから、新鮮な気分」
「じゃあ、ここも偶然見つけたんですか？」
「何ヶ月か前にね。桜が咲いたらここで花見酒をしようと。通い詰めたわ」
　ぐい、と瓶を口につける。
「毎日ここに？飽きないんですか？」
「私くらい長生きするとね、小さな変化を見つけないとやってられないのよ。昔馴染みの花妖怪だってそう。毎日花の世話しながら、少し、ほんの少しずつ姿を変えていくその変化を楽しんでる。あんたたちはまだ若い、だから刹那的なものにどうしても目移りしてしまうけどね」
　魅魔の語りにリグルはよく分からないといった感じに首を傾げている。魅魔はからからと高らかな笑い声をあげ、
「今は分からないわよ。そのうちね、きっと分かる。毎日の中で少しずつ違うものを見つけることの意味が、大切さが」
　そう言ってリグルのあたまをくしゃくしゃと撫でた。優しい、母親のような撫で方。初めは威厳そうなその姿に一種の畏怖を感じていたが、この時の魅魔からは母性に近いものを感じられた。

　宴は、月が西に傾いて暫く続いた。

*

　翌日。
　リグルが午前の配達を終えて約束の桜の樹を訪れた時には、既に葉月の姿がそこにあった。
「ごめん、ちょっとお仕事が予定より遅れちゃって」
「いいのよ、私も気が逸るものだから、いてもたってても居られなくて」
　ということは早い時間から来ていたらしい。リグルは申し訳無さそうに再度頭を下げた。
　その下げた頭の前に、差し出される一通の封書と、その上に重ねて、写真が一枚。
「これが手紙よ。あて先は名前だけだけれど……。それとこれ、宛先の人の写真よ」
　住所不定の手紙。やけに白い封筒が寂しい。リグルはそれを手に取ると、葉月の顔に目を向けた。真剣な面持ちで、リグルが持つ手紙を見据えている。体が弱い彼女は、きっと心だけでもこの手紙と共に親友の行方を追いたいと願っているのだろう。
　手紙のあて先には、たおやかな字で『早知へ』とだけ書かれていた。封筒の左端には手書きの四葉のクローバーがある。
「それじゃあ、よろしくね。小さな郵便屋さ

ん」
　葉月は力無げに笑った。親友を探してくれる人が見つかった安心、しかし、まだ百分率を満たさない親友の安否に対する不安。複雑な心境が入り混じった、少し突けば壊れそうな瑠璃の儚さを映し出している。
　リグルは少しでも元気づけてあげようと、葉月とは対照的に力強く微笑んだ。

＊

　早知という目的の人物のヒントを得るため、リグルは仕事で得た情報網をフル活用して人里のあちこちに聞き込みをして回った。
「早知か、知っているぞ。懐かしい名だ。両親を早くに亡くしてな、近くの商家が引き取ったんだが、十四の頃だったかに奉公に出たんだ。世話になった所に恩返しがしたいと言っていたよ、感心な娘じゃないか」
　最初に訪れたのは慧音の所だ。人里とは切っても切れない間柄の慧音のことだから詳しいだろうと踏んでのことだったが、やはり読みは当たっていた。
「それで、早知って人が行きそうな場所とか、知らない？」
「行きそうな場所か、流石にそこまでは知らないな……。葉月が知らないとなると、知ってそうなのは奉公先か、或いは引き取ったその商家の者くらいだろう。力になれなくてすまないな」
　申し訳なさそうに眉を下ろし、せめて、と慧音は紙と筆を取り何やら図面を書き始めた。よく見たら地図である。
「ここに奉公先と、商家の場所を記してある。葉月にすら行方を明かしていないのだから、得られる情報には限度があるかも知れないが……。私もかつての教え子が行方不明だと心配なんだ、見つけてきてくれると有難い」
「は、はい」
　慧音に言われるとさすがに緊張するのか、リグルの返事は堅い。ぴしゃりと兵隊のように背筋を伸ばし、一礼して地図をしまった。
　背を向けたリグルは、慧音が俯きがちに目を伏せていたことに気付くわけもなかった。

＊

　結論からいけば、行方に繋がるような目ぼしい情報は得られなかった。しかも奉公先でも商家でも、口を揃えて人のいい娘だったと言うもので、突然行き先も告げずに居なくなるなどおかしいのではと、ますます疑念が浮かぶばかりだ。
　その代わりと言ってはなんだが、早知という人物についての情報はそれなりに得られた。なんでも奉公先から姿を眩ます時に『お世話になりました。私がもらう予定の給金は育ての親の元へ送ってください』と置き手紙を残していたらしい。更にその育ての家の商家の息子とは恋仲で、その息子は葉月とも幼馴染みだったという。年も三人揃って変わらないとか。
　しかし、置き手紙の件にしても何か不自然である。突然どこかに行ったこともだが、給金を育ての親に渡して自分は一体どうするというのか。何か後ろめたいことがあったのかと思ったが、奉公先でも何も問題はなかったという。
　疑問はたまり続ける膿のごとく、リグルの心を蝕んでいくだけであった。

＊

「あら、珍客ね。一人？」
夜。ふらふらと歩いてやってきたのは、昨日友人たちと魅魔を交えて花見をした桜の樹であった。魅魔はやはりそこにいて、リグルを見つけるなり声をかけた。元気のなさそうなリグルの様子には気付いているのかいないのか、全く触れなかった。
「はい。友達と来る気分じゃなくて……」
「ふぅん、ただでさえ幸薄そうな見た目がさらに不幸そうな顔しちゃって。若いうちからそんなに悩むものじゃないよ」
軽口を叩くのも彼女なりの気遣いなのだろう。顔に悪意が見えない。
「仕事で行き詰ってしまって。思えば無茶な話なのに、どうして引き受けちゃったかなぁ……。でも、断るのも悪かったし……はぁ」
勝手にぶつぶつ言いながらとどめにため息をつくリグル。魅魔は短い呆れ溜息を返し、リグルの前に猪口を突き出した。
「飲みなさい、嫌なことなんて忘れるわよ」
「忘れるなんて……」
「いいから」
遠慮がちにリグルの手に握られた猪口が、魅魔の手によってその口元まで運ばれていく。強引に呑まされたリグルはむせ返りながらも酒を喉に通した。
「な、何するんですかぁ……」
「悩んだって何も解決しないわよ。妖怪なんだからもっと賢く生きなさい、賢く。ほら、今は忘れる。桜が綺麗でしょ？」
魅魔は、今度はリグルの顎をぐいと掴んで無理やり首を桜のほうに向けた。
ざわ、と風が枝を揺らし、桜の花びらが舞い散っていく。そのうちの一枚が、重力に抗いながらも、くるくると回ってリグルの鼻先に着地した。
「くしゅん！」
思わず、くしゃみになる。
「ね、いい眺めでしょ？明日には月も満月になるわ。満月を眺めながら花見、そして月見酒に花見酒。ああ、明日は二本かっぱらって来ないとね」
魅魔は相変わらずからからと笑っている。リグルは何となく、というよりもほぼ無意識に、猪口を再び口に運んだ。喉が焼けるように熱い。強い酒は苦手だが、何となく今は呑んでやりたい気分だった。俗にいう自棄酒だ。
「本当に綺麗よね。桜の樹の下には死体が埋まっているなんて言うけど、そんなんじゃロマンじゃないわ。……といってもこの桜の下には埋まってるんだけどね、死体」
ぶっ。リグルは口に含んでいた酒を思いきり噴き出した。今何と？死体？
「ああ、いきなりで驚いた？」
しかも魅魔はあまり気にもかけてない。
「し、し、死体って……そんな洒落にならない話……。まさか昨日私たちがここでお花見してた時も」
「もうあったよ。ひと月くらい前だし……。そこに居たのよ」
勝手に語り始めた魅魔は、桜の樹の枝の一本を指さした。
「居たって、幽霊？」
「首吊り死体」
「ひっ……！」
思わずリグルは身震いする。
「死ぬのが惜しいくらい、綺麗な娘だったよ。人の好さそうな子でさ、服も上等ものじゃなかったし、手も使い込んだ感じで荒れてたね。年は十五、六くらいだけど、あの若さで随分と働いていたんでしょう。全く、そこまで器量がよくて働き者なら、いくらでも嫁の貰い手があったはずなのに」
魅魔の言葉に、リグルははっとする。酔いかけていた意識は反転して覚醒し、昼間聞いた話が急速に記憶を手繰って押し寄せた。
ひと月前、年の頃十五、六、働き者…。
「……魅魔さん、その……亡くなったって人、外見はどんな感じだったんですか？」
思わず身を乗り出して尋ねる。夜に響くほどに無意識に声は大きくなり、瞳は緊張で丸く見開いていた。
「外見、それなら……どうだったかしら」
「もしかして」
思い出そうとする魅魔を遮って、リグルはその眼前に一枚の写真を突きつけた。

昼間、葉月から預かった、探し人―早知の写真。
「この人じゃないですか？」
　ぴしゃりと突き出された写真をまじまじと眺め、魅魔が出した答えは。
「そうそう、その娘だ。何、あんたの知り合い？」
　予想しうる最悪の現実が、リグルの胸に突き刺さった。
「……な、そんな。予想は、してたけど、でも」
　育ての親も、奉公先の主人も、そして親友ですら分からない行き先。
　それは、冷たい土の下にあった。
「本当に、死ん、亡くなってた……なんて。私、葉月になんて、いえば……」
　泣いているのを堪えているようにも見えた。リグルの小さな体は小刻みに震え、顔は青ざめ、心ここに在らずといった状態だ。
　魅魔は、そんなリグルの背中を優しく撫でた。堰を切ったように嗚咽が響く。早知とは直接の知り合いでもなく、まして依頼人の葉月とも昨日知り合ったばかりで殆ど縁がないリグルだが、あまりの悲痛な結末に泣かずにはいられなかった。

＊

　ひとしきり泣いたところで、リグルは借りていた魅魔の胸から体を引き上げた。
「気は済んだ？……済んでないでしょうね、その顔見れば分かるわよ」
　散々に泣き腫らしたリグルの眼は赤く、しかしどんよりとしていた。
「わ、私、昨日ここで……女の子に会って。葉月って言うんですけど、その子、この写真の子をずっと……ここで待ってて……」
「なるほどね。それは悪いことをしたわ」
「えっ？」
　魅魔の言葉は予想だにしない方向から持ち出された。
「といっても、それが本当にすまないことなのかは分からないわよ。その死んだ子、私がここに埋めたのよ。ここにずっと吊り下がってるのも可哀想だと思って。そりゃ見つからないわよ」
　そして魅魔は、「そうそう……」と続けながら懐を漁った。抜き出した右手が持っていたのは、白い封筒。
「その子の懐から見つかったわ。あんたさっき葉月って名前出さなかった？ここに名前が書いてあるけれど」
　封筒の表をリグルに向ける。なるほど、そこには『葉月へ』と謙虚な字で書かれていた。改めて言うまでもなく、分かる―早知が親友に宛てた、遺書だった。
「自殺、でしょうね。何か思うところがあったのかは知らないけど……」
「じ、さつ……」
　虚ろな声で復唱するリグル。
「今すぐ受け入れろとは言わないけど、リグル。この結果を知りたがっていた人物はあんたじゃないってことを忘れちゃいけないわよ」
　そう。魅魔の言う通り、この結果は本来リグルが知るべきところではない。遺書の宛先でもある、依頼人の葉月が知るべきなのだ。
　だが、リグルは迷っていた。
「言うべきなんでしょうか。悲しむと分かっていても、本当のこと……」
　鮮明に蘇る、葉月の痛ましい程の表情。「最悪の結末」すなわち死を想像した時の、絶望を露わにした表情。
　反面、嘘をつくことも躊躇われる。自分が嘘をつくのが上手いか下手かは関係なく、純粋に安否を気遣う葉月を騙すことも気が引ける。
「何だかんだ言ってもね、悲しみなんて一時的なものよ、大抵」
　逡巡するリグルの心中を察してか、魅魔はあの慈母のような優しい声で語りかける。
「私みたいに長命の身はさ、少しずつ変化する日常に楽しみを見出す。でも人間はそう

はいかないのよね。変化を楽しむ暇が無いほどに時は残酷に過ぎていく。だから人間は忘れようとするのよ、悲しいことを。勿論、簡単に忘れられないこともあるけどね。そういう耐え難い痛みは、人を押し潰す」

　魅魔は早知が首を吊った場所を向いて「あの娘のようにね」と続けた。

「あんたがどうするかは知らないけど、一つ言っておくわよ」

　力むリグルの肩に、魅魔の手が置かれる。

「背負いすぎて自分を壊さないこと。あんたは一人しか居なくて、あんたの命と心は一つしか存在しないんだから。取り替えなんてきかないわよ」

　リグルは黙って、ただ頷いた。

＊

　決断の時は迫られていた。

　葉月は一月待つと言ったが、一月も悩んでいるわけにはいかない。自分の身が持たないし、何より葉月を不安なまま一月過ごしたくない。

　寝覚めの悪い正午、リグルは自分を起こしてくれた蜂たちを送り出して、布団から出ないまま悩んでいた。

「どうしよう……」

　机の上には、帽子と腕章、そして届くことのない手紙と、遺影となった写真。重ねて、写真の少女が遺した、親友への別離のメッセージ。

　春の麗らかな日差しを受けながらも、その光は寂しく反射された。

＊

「……そうか……残念だ」

　心が決まらないリグルは、先に慧音の元へ報告に向かっていた。いきなり話す勇気が無かったこともあるが、慧音に話すことで心の痛みを和らげようとも思っていたのだ。

　報告を聞いた慧音の表情は、いつもの凛としたものから沈痛なそれへと変わった。

「……私なら大丈夫だよ、リグル。寧ろ君の方が辛いだろう。葉月との約束がこんな形になるとは受け入れがたいに決まっている」

　慧音はリグルから何も聞かず、ただただ頭を撫でてくれた。リグルは声を荒げて泣きたい気持ちをぐっと堪えている。魅魔の胸で散々泣いたのを、何度もぶり返すわけにもいかないと自制に必死だった。

　淀んだ心が、灰のような苦し紛れの吐息と嫌な沈黙を漂わせる。慧音の部屋の窓際に挿してある風車がカラカラと音を立てて回っている。その音が、髑髏（されこうべ）のからから笑う声を思わせて薄気味悪かった。

　外ではそんな二人のことなどつゆ知らず、子供達と桜の花が戯れに舞っていた。

＊

　かの桜の樹は相変わらず、幾つもの淡い花をその手に抱いて、たった一人で、むしろ独りであることを誇らしげに存在していた。

　その桜の樹の下へ、半日ぶりに訪れる、小さな郵便娘。決心を胸に秘め、その内ポケットには渡されなかった手紙と、早知の最期の手紙を携えて。

　リグルを待つ葉月は、両手を胸の前で軽く結び、口を真一文字に伸ばしてしかと立っ

ている。姿を見つけると、嬉しいやら不安やら、何とも言い難い顔でそちらを向いた。
　葉月の前に立って尚、否、立ったからこそ、リグルの胸中で躊躇いが渦を巻く。
　だが後には退けない――俯いて外していた視線を葉月と合わせる。真剣その物の眼差しがリグルを捉えて離さない。
「何から、話せばいいか」
　リグルが口を開く。どもりがちな声、泳ぐ目、鬱々した不穏な空気。最早葉月もこの時、結果が思わしくない所までは分かっていただろう。しかしてやはり、次の言葉は、
「……葉月。私は、すごく残念な報告を、あなたに……しなくちゃいけない」
　リグルは無意識に、左胸を押さえていた。心臓が訴えかけるかのごとく激しく鼓動を刻みつける。一瞬で大きな後悔がリグルを襲った。涙が出そうになる。いや、既に目の端には滲んでいる。
「あなたの、しんゆうの……さち、さんは」
　地上に打ち上げられた魚のように、苦し紛れに口をぱくぱくさせ、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。顔は真っ赤に染まり、後悔と決心と、自責の念と、葉月を思う気持ちがないまぜになってリグルを責め立てる。
「この、場所で……亡くなって、いました」
　遂に。
　遂にリグルは、真実を打ち明けた。
　時が止まったかのような錯覚。このまま永遠に止まって欲しいとさえ思うほどに。
　長く、重く、苦しく、身を縛るような沈黙が続いて、
「……うん」
　短く、微かに、葉月は頷いた。
「あり……がとう。見つけて、くれて」
　葉月は、リグルが思っていたよりもずっと、強かった。
「うぅ、そ、そうよね……自分でも、何となくそんな気が、したもの……」
　葉月は泣くまいとしていた。小刻みに震える力のこもった肩がそれを証明している。
「泣いて、いいよ」
　おぼろげな声はリグルのものだった。
「泣いていいんだ。私だって悲しかった。心のどこかで無事でいてってずっと祈ってた……だから、我慢できなかったもん」
「っ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
　それは半日前のリグルと同じように、魅魔に支えられて泣いたリグルのように、葉月も溢れる涙と悲しみと、叫びを一切堪えずに泣き出した。今度はリグルがその肩を抱く番だったが、リグル自身も目に浮かべた涙を頬に流し、声だけは押し殺して泣いていた。
　誰かと別れるのは、人であれ妖怪であれ辛い。魅魔の言うように、長く生きたなら上手い忘れ方だって見つけるだろう。
　だが、リグルは妖怪としては若輩で、葉月はさらに若い人間の娘。二人を咎める者など、この幻想郷のどこを探しても居ないだろう。
　桜の雨が、今は慰みの慈雨のように二人を包み込んでいた。

＊

「ごめんなさい、私ったら」
「ううん、いいの。私もたくさん泣いたから」
　日が暮れかける頃になって、漸く葉月は気持ちに一旦整理を付けてリグルに向き直った。
「それで、これを……葉月に返す分と、新たにあなた宛の手紙」
　リグルは懐から二通の手紙――葉月から早知への分と、早知から葉月への分――を取り出し、葉月に渡した。早知からのほうは、あえて遺書とは言わなかった。
「……早知は、自分で命を絶ったのね」
　あえて言わずとも、意味することに葉月は気付いていた。リグルは否定せずに、強く頷いた。
「……お願い。読んでくれるかしら。私が読んでしまうと、逃げ出しそうで……」
　それは葉月が初めて見せた、弱みかも知れ

ない。手紙の封を開けることもなく、そのまリグルに突き出した。

「いいの?私、関係ないのに」

葉月は言葉では返事をせず、代わりに頷いて答えた。

*

―葉月へ

あなたに謝らなければならないことがあるの。

去年の夏のお祭りのことを覚えてる?あなたはあの日、私に打ち明けてくれたことがあったわよね。

陽平が好きだって。

私は、あなたのこと応援する、と言ったわ。内心では卑怯だとか、ずるいとか、そんな事ばかり考えていたのに。

私も、陽平のことが好きだった。

でも、葉月が先に言っちゃったから、言えなくて。ずるいなんて思っていたけれど、後から思い返せば、ただの意気地なしなのよね。

あなたに嫌われるのが嫌で、独りになるのが嫌で、自分も好きだなんて言えなかった。

葉月を応援するって言ったことだって、あなたに嫌われたくないからだったの。それだけじゃない、ずっとそう……私が陽平を好きだってことが葉月にばれてしまうのが怖くて、あなたを応援するふりをしていた。

本気で忘れようとしていたのかもね、私の恋心。それで取った行動が、本当にどうしようもないくらい、愚かだったわ。

陽平に、好きな人がいるか、って聞いてしまった。

自分でもどうしてそんな事をしてしまったのか、よく分からない。聞いてどうしようと思ったのかしらね。

でも本当に馬鹿なのはその後だった。陽平が出した答えは、私だった。

陽平は、逆に私に恋人になってくれと言って返したわ。嘘みたいで、その時はすごく嬉しくて、あなたに嫌われたくないってこともすっかり頭の中から消えていた。

だから、私は是で答えたの。とんだ裏切りよね。あなたを応援するって言ったのに。

それからずっと、私はあなたに黙って陽平と二人で会ってばかりだった。あなたを裏切ったことが知られたくないのと、罪悪感でいっぱいの私は、あなたに会うのが怖かった。

何も知らない陽平の優しさが怖かった。

あなたに偶然会って何か言われるのではと思うのが怖かった。

悪いのは、本心を打ち明けなかった私なのに。

もう私にはどうしようもないの。陽平を裏切りたくないし、あなたも裏切りたくない。

あなたに幸せになって欲しい。裏切った私が言えたことじゃないけれど、これ以上あなたの不幸を待つのはもう嫌だから……

だから、私は真実を打ち明けて、両親の元へ懺悔に行くわ。あなたを影で傷つけるような真似をした罪を。

葉月。

今まで一緒に遊んでくれて、時にはケンカして、寺子屋の宿題を一緒にしたり、慧音先生に一緒に怒られたりして、私といつも一緒にいてくれて本当に有難う。

そして、そんな葉月の思いを裏切って陽平を奪い、騙し、あなたから逃げたこと、本当にごめんなさい。

別れるまで逃げ続ける私のことを、卑怯者と罵っても構わないわ。

そして、あなたに、陽平に、この世の全てに……

さようなら。

*

さも当然のように、然るべき事象であるかのように、リグルはおもむろに涙を流していた。つぅ、と静かに、温度を失いながら、涙はリグルの頬を伝う。

言葉が見つからなかった。ただただ、虚の世界が心の視界を取り巻いている。その中で呆然と、二人は立ち尽くしていた。このまま永遠に時が止まってしまうのかというほどに。

「何をしているんだ、二人とも」

引き戻したのは、強かな女性の声だった。

「慧音先生……」

人里の守護者が、葉月達の恩師が、そこに立っていた。風に靡く銀の髪が、夕陽を反射して美しい。闇に沈みかけていた二人にとっては、その姿は女神のようでもあった。

「親から連絡があってな、戻って来ないと。もしやと思って来てみたんだが……」

慧音は、リグルと葉月を交互に見、頷いた。既に報告はリグルから受けている。状況は、飲み込めた。

俯く葉月に、もう一瞥。

「とにかく、今ここで出歩くのは危ない。気持ちの整理はつかないだろうが、一旦帰るぞ」

慧音がそう言って差し出した手を、しかし、葉月は取らなかった。

「いいよ、私も一緒に……」

オクターブで低い声。それを遮ったのは、乾いた打音。

ひっぱたかれた葉月が、地面に尻餅をついて崩れる。

「死ぬなんて考えるんじゃない！一時の気の慰みで、取り返しのつかない選択をすることがどれだけ愚かか！」

その一言には、葉月やリグルでは知りえない、深い重みがあった。長い年月を生きてきた彼女は、きっとそんな別れも経験したのだろう。彼女が識り、時に喰らった歴史の中には、とげや痛みも少なくない。

その証拠に、慧音の表情は怒りに交じり、深い哀しみと悔しさが表れている。微妙な角度に歪んだ眉が、それを克明に物語っていた。

「生きろ、何が何でも。早知の死を無駄にしたくなければ、這いつくばってでも生き延びて見せるんだ」

「でも、私どうすれば……」

どうしようもない、はちきれんばかりの思いを、言葉にして投げつける。慧音は受け止め、しっかりと葉月の肩を支え、

「今は分からなくていい。がむしゃらになっていいんだ」

「先生……うっ、うわぁぁぁ――！」

慧音は葉月と葉月の涙を、一緒に優しく包んでくれた。

*

「そう」

彼女らしいそっけない返事だった。

「スッキリしない顔ね。深入りするもんじゃないわよ、そういう事には」

満月が中天を照らし、細やかな草木のざわめきが辺りを支配している。一本寂しく立っている桜の樹の下には、リグルと魅魔の二人だけ。

あれから慧音が葉月を連れ帰り、リグルはどこに行く気にもなれなかったため、一人桜の樹の下で待つことにしたのだ。満月を戴いて花見酒に来るであろう、魅魔のことを。

魅魔は宣言違わず、月が昇る頃にここへやってきた。リグルが自分から待っていること、そして泣きそうな表情でこちらを見てい

ることに気付いた魅魔には、そこでなんとなくリグルが昼間どういう決断をしたのであろうか予想がついていた。
つまりは魅魔が見つけて弔った少女が死を選択した動機も含め、すべてを話して聞かせた。
リグルは、昼間あったことを——遺書の内容、
そして先の反応である。
「でも、葉月はいい子だし、早知って人も、評判が良かったからやっぱりいい人なんですよね。だから……こんなことになると、すごく、悲しくて……」
「恐ろしいくらいにお人好しよね、あんたって。私はそういうの嫌いじゃないけど」
「お人好し？私が？」
「普通、赤の他人のために泣いたりしないわよ。ましてや相手は出会ったばかりの人間。純粋でお人好しじゃなければ、涙なんて流せないわよ」
柄にもなく褒められ、リグルは悲しさでいっぱいだった胸が軽くなるのを覚えた。
「しかし、私には分からないわね」
魅魔は大袈裟に腕組みをしてみせる。
「死ぬ勇気があるなら、どうして打ち明けることにその勇気を使わなかったのか。相手の想い人を取ったことで絶縁する程度の友情なら、死んでまで貫く必要もなかったでしょうに」
魅魔の言葉にも一理ある、とリグルは感じた。だが、それで納得すれば慧音だってそう言っていただろう。そういかないのは、つまり。
「どいつもこいつもお人好しね。優しすぎるわよ、幻想郷はそんな甘ちゃんランドじゃないのにさ」
わざと呆れ顔を作っているが、本気ではないのはよく分かる。声はいつもの調子で、寧ろ好意的な雰囲気だ。
「優しさは強さでもあるし弱さでもあるよ。そういう人間を、私は知ってる」
その時リグルが見たのは、今までに見たことがない、魅魔の弱り目の一面だった。寂しそうに、名残惜しそうに、そして懐かしそうに、まるでそこに思い出が映像として流れているかのように、虚空を見据えていた。
「魅魔さん？」
「ん？ああ、ごめんよ。ちょっと思い出しちゃってさ、あいつの事」
リグルの声で、魅魔ははっと我に返る。
「あいつ？その『そういう人間』って言ってた人？」
「そうそう。生意気だけどなかなか可愛いガキだったわ。騒ぐのが好きで、今でもそうみたいね。異変の度にふらっと出かけてては、あちこちに友達作って、迷惑もかけて。顔広いから、あんたも知ってるんじゃない？人間には住みにくい魔法の森で一人暮らししてて、ミョーな物集めるのが好きな変わり者なんだけどさ、もし知り合いなら、今度もよろしくしてあげてよ。あいつ、強がってても脆いとこあるからさ」
「え、え、魅魔さんの知り合いって……まさか」
リグルの頭の中で、鮮明に人物像が浮かぶ。終わらない夜の異変で出会った、豪快な魔法を放って自分をめったためたにした、黒白魔法使い。神社の巫女から妖怪の山の河童まで、幅広い交友範囲を持ち、宴会でも常連として顔を出す、人気者。
「あー、要らない事話しちゃったわね。ほら飲むわよ。満月に夜桜、最高の花見酒でしょ」
魅魔は詮索を拒否するかのように話を強引に変え、酒瓶を二本取り出した。
「あんたでも呑めそうなの持ってきたわ。呑みなさい、嫌なことは吐き出すなり流すなりすればいいのよ、ほら」
有無を言わさずリグルに杯を持たせ、片方の瓶から酒を注ぐ。透明な液体が、月明かりに照らされてうっすらと輝く。桜の花びらが一枚、杯の中に舞い込んだ。
「い、いただきます」
緊張しつつも、注がれた酒を口の中へ流し込む。ほんのり甘く、そしてアルコールの熱がじわりと体に沁みた。
魅魔も自分の杯を満たし、ぐい、と口に流し入れる。
しばし、言葉なく酒に浸る時間が続いた。

＊

「さて、最高の景色も見られたことだし、明日からまたいい景色を求めて出歩こうかしら」
　ふいに、魅魔が呟いた。
「え、じゃあここにはもう来ないんですか？」
「そうね……だって最高の眺めが見られたことだし。季節がめぐって、またここで素敵な景色が見られたとしたら、来るかも知れないけれど」
「そんなにお酒が好きなら、来ればいいじゃないですか、宴会」
　霊夢は別に宴会に来る者を拒むことはない。宴と酒と風情を愛する者ならば誰だって楽しむ権利がある。魅魔なんて神社に縁ある存在なのだから、参加しても誰も咎めはしないのでは。
　だが、魅魔はふっと笑いながら首を横に振った。
「いいわよ、私は。大勢で呑むのは柄じゃないし」
「そっか……残念です」
　ちょっとだけ項垂れる。妙に子供っぽく見える（見た目が実際幼いことはこの際置いといて）リグルがどこか可愛らしい。
「ま、本当はあいつに会うのが恥ずかしいってのもあるのよね。『一人前になったんだから、一人で生きていきなさい』って置き手紙ひとつ残して行っちゃったから。今更会ってもかける言葉なんて見つかりやしない」
「うー……別れの手紙は嫌ですぅー……」
　微妙にリグルの声の調子がおかしい。魅魔がそう思って覗きこめば、リグルは顔を真っ赤にしていた。酔っている。完全に。
「あーあ……酔いつぶれちゃって」
「心配するじゃないですかぁー……ふにゅぅ」
　リグルの横に置いてあった瓶は殆ど空になっていた。子供とは全く素直なもので、悲しいことを今は忘れろと言われたら思いっきり忘れにかかったようだ。
「うー」
　小さく唸り、魅魔の膝に倒れこむ。
「ま、今晩限りだから、サービスよ」
　そんな蟲妖怪の小さな身体を、魅魔は膝の上で寝かせてやるのだった。

＊

　差し込む朝の陽ざしの眩しさで、リグルは目を覚ました。夜行性の妖怪が夜中にぐっすりとは不覚。と思ってから、さらに一息。ぱっと意識が鮮明になり、感覚から状況が脳内に伝わってくる。
「あわわっ！？」
　頬に当たる柔らかい感触が、首の角度をぐるりと変えて魅魔の膝枕だと気づき、慌てて上体を起こす。魅魔はまだ静かに寝息を立てていた。
「私、あのまま寝ちゃったんだっけ……」
「そうよ」
　狙い澄ましたかのようなタイミングで魅魔、起床。
「ひぇぇ……！あ、すみません！膝借りちゃって……」
「いいわよ別に。減るものじゃなし。っていうか無いし。膝膝言ってるけど、霊体よここ」
　そう言って魅魔は大胆にもスカートをめくって見せた。普通そこにあるはずの二本の脚はなく、代わりにうっすらと白い霊体が腰の下から伸びている。
「えぇぇーーーー！？」
　絶叫。
「あーもう、近所迷惑よ。それに墓なんだから、騒がない。別にこの幻想郷じゃ珍しくないでしょう」
　そう言って、魅魔がおもむろに腰を上げる。
「んじゃ、私は行くわよ。元気でね。仕事頑

張りなさいよ。今日みたいなことがまたあるかも知れないんだし、気持ちとは賢く付き合いなさい」
「は、はい！ありがとうございます！」
　起き抜けだったリグルは、寝ぐせも服の乱れもそのままに、ぴしゃりと礼をした。
　屈折した体から、何かがひらり、舞う。封筒だった。
「あ、これ、魅魔さんから……私に？」

＊

「毎度、蟲の郵便サービスです！お手紙お届けに参りましたー！」
　桜吹雪も終わろうとする春の昼間、元気な声が人里の一軒の家を訪れる。
　彼女の名前はリグル・ナイトバグ。とある理由で、幻想郷のあちこちに手紙を配る『蟲の郵便サービス』を営んでいる、蛍の妖怪だ。
　今日も彼女は、色々な手紙を色々な人に配っている。
「でもやっぱり、お別れの手紙は運びたくないですね」
誰に話しかけるでもないのか、或いは遠くにいる誰かに話しかけているのか。
　桜舞う青空に向かって、呟くのだった。

〈完〉

【あとがき】
　どうもこんにちは、Salkaです。横文字になるのがいやなので以降さいかって言っておきますね。
　今回、小説に初挑戦です。といってもイラスト投稿のほうを覚えている方がいらっしゃるのか知りませんが。リグル歴も投稿歴もまだ浅いですしね。
　それはさておき、鬱い。しかも無駄に長い。描写がぐだぐだなのに、妙に長い。大事なことなので二回言いました。
　テーマが桜なので、幻想郷では妖々夢にも使われた「桜の樹の下には死体が埋まってる」なんてネタを使わせて頂きました。だからこんなに鬱です。
　色々と解説したいのですが、長くなりそうなので補足をちょっとだけ。
　魅魔は、ご存知の方もいらっしゃると思いますが旧作キャラです。といっても一月号で涼音　奏さんがイラストに描かれてるので初出ではないのですが。そういえば月バグでここまで旧作キャラ出してる人も自分くらいですね（十月号、二月号に続いて三度目）
　旧作の博霊神社で祟り神的な方だったり、魔理沙が様付けで呼んでた方だったりします。ちなみに師弟ネタは二次なので今回はぼかしたつもりです。ええ。
　それと、そもそもの郵便サービスですけど、これは完全に自分のオリジナルです。これは〇九年十月号投稿イラスト参照。一応設定とかも色々考えているので、もしかしたら今後もまた出てくるかも知れません。おkって方は生暖かい目で見送って下さい。
　あと、やたら話の流れを魅魔に喋らせることで進めているのは仕様です。困った癖です。指摘されるの怖かったので先に言いました。
　というわけで、色々他にも言いたいのですが、これくらいにしておきます。
　最後に、こんな長文を最後まで読んで下さって有難うございます！

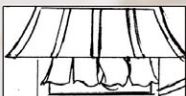
さいか

〈作者コメント〉

私がSSを書くと毎度、前半の描写がごちゃごちゃで後半がボロボロ。

バランスが取れてないのは、後半を締め切り前に急いで書くせいです。学習しようぜ私。

Pixiv、Twitterに密かに生息しています。
宜しければお絡みくださいまし^^;

Pixiv http://www.pixiv.net/member.php?id=1048389
Twitter http://twitter.com/az31ka

**無題**

**千Ｃ（夜騎士）**

*p55～p57*

すいません、ペン入れすら間に合いませんでした・・・。
次はがんばるよ。

**春彩**

**斑**

*p58～p61*

「リリーの寝起きは結構色っぽいと思う」
誰が言ってたのか、あるいは自分で言ったのを改竄したのか。そんな言葉を元に出来上がりました。
肌色と驚きまくるリグルが描けたので夏までは生きていけます。

**リグル、冥界に行く**

**豆板醤**

*p62～p68*

初漫画でした。すっげぇ自由に描きました。ネタを所々仕込みました。俺死にました。残機はあと２つ、ウソw

**無題**

**夜行**

*p103*

桜はとても綺麗ですが、なぜだか見ていると胸が痛くなります。
古語の「愛し」（かなし）という言葉はまさにこういう感情のことを言うのだろうと思い当り、この歌を詠みました。花さか爺さん然り、幽々子様の話も然り、悲しい伝説を多く持つ桜だからこそ生まれる感情なのかもしれませんね。
リグル、リグラー、リグリエーターの方々に心を込めて。。

**表紙**

**小崎**

ヨッパライダー出ましたー！
お花見終了でーす！！

# 漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

### バトンタッチ
涼音 奏

p2

「そろそろ、お仲間を起こしてあげなさいね
--http://rshk.uijin.com/

### 第一回カルテッ討論
preludenano

p4～p7

私preludenanoは各作者さんの自由な創造を応援します！ただし、それを見て相手がどう感じるか配慮することを強く推奨します。

### 無題
ぼこ

p8

※コメントなし

### 蠢々春日
Step

p9～p12

今回は線を細くしてみました、あとリグルの緑髪にトーンを使ってみました

### 二つの死の間で
羅外

p13

自宅でエア例大祭を楽しみながら漫画を描いていたおかげで、今月もなんとかギリギリ締切日に間に合いました。来月こそは余裕を持って、納得できる漫画に仕上げたいです。

### リグると！
ひどぅん

p44

ゆゆ子様の設定が微妙に強引かもしれないですが
まぁ、妖夢さんの言う事なんでここはひとつ。

### 蟲の手帖
HOUSE

p45～p48

今回、扉絵を描く時間が無くなってしまったため、
三連休中の妹に土下座したらあんなことになりました。
どう見ても姫違いです本当にありがとうございました。

### リレー４コママンガ
preludenano（代表）

p49

実は謝らなければならないことがひとつあるんです…。
このリレー４コマ漫画を描いたのは４コマとも自分です。
騙したみたいな感じになってしまいごめんなさい。

### 無題
草加あおい

p50～p52

今月も古いネタですいません。CCさくらも１０年以上前の作品になるんですね。問題は４コマのCLAMP作品が通じるかということでしょうか。

### ほたりぐる～桜編～
怒羅悪

p53～p54

多分ワタシが勘違い、どらおです。
例大祭に参加された方々、お疲れ様でした。
ワタシは東さんのスペースで、
触角付けてカサカサしてましたw

# 月刊ナイトバグ　2010年4月号

2010年3月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌



## 編集後記

ネロ「普通に眠いよ、パトラッシュ……。」
パトラッシュ「グルル……オレサマノアマイイキガキイテキタヨウダナ。」
フランダースの魔物。

ぎりぎりまで作業せず、結果修羅場を迎えると頭の中はこんなのばかりです。すみません。

今月号について、まず、一番驚かされたのは緑さん主催のリレー漫画ですね。企画時から話は聞かせていただいてましたが、完成作品は想像を遥かに超えてました。何がすごいって、内容も突き抜けていましたが、ひと月足らずの間に、あの大人数でリレーを完走されたことが信じがたいです。参加された皆様、おつかれさまでした。

その他に個人的におぉっ！と思ったのは、HOUSEさんの蟲の手帖が月軍の侵略を受けて4コマ漫画になっていたことや、Salkaさんの~~テガミバグ~~郵便娘リグルがSSになっていたことです。皆さん、本当に芸達者というか引き出しの多さに驚かされます。すごいなぁ……。こっそりタマムシ入れちゃおう。

さて、次号はついに創刊一周年を迎えます。
何かあるのか、ないのか、どっちだと言えば、大したことは何もないと思いますが、周辺でイナゴの大発生や佃煮の大ブームくらいは起きるかもしれません。まぁ、次号のテーマが夢オチですので。

夢だけど、夢じゃなかった、一周年。
100万匹のイナゴの影を追いかけて、今後もゆるゆると行けたら良いですね。

2010 / 3/ 22　小崎

## 次号5月号は4月22日（木）発行予定！

※次号の投稿締切は4月15日(木)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

燃え咲くる　桜花に春は輝けど
募るかなしみ　語るすべなし
夜行

月刊NIGHTBUG　2010年4月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

亜斗
ぶーわ
しっぷ
小崎

涼音 奏
Salka
くろと
悠奈
ADDA
IDEA(GAGrim)
キッカ
貴キ
蛍光流動
紅
黒ストスキー
夜行
草加あおい
preludenano
ひどぅん
斑
千C（夜騎士）
豆板醤
HOUSE
怒羅悪
夏樹　真
如月翔
壁々
Step
ぼこ
羅外
東
緑
ポマギッシュ・ポマーダ
長閑
こぶろう